

527

607

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 5^{cm} 0 1 2 3 4 5

始



玄耳庵支那叢書

刺客劍俠

澁川氏藏版



大正
14: 1. 13
丙交

玄耳庵支那叢書の出版に就て

遊川 玄耳

支那に關して少し研究して見たことを纏めて見たいとは多年考へて居たが、あちらに長く居れば居るほど段々むづかしくなつて容易に書き上げられなくなつて了つた。

一昨年病氣で、あちらを切り上げ東京に歸住することゝなつた。幸ひ健康も好くなつたが、もう繁劇な業務に就くのも厭はしくなつて、此のまゝ書物の中に埋まつて死なうと覺悟も定めた。出たらめにどの本か引き出しては讀む、千年二千年昔しの人を相手に閑葛藤を起つて來る、怒鳴りつけるわけには行かぬから、時々筆を執つて此方の申分など書きつけても見たりしてゐた。

其中に大地震に逢つた。住居は無事であつたが、預けて置いた本が神田で焼けた。山東から輸送中の圖書が折角横濱まで着いて倉庫で灰になつた。讀む物が乏しくなつたので却つて書かうといふ氣が定まつた。

玄耳庵支那叢書の出版に就て

友人の立川雷平君が見えて雑話の序に、此の話をすると、多年出版に経験の深い同君が、早速出版に關する一切の計畫を立ててくれて、とうとうかうした發表とまでなつたのである。

どういふ風に書くか……が、第一の問題であつた。其は直に決めた、解り易く、すん／＼読み進まれるものでなければならぬ、講説の押賣よりも材料の供給をするとしよう。誰に讀ませるか……支那に關する豫備智識の乏しい人に、すら／＼と讀ませて、解らせて、要領を得させて、次第に支那に對する興味を有たせる様に誘導したい。大體の要領を得させたい……支那は書物が多過る、書き方が凝つてゐるから含蓄はあるが、明白を缺く、其れをなるべく少く讀んで判然と解る様にしてあげなければならぬ。と言つて簡單々々ばかりではいかぬ、代表的な重要なものを選んで、其を十分精密に書くことだ。

如何なる題を選ぶか……十冊二十冊であの廣い古い支那の紹介が出来るものでない先づ差當つて支那の特殊な點を擧げ、日本と色彩の異つてゐることを看取させるものでなければならぬ。其で第一集に先づ六題目を選んだ。(大正甲子仲夏)

刺客劍俠の卷頭に

大自然の偉力に對しても、人間界の權勢富貴に對しても、驚くべき柔順を示すものは支那民族である。極端なる運命服従主義は幾千年來養つて來た彼土の民族性である。然し熱く觀ると彼等の血液の中に一脈の反抗心はどす黒く流れてゐる。神仙湯仰の心はやがて自然界に對する叛逆でなくて何であらう。出來得べきを望むに止まらず、出來得べからざる希望をかけて、蒼空を翔り壺中に潛み、その壽を無窮ならしめんとする如き、自然力の前には痛ましくみじめな人間の運命を否定せんと企つるものに外ならないのである。

若しそれ權勢と富貴とに對しては刺客が現はれ、劍俠が横行し、盜賊が跋扈して、如何なる場合にも安心を與へない。一面忍順の甚だしきだけに、その鬱屈せる不平は勢ひ激越の手段によつて勃發する。單身匕首を呑んで咸陽宮に始皇を脅かした荊軻の如き、支那刺客の敢死奉義の鐵石心は驚歎すべきものである。劍俠に至つては或は仙に類し或

527-603

は盗に近く、變幻出沒測るべからず、一劍義に仗りて相救ふ義憤の志は、清高壯烈を極め、名を後世に誦はるゝものが頗る多い。戰慄すべき殘虐を敢てする劫盜にも亦往々にして一脈の熱血は横流してゐる。

雜劇に歌曲に小説に、路傍の講書先生の舌頭に、傍若無人に活躍するこれ等刺客劍侠は、この民族に取りて一つの偶像であり神であつて、悲痛なる反抗思想の人格化である。日本に於ける宮本武藏や幡隨院長兵衛の武俠傳が、隱々の裏に如何なる影響をわが國民性の上に及ぼしてゐるかを察する時、刺客や劍侠の行蹟が支那民族性の形成に深甚の關係を持つことは又首肯されねばならぬ。

本篇に於ては刺客劍侠の若干と、劍俠拳勇の奇蹟的行爲を縁として、一方には賊團、一方には妖異、迷信の範圍に及んで多少の小話を掲げることにした。逸すべからざる好題目でありながら、而かも机邊にその材料を堆積して置きながら、遂にこの篇に洩らしたものが少くない。著者にありても頗る不本意であるが病纏思ふに任せず、偏に讀者の寛恕を乞ふところである。

十三年十二月

澁川玄耳

おわびごと

この叢書はいふまでもなく玄耳氏が全部に亘つて自ら筆を執つたものでなければなりません。縦令その材料の整理には助手を用ふることがあつても、本文に現はるゝところは、氏一流の辛辣にして而かも暢達を極めた名文でなくてはならないのです。著者に於ても將た出版者に於てもその覺悟であることは申すまでもありません。恐らく讀者諸彦の期待さるゝところも其處だらうと思ひます。

然るに氏は先月の末から健康を害して、今尙氷囊を頂いて榻上に横はつてゐます。その病苦をも顧みず、本篇の原稿を作成したのですが、遂に途中から醫師の禁制を受くるやうになりました。發熱してゐながら夜半過ぎた二時三時まで執筆してゐたといふ事です。氏が中途にして一時靜養を宣告された時は既に編輯締切の期日に差迫つてゐました。而して手近なために後廻しになつてゐた題材や豫定のみで着手の運びに至つてゐない資料は枕邊に堆くなつてゐました。氏としては此處で出版の遅延を生ずるに忍びない感が

おわびごと

強かつたのです。讀者に對しても又出版者に對しても、氏は痛くその責任感に悩みました。結局は二十五年の厚誼を享けてゐるの故を以て、最も不適任な私が、兎も角も一冊に補ひ充たす役を負ふことになりました。

讀書力の乏しい私一人が字引を相手にやつてゐたのでは、幾日を要するか判らないので、門下諸氏にも手傳つて貰ひ、盲滅法にペンを走らして、辛うじてこれだけの分量に編み上げました。著者たる玄耳氏が遂に一度も目を通さない項目も若干はあります。さういふ處には行文の晦澁なのや、穿鑿の不徹底なのや、其他如何なる間違があるかも知りません。無力ながらも今少しく整頓させたいと焦慮しましたが、何分原稿の居催促を受くる状態で、私としても不本意千萬に思ひます、玄耳氏も定めて苦笑するでせうし、讀者も壓縮されるだらうと思ひますが、本篇に限つて右の事情でしたから、凡ての不備に對しお許しあらんことを懇願致します。

三篇以後はこの埋合せに玄耳氏が必らず會心の文を以て見ゆるであります。

十三年十二月二十日

坂元雪鳥

刺客劍俠 目次

刺客、游俠、刀劍

專諸と伍子胥	(壯烈な漁夫の死。一人に屈し萬人に伸ぶ)	一
豫讓	(國體の便器。炭を呑みて聲を潰す)	二二
曹沫	(約に背かば天下の信を失はん)	一七
荆軻	(死して信を示すのみ。悲壯なる送別會)	一九
史記遊俠傳	(朱家。田仲。劇孟。郭解)	三二
古今刀劍錄		四九
千將莫耶		六三
金鉤		六五
湛盧の劍		六七

劍俠、盜賊、幻妖、邪神、狐

白猿 (越王女劍俠を招く。一本の竹が二人の武器) 一

白衣の美人 (壁を歩く藝。宮苑の賊。俠美人の救援) 二

俠僧 (射貫かれて知らぬ貌。頭から弾を抽く。不孝の子殺害依頼) 七

京西の老人 (桶屋の爺に戒めらる。弓矢ばかりを待むな) 一二

蘭陵の鬚切の劍 (凡眼人を誤まる。七口の長劍を舞はず。鏡を見てびつく) 一四

盧生 (爐火の神技。先づ命から貰はう。賢仙人退治) 一

毒隠娘 (愛護はる。生首が水になる。口中から躍り出る) 二〇

荆十三娘 (愛護を奪はる。兩親の生首) 一九

田膨郎と少僕 (皇室の寶紛失。青年の奇行) 三〇

崑崙奴 (美妓の手から。奴隷誌を解く。斯落の相談) 三五

買人の妻 (縣官の零落。手提袋に生首) 四三

虬鬚叟 (子孫七代までの罰。呂用之懐え正る) 四七

紅線 (鼓の音に吉凶を知る。七星劍の飾。情別の宴) 五三

虬客 (紅拂の妓。酒の肴は心臓。東南に事あらん) 六一

燕使 (秘蔵と闘難。頭巾と刀の間違) 七四

賊船 (時ならぬ停船。少年客の一喝。見損なつた) 七七

有外山王 (月下の閑談。人間取殺しの手段。深夜の怪音) 八〇

江進士 (啞かと思ふ。僧の生首) 一〇〇

張訓の妻 (甲冑の不平。生首の甘煮) 一〇八

潘辰 (二箇の彈丸。お手並拜見) 一一二

洪州書生 (鞋賣の貧少年投げ出した生首) 一二四

義俠 (四人の顔み。妻の悪智恵。床下の怪漢) 一二六

河海客 (美人漁り。今夜は泊めてくれ。一族縛り) 一三八

楮復	注	(虎頭板助の偉漢。箸の先は急所)	二二六		
麻子	城	(無實の罪。殺したは我が妻)	二二八		
江寧三烈女		(掠奪美人。賊王毒殺。油漬にして焚殺)	二三〇		
園	碁	(兩碁客の頓死。四子譜の起原)	二三三		
九	老	會	(上席は百四歳。返事に困る)	二三五	
汪	十	四	(双矢空中に相結ぶ。再舉の懇請)	二三七	
繩	技	女	(叔父は破落戸。秀才と美人。雲中の豪傑)	二四〇	
郵	小	娟	(腕自慢の村長者。女の怪腕。千金の謝禮)	二四九	
商	三	官	(酒の上の争。三官の脱走)	二六〇	
俠	と	仙	(妓の愛に溺る。呂公祠中の異人。要諦三無)	二七三	
妾	擊	賊	(本妻は姦婦。身分を知る)	二八〇	
武	技	技	(三箇月で免許皆傳。李超大敗北)	二八三	
鐵	傘	の	人	(海賊の出沒。答へて曰く技將軍)	二八七

雌雄の二劍		(名所めぐり。妖僧に渡はれた少女)	一九三		
謝小娥		(夢中の告。謎を解く。仇討。貞節を全うす)	一九八		
劉無雙傳		(京師陷落。古洪の名を聞く。復活。信義の死)	二〇三		
奇	勇	(彈をはねかへす頭。海賊王。娘の怪力。怪漢の末路)	二一九		
白	和	尙	(八十老人の勇氣。指頭の早技)	二二〇	
賣	蒜	叟	(煉瓦塀を凹ます鐵拳。硬い腹の皺)	二三一	
棺	を	車	(稀代の番頭。夫の棺を破る)	二三四	
姚公遇劍仙		(命の代の十萬兩。知らぬ間に首が無い)	二三七		
孫	烈	婦	(少女の武藝。讀經の僧を罵倒す)	二三九	
二人の勇士		(莫迦々々しい勇士)	二四一		
乞	丐	報	恩	(賊群を食に追拂はる)	二四二
奇	女	子		(選ばれた夫。勇將を捕にす。官軍の大將は夫)	二四四
小林寺の試験		(學法卒業。意外の援助)	二五六		

董金甌 (腰の千兩。美人と戦ふ。意外な花聲) 二五九

姚劍仙 (汚ない上客。口から吐く鉛) 二六二

南海生 (試合を挑む。一人の敵と萬人の敵) 二六五

大宣公 (武者修行。時利あらず) 二六九

陳籜桶 (千瀉に寝て水に浮ぶ) 二七五

羅臺山 (奇石を集む舟一艘。老爺の命乞ひ) 二七七

揭雄 (鈍物の鋭鋒。前身は勢山の學僧) 二八一

寶劍 (窓のやうな大きな口) 二八五

湯生馮生 (兩少年運命を占ふ。湯生は仙人生活) 二八八

二女劍仙 (不思議の少年客。飛劍の神異。宿塵離愁) 二九五

劉生 (竹林の奥に少女の群。窓外の虎聲。奈落の底) 三〇七

廬山僧 (恐ろしい岩窟の一夜。かたみの香) 三一九

韓五 (強盜開業。飛劍の實験) 三一八

俠尼 (線香で叩きつけらる) 三二二

偉丈夫 (賊將の風采。累々たる耳さ鼻) 三二七

木造の鶴が飛ぶ (無用の用を知らず) 三三二

尸羅の幻術 (耳から出た龍と虎) 三三三

印度の怪僧 (死體は竹杖。斬った首を接ぐ) 三三四

軍用金集め (多々益々呑み込む瓶) 三三六

畫中の美人 (無用の忠告) 三三九

仙道修行失敗 (罰せられて靈芝耕作) 三四二

落第仙人 (見て来たやうな虚言) 三四三

絶妙の宣傳 (癡らぬさは言はさぬ法) 三四四

虎に啗はれぬ法 (口ほどには嘘が無い) 三四五

親か子か (若旦那は白髪の人) 三四六

牛となり水を守る (白澤の決死牛) 三五七

紫姑神 (人形が酔つて踊る) 三四九

阿神 (神意を動かす供物の多寡) 三五〇

晝は縣令、夜は冥官 (晝夜反對。冥官の報告で賊を捕ふ) 三五一

樹の洞に魚遊ぶ (肴屋の惡戯が神となる) 三五七

墓の水を賣る (瘡の妙藥) 三五八

屍體を抱く (子への遺物。死んだ姫の子) 三五九

莊氏の三虎 (陽氣な納棺式) 三六一

秦州冤獄 (叔父の誣告。眞犯人自白) 三六四

鐵肚皮 (腹にさはれば人介る) 三六六

夢中の復讐 三六八

淫婦狐となる (古塚にぼんやりして) 三六九

老狐の補佐 (狐に教へられる名太守。老狐の手落) 三七〇

老狐と佛教 (天狐の所業) 三七一

高士傳 附 錄

高士傳 三七一

專諸と伍子胥



我が子の花
嫁を奪ふ

不忠の臣か
不孝の子か

楚の平王が呉の公子光の大軍を撃破した後、宮廷内は素亂を極めたもので、太子健の妃として秦から迎へた姫は、未だ太子の室に入らぬ前に平王が自ら奪ひ取つてしまつた。その時の太子大傅は伍奢で、少傅は費無忌であつた。平王に太子妃の横奪を勸めたのは費無忌であつた。無忌はその爲に太子の怨を受けたのを懼れ機先を制して、太子と太傅伍奢とが王位篡奪の隠謀をめぐらしてゐると平王に纒言した。太子健は驚いて宋へ亡命し、伍奢とその長男の伍尚とは誅せられた。奢の子の伍子胥は太子建のあとを追うて、楚を逃れ出で宋へ走る途中、申包胥といふものに逢つて語へた。

「父と兄とを楚王の爲に殺された、何うしてやらうか」
「復讐せよと勸めると不忠の臣たらしめることになるし、復讐するなといへば不孝の子たらしめることになる、わしにも何方とも勸めかねる」

と申も困つてしまつた。子胥は

「父母の讎は俱に天を戴き地を履ます、兄弟の讎は俱に域を同じうして壤を接せず、朋友の讎は俱に郷を隣し里を共にせずといつてある。父兄の讎を復せずには置かれぬ」と慨然として去つた。彼は宋に入つて太子建に従ひ、さらに晉に行き鄭に赴いた。その時、晉に鄭の國を併呑する計畫があつて、太子建もそれに關係してゐたために、鄭の國で殺された。伍子胥は又そこを去つて遂に吳へ亡命することゝなつた。

楊子江岸まで遁れた時。背後には早くも鄭の捕手が追ひ迫つて居た。宛も下流から浜つて來た漁船を見付けたのでこれ幸と「渡してくれ」と頼んだ。漁夫は船を寄せようとしたが、傍に様子を覗ふ者があつたので、殊更に迂回し蘆の茂つた隠に寄つて子胥を乗せ、千尋の深水を渡つた。

漁夫が見ると子胥は如何にも空腹さうだ。

「この樹の下でお待なさい、何か食物を持つて來て上げませう」

と立去つた。子胥は妙な爺だと思つたが、葦原へ潜り込んで待つてゐると、麥飯に魚などを持つて來た。子胥の姿が見えぬので、

蘆中の人

「蘆中人、蘆中人。」

豈非窮士乎。如是至再」

と鼻唄もどきに呼んだ。子胥はがさ／＼匂ひ出した。

「空腹さうだから飯を持つて來たよ」

「これは／＼、命は天にありといふが、今は爺さんにあるんだ。勿體ない有難う」

二人で箸を執る。子胥は満腹した。腰に佩びた百金の劍を解き、飯の謝禮に漁夫の前へ置いた。

「これは先代の楚王から拜領の名劍、更に七星の耀がある。値段は百金だ。お禮に差上げる」

「さうか。楚の布達では、伍子胥といふものを捕へて差出したものには、恩賞として粟五萬石と、爵執圭を賜はると聞いてゐる。劍を貰つて何になるかい。それはいゝから、早く行くがいゝ、ぐ／＼して楚の者に捉はれさつしやるな」

「有難う。爺のお名前は」

「いかん／＼。賊と賊ぢや、俺は楚の賊を渡した賊だ、これは言はんでも直ぐ判る。改

まつて名宣る要があるものか。君は蘆中の人。俺は漁師の爺。それで澤山。身を立るところを忘れなさんな」

「わかつた」

といつたが又、爺に注意して、

「腕の骨からでも脚が付く。こぼしなさんな」

漁父は「諾し」といつた。

子胥は數間行つて振返ると、爺は漕ぎ出した舟を自から覆し、濁流の下に沈んで了つた。子胥はその壯烈に驚き慨然として暗黙すること少時、遂に呉へ往つた。

亡命の旅は慘憺たるものであつた。食物はなし、病氣には罹る。乞食をして建康の附近漂陽まで辿り着いた時、川端で綿を打つてゐる女があつた。見ると傍の筥に飯が入れてある。饑しい子胥は一飯の恵を乞うた。

「一口食はせてくれまいか」

「妾は老母と二人暮し、三十にもなつて嫁にも往けぬものが、飯など上げられますか」

「困つて居るんだ、少しくらゐはいゝだらう」

壯烈な漁夫の死

女は只の乞食でないと見て取つたらしく、筥から飯を出し、汁を添えて丁寧に跪いて差出した。子胥は二杯平げて止めると、女は

「まだ遠く御出になるのに、なぜ澤山召上りませんか」

といつた。子胥は又食つた。腹に十分になつたので、

「ありがたう」

と禮を言つて立たうとすると、女は嘆息した。

「母と二人で三十年の間、固く操を守つて、嫁にも行かないでゐるものです。知らぬ男に飯を一度食はせたとして、それが無調法になりませうか。莫迦々々しい。お立ちなさい」

子胥は起つた。振返つて見ると女は川へ飛び込んで自殺して了つた。これまた女の豪傑に相違なかつた。

呉の都に着いた子胥は、顔を穢なく塗り潰し、髪を振り亂し、僞狂者になつて市中で乞食をしてゐた。その何者なるやを知るものはないが、町役人に觀相の上手な男があつて子胥を見て感嘆した。

「自分は多くの人を相たが、かやうな豪傑を見ることは始めてだ、恐らく亡命して來た

烈婦の一飯

他國の重臣であらう」

市吏はこの由を王に上聞したので、吳王僚は早速この不思議な偉丈夫を召し入れた。公子光が聞いて、近頃楚の消息に依れば、楚王は忠臣伍奢を殺したさうだ。その子の子胥は智略あり勇武の才である。恐らく父の讎を報せんが爲めに吳へ來たものであらうと竊かに喜びこれを部下に付けやうと考へてゐた。

子胥が市吏に伴はれて吳王の前に出ると、王僚は見て驚いた。身装こそ汚いが、身長一丈、腰の廻り十圍、眉間一尺の偉丈夫である。共に語ること三日、王僚は深く敬服した。子胥に復讐の意があり、楚を攻むるの利を説かれ、直ちに大軍を興して楚に攻入らんとした時、公子光が王を諫めた。

「伍子胥が楚を攻めようとするのは、彼が私怨を晴らさうとするので、我が吳國本位の主張ではありません。吳に取つては寧ろ不利益と存じます」

公子光の諫言も亦吳の利害を本位としたのではなく、竊に企てゝゐた王僚殺害の場合に、子胥のやうな勇者が王の側に居ることは甚だ都合が悪い。未だ熱せざるに先んじて王と子胥との結合を妨げようといふのであつた。子胥は公子光の胸中を觀破して居た。

公子光の隠謀

彼は再び王僚に謁し、

「諸侯は匹夫の爲めに師を興さずといひます通り、只今楚を攻めることは正しい方法ではありません。強いて楚國攻撃を決行されるならば、私だけは從軍をいたすわけに参りません」

と諫めたので、その場は伐楚の企を中止した。

子胥は公子光と王僚との間柄を洞察して居た。然しその望を遂ぐるには時機尙早いことも知つたので、退いて野に耕し、竊かに勇士專諸を公子光に推薦した。子胥と專諸とは、子胥が吳へ亡命した當時からの知合である。

曾て子胥が吳の境の堂邑といふ地方を通つた時一勇士が人と鬪争して居るのを見た。勇士の怒氣を含んだその勢は、實に千万人と雖も敵すべからざるものであつたが、やがてその妻が出て來て

「喧嘩など止めて家へお歸りなさい」

といふと、急に顔を柔げて歸つて行つた。子胥は「變り者だな」と感じ入つて聲を掛けた。

「君の怒つた勢も偉いものだが、一人の女に聲を掛けられて忽ち怒を収めて了つたのはどうしたんだ」

一人に屈し
て萬人に伸ぶ

「君は俺の容子を見て、大莫迦者ぐらゐに思ふだらう、その輕蔑したらしい言葉遣ひで見ると……だがね、一人の下に屈するのは萬人の上に伸びることなんだぞ」

子胥は驚いてその男の顔を見た。預骨高く聳えて目が深く凹み、胸は虎の如く、背は熊の如く、實に稀なる豪傑であつた。即ち專諸である。爾來懇な交際を續け、何かの際に役に立てようと考へて居たのだつた。

專諸を得た公子光は非常に喜び、優遇を加へた。

「君を予の幕僚に得たことは、天が予の失つた吳の國を取返す途を開いてくれたのだ」といつた。專諸はその言葉の意味を怪しんだ。

「先代の王夷昧の後に總領の僚が王位に即いたのは當然のことで、あなたが失つたと残念がるのは見當違いぢやありませんか」

吳の王室の
お家騒動

「イヤさうではない。予の祖父壽夢王の長男が予の父諸樊で次が餘祭、夷昧、季子札の四人の男子があつたのだが、四人のうち末の弟札が最も聰明だつたので祖父はその末子

に國を譲りたい爲めに兄弟順に王位を譲れと遺言して死なれたのだ。祖父の遺言通りにすれば、夷昧の後には札が王位に、即かねばならぬのに札が辭退した爲めに夷昧の子僚が即位して居る。だが正しい順序から兄弟順で行けば札に、嫡子相續にすれば予の父は正嫡だから、その嫡子たる予が王位に即くが當然なのだが、不幸にして君のやうな有力な人の援助がなかつた爲めに國を僚に取られ、自分は臣として甘んぜねばならなかつたのだ。今予が僚に代つて王となつても誰が怪しむものがあらう。叔父札が歸國しても決して予を王位から引下すやうな心配はない」

公子光が專諸に此の大望を打ち明けたのは、專諸を優遇すること九年に及んだ時のことであつた。時恰も王僚は楚の平王の死に乗じ遂に楚國征伐の軍を興し、弟の蓋餘、屬庸二人を大將として楚に攻入り、潛の城を包圍させ、叔父季札に晉國駐劄を命じ、楚との開戦に就いての列國の動靜を監視させたが、吳軍は楚軍の爲めにその退路を斷たれ、蓋餘、屬庸の二將は重圍に陥つて歸ることが出来なかつた。

伍子胥は窃かに時機の到來を知り、公子光に會つて隱謀決行を勧めた

「王はとうとう、楚へ軍を向けましたな、王の弟蓋餘、屬庸の二將軍は楚の爲めに退路を

断たれ、どうなることかその運命は判らない。專諸を役に立てるのは此の際でございませう』

公子光は專諸を召して大事を依頼した。

『今王の二人の弟は楚の圍を受けて進退を失ひ、季子札はまだ歸つて來ぬ。かゝる絶好の機會は二度と求めることが出來ない。自分こそ眞の王の相續者なのだから、一肌脱いでくれ』

『よろしうございます。王僚を殺すには何の造作もありません。二人の弟は楚で圍まれ、残つて居るものは老母と幼兒ばかり、王の朝廷には一人も骨の堅いのは居りません。私が一腕揮つたら誰が立向ふことが出來ませうか』

頼もしき一語に公子光は頭をすり付けた。

『萬事君次第だ』

公子光は早速最後の手段を取つた。

吳王僚の十三年四月丙子の日、公子光は自宅に宴會を催し、地下室に豫め數名の武装した強勇の壯士を潜めて王僚を招待した。招待を受けた王僚は母に話した。

飽き宴會

『公子光が特に酒宴を開いて自分を招待するのは少々薄氣味が悪い。大丈夫でせうかな』
『あの光はいつも快快たる氣色で、どうやら不平を有つて居るやうだから、餘程注意をなさるがい』

所謂虫が知らせたのであらう。王僚は肌に棠鐵の甲を三重に着込み、王宮から光の屋敷の門まで沿道の左右には護衛兵を堵列させ、光の家の宴會場に臨んでも、王僚の左右には僚の身寄の者が鉞といふ長い兩刃の劍を挿けて侍立するといふ物々しさであつた。

酒宴は開かれた。酒數行に及びや、醋になつた頃、突然公子光は脚が痛むといひ出した。『綱帶をして來る』といつて座を外して地下室に入つて行つた。丁度卓上は淡い味から濃厚い味へと半以上進み、魚の蒸焼が出る時で、地下室の料理場から見事な魚が運ばれる。器に盛つて恭しく捧げて進むのは專諸であつた。先づ王僚の坐前に置いた。魚の蒸焼は大抵鯉の丸焼で、一座の客全部に足る程の大魚を巧みに體を崩さず焼いて出す。客はそれ／＼欲するだけを匕で撈り取るのだが、王僚には特に專諸が取つて差上げる。魚の腹まで割いた時、氷の如き鋭い匕首が現はれた。電光石火、專諸は右手にその匕首を執り、左手に王僚の胸倉を握つた。すわ一大事、王の左右の者は抜き翳した長鉞を一

魚腹の劍

齊に專諸に向ける。鉞の刃は專諸の胸に織るやうに交つたが。彼は自若として先づ王僚の胸を開き、ぐざと匕首を刺した。刃先は三重の棠鐵甲を貫いて、背後まで刺し通り、王僚はその場に即死した。同時に數十の長鉞は專諸を膾のやうに刻み、これまたそこに絶息して了つた。その物音と同時に公子光が潜めて居た地下室中の壯士が亂入して王僚の従者は悉く殺された。

公子光は遂に自立して吳王となつた、閻閻と稱したのはこれである。閻閻の爲めに大事を決行した專諸の遺子は後に客郷に拜された。

豫 讓

晉の文公が霸を稱へてから晉は支那の中央に偉大なる勢望を有ち、周末當時の最大諸侯であつたが、范氏、中行氏、智氏、魏氏、韓氏、趙氏の六人の重臣が國政に與り、遂にこれ等重臣の爲めに國を分割されて了つたのである。この六卿も互に攻伐を重ねて、韓、魏、趙の三國となり秦の始皇の時に及んだので、最初に滅びた范氏と中行氏の兩家

髒器の便器

は残る四家に分割された。その際最も多く兩家の知行を占領したのは智伯であるつた。智伯は非常に剛愎貪暴な人で、遂には韓、魏、趙をも併呑せんとするの野心を抱き、三家に對し非道な知行地の割讓を迫り、屈服した韓、魏の兵を合して、割讓要求に應じなかつた趙の首都を包圍したが、内心怨を含む韓、魏が裏切つて趙に内應し、反對に智氏を攻めて遂に智氏を討ち滅ぼし、智氏の領地は悉く韓、魏、趙三家が分割した。就中趙襄子はひどく智伯を怨み、智伯の髒器を取つて便器にしたといふ極端なことをやつた。智伯の臣に豫讓といふものがあつた。初め范氏や中行氏に仕へたのだが、兩家では甚だ優遇しなかつたので、豫讓は兩家を見限り、智伯の臣となり大に用ゐられた。然るに幾何もなく智氏は滅ぼされ、剩れ趙襄子が主人智伯の髒器を便器にしたと聞いて悲憤に堪へず世を捨て、山中に逃れた。

「噫、男子は己を知るものゝ爲めに死し、女は己を愛するものゝ爲めに容かたぢづくるといふではないか。智伯の怨を晴さずかたぢに置かうか」

彼は姓名から服装まで人に判らぬやうに變装し、趙襄子の身邊に近づく爲めに、わざと罪を犯して勞役の刑人となり、趙の御殿の廁掃除の仕事させられることになつた。

彼は非常に此の苦役を喜び、窮かに褻子が圃へ入るのを待つて居た。

怖ろしい者が狙つて居るとは夢にも知らず、趙褻子が圃へ入らうとすると、俄かに胸騒ぎがする。兇漢が潜むで居るに違ないと、圃掃除のものを牽き出させて見ると、それは智伯の舊臣豫讓であつた。

『已れ智伯の驕！』

と匕首を逆手に誚褻子に近寄らんとした。左右のものが引捕えて殺さうとするのを趙褻子は抑えて

『彼れはあつばれ義士ぢや。此方から避けて居ればよい。智伯は一家絶滅したのだ。その臣下として復讐をしようといふのは天下の賢人の志といふものぢや』

とそのまま豫讓は放逐された。その後豫讓は全身に漆を塗り鬚や眉を剃り落して癩病患者のやうになつり、惨たらしく容貌を變へて市中に乞丐となつた。物乞ながら妻の許へ行たが、妻子もそれとは判らない。

『容貌は夫と似もつかぬが、何といふ夫に似た聲の人だらう』

といつた。豫讓はその聲をも變へようと炭を呑んで啞者になつた。義士の行にしても

炭を呑んで
聲を潰す

あまりにその身を苦しめ方が慘虐なので友人達も呆れ、

『君のやり方は、徒に困難な割に効果はないだらう。感心な志とは謂へるが、智者とは謂はれまい。君の才を以つてまじめに褻子に仕へるならば、褻子の信任を得るにきまつてゐる。そして樂々と褻子の身に近寄れたら、その時こそ何の造作なく本望を遂げられるではないか』

と忠告したが、豫讓は冷然と嘲笑つた。

『なんと、先の主君の爲めに新しい主君を害するなどは君臣の大義を亂るものだ。いかに。俺のする事は君臣の義を明かにしようといふので、樂な方法を執らうといふのぢやない。一旦主人として身を委ねた上で、その主人を殺さうなどは、主君といふものに二心を懐く以ての外の了簡だ。俺が人の出来ぬことをするのは天下後世の臣下として二心を懐く奴原を慚死させようといふんぢやぞ』

友人は二言となかつた。しばらくして趙褻子が外出すると聞いた豫讓は、通過の道筋に當る橋の下へ身を潜めて褻子の通るのを待つて居た。やがて褻子がまさに橋を渡らんとした時、馬が何に驚いたか首を上げて進まない。

「また豫讓ではないか、探して見い」
探させると果して豫讓だつた。襄子は大に詰責した。

「其方は嘗て范中行氏に仕へたではないか、智伯がその范中行氏を滅した時は何等報復の様子もないのみか、却つて智伯に身を寄せて臣下となつたのであらう。然るに智伯が死んでから余に讎を報じようとおあまりに報効いのは辻褄が合はぬぢやないか」

「それは違ふ。拙者が范中行氏に仕へた時は世間並の待遇であつたから、拙者は世間並に報いたのだ。智伯は拙者を國士として待遇してくれた。それ故に國士として恩遇に報いるのだ」

襄子はこれを聞いて喟然として歎息し、その志に涙を揮つた。

「あゝ豫讓子、君が智伯の爲めに盡したその名分は十分に遂げたものだ。余も一旦君を赦した以上これも十分だ。君は君の思ふ通りにするがよし、余は君をこのまゝ放しては遣らぬ」

それつと警護の武士共に取り巻かせた。取り巻かれながら豫讓

「明主は人の義を遂げんとするものゝ、邪魔立はせず。忠臣は名を成す爲めには死をも

衣を割いて
怨を晴す

厭はないと私は聞いて居ります。趙公には先に一旦私を赦された。天下恐らくあなたの賢明を稱揚せぬものはありません。只今此の期に及んで私は潔く殺していただきませう。が最後の御願には、趙公のお召物を拜借し、怨みの一刀を浴びせることが出来れば死すとも心残りはありません。腹心を布いての願でございます」

襄子もその義心に感動し、衣一重を脱いで豫讓に渡させると、豫讓は三たび躍り上り、天を呼び笑聲を上げてその衣を斬り裂いた。劍の當る處、襄子の衣から血が流れた。襄子はその行を止め車を返さんとし、半車輪の廻つた時は、已に豫讓は自から劍に伏して死んで居た。その日これを聞いた趙國の人々は暗涙を催さぬはなかつた。

曹 沫

曹沫は魯の人である。勇力を以て魯の莊公に事へてゐた。公は曹が力を愛し魯の將として、隣國の齊と戦はせたが、三度まで敗北してしまつた。莊公は懼れて遂邑(山西省)を齊に讓つて和睦を結んだ。敗北はしたがそれでも曹沫は元のまゝに魯の將であつた。

和解の席上で脅迫

齊の桓公は遂邑を得て和を講ずることを聞き入れたから、柯といふところで兩公相會して盟を結ぶことになつた。その時桓公と莊公と既に式場の壇上で盟を成した。ところへ、莊公に随つてゐた曹沫が不意に躍進して、桓公の胸に匕首を擬した。齊の桓公にも左右に侍臣はゐたのであるが、斯う手込かこにされては何うすることも出来ない。

桓公も已むを得ないから、

『何を得ようといふのだ』

『公の齊の國は強くて、私の魯の國は弱いのです、それであるのに大國の齊は小國の魯を侵しすぎます。今魯の城は壞たれて、常に齊の境から壓迫されなければならぬ状態です。その點を考へ下さい』

曹沫はきつぱりといつた。桓公は魯へ侵略して奪つた領地を盡く魯へ返還することを許す外はなかつた。その言明をした。これを聞いた曹沫は忽ち匕首を投げ捨て壇下へ飛び下り、君王に對する禮として北面して群臣の位置に就いた。しかし顔色自若として言葉つきなどにも毫も昂奮した様子もなかつた。

桓公は脅迫されてあたら領地を返還するのが残念だから、その約を反古はじにしようと考え

約に背かば天下の信を失はん

へた。然し齊の名相管仲は諫めた。

『いけません。小利を貪つて自ら快とするために、一旦約したことを破つて信を棄てたならば、今後天下の同情を失ひませう。これは少しの土地を惜まらず魯へお與へになつた方が得策でございます』

到頭齊は魯から奪つた領土を割讓した。曹沫が三度の敗北で取られた土地も皆魯に返つた。

荆 軻

荆軻は衛の人である。その始は齊の人であつたが衛に徙つて、衛では慶卿といはれてゐた。それから燕へ行つてから荆卿といはれた。

彼は讀書を愛し擊劍を好んでゐた。曾て榆次(山西省の地名)に遊んで蓋聶といふ者と劍を論じた事があつた。蓋は怒つて彼を睨めた。荆卿は黙つてその地を去つた。邯鄲に遊んで魯勾踐と博戯して争になつた時も、彼は魯勾踐が怒つて叱するのを聞き流して黙つて逃

隠忍時代の荆軻

げ去つた。それから燕に行つと狗屠と高漸離といふ二人に逢つて大に氣に入つた。燕の市に出ては彼等と酒を飲んだ。酒酣になると高漸離に筑(十三絃)を弄させ自分はこれに和して歌ひ楽しんでゐた。さうして陽氣に楽しんでゐるかと思ふと、急に四邊構はず泣き出したりするのであつた。

彼は酒飲みではあつたが、然しその人と爲なりは至つて奥行おくゆきの深い質で、諸侯の間に遊んでも必らず各地の聲望ある人々と相結ぶのであつた。燕に行つた時は燕の處士田光先生といふのが彼を厚遇して、その非凡なところを知つてゐた。その時である、燕の太子丹が秦から逃げ歸つたのは。

太子丹は以前には趙へ人質となつて行つて居た。秦王政(後の始皇)は元來趙に生れた人で少年時に丹とは仲善しであつた。だから政が秦王になつてから、丹は趙から歸りて秦に同じく人質となつて行つてゐた。ところが秦王は丹が豫期した通りの厚遇をしてくれないので、腹を立て、逃げ歸つたのであつた。そして何とか報復してやりたいと思つたが、秦は威勢隆々たる王國であり、燕ほ小國で力が及ばないので口惜しがつてゐた。

秦は兵を山東地方へ出して齊楚三晉の地を伐ち、その領地を蠶食しはじめた。そして

厚遇されぬ
人質

秦の強大

その侵略の手は追々に北方燕にも及びさうになつて來た。燕の君臣皆この禍を恐れ出した。太子丹は傳つたの鞠武に策を問ふた。

「秦の地は天下に偏く擴がり、その威は韓魏趙の強國を脅かしてゐます。その地勢からいへば、北に甘泉谷口の要害があり、南に涇渭の沃土を控え、巴漢の豊饒を我が物としてゐます。巴蜀の山を右にし關穀の險を左にし、その人口は多く兵卒は強いので、常に軍備充實して何處かへ進出しないでゐられません。今度出るとすると長城以南、易水以北、即ちこの燕の地でなければなりません。この大勢は如何ともすることが出来ません」と答へた。暫くして秦の將軍の樊於期が罪を得て秦から亡命して燕へ來た。太子は彼を受け入れて舎やどらしてゐた。鞠武はこれに對して諫言をした。

「秦王の怒りを募らすやうな事をしては燕の將來は頗る危険です、樊將軍が當地に匿れてゐるなどいふ事が知れては大變です、禍は殆ど救ひ難きに至りませう。その時になつて管晏のやうな名臣があつても間に合ひますまい、茲では速かに樊將軍を匈奴の地へ入らせて人口を塞ぐ外はありません。さうして西は三晉と盟約し、南は齊楚と連合し、北は單干と和睦して、然る後に萬事は計畫さるべきです」

「卿の計略はあまりに氣が長い、さう悠長に構へてはゐられまい。又樊將軍は身を容るるところもなくして此處に居るのに、それを逐ひ出すに忍びない。將軍を匈奴へやる時は自分の命が終る時だ」

「こゝは大事な場合です。一人の爲に國家の大事を誤るやうなことがあつてはいけません。この際田光先生に謀を問ふのが第一でせうと存じます」

「卿の骨折りで田光先生と近づきになれるだらうか」

「承知しました」

鞠武は田光先生を訪ねて太子の意中を傳へた。先生は早速承知して出かけた。太子は非常に禮を厚くして彼を迎へた。

座定まつて左右に人無く、太子は腰も下さないで先生に向ひ、

「秦と燕とは兩立しません、先生のお考を伺ひたい」

「某承つてゐますのに、麒麟も壯な時には一日千里を馳するのですが、老衰しては驚馬に先んぜられると申します。太子は某が元氣だつた頃の事をお聞きになつて、何かお役に立つやうに思召されたのでせうが、某はもう精氣消亡してお役には立ちません。某は

田光先生荆軻を薦む

國事を圖る事は出来ませんが、此處に荆卿といふのがゐます、これはお役に立ちます」

「先生の御盡力でその荆卿に逢はれませうか」

「承知しました」

即時に田光先生は退出した。太子は門まで送り出しながら、

「今の事は一國の大事だからお洩しないやうに」と念を押した。田光先生は笑つて俛首した。そしてその足荆卿の所へ行つた。

「某と君と親善であることは、此の燕で知らない者もない、今太子に召されて斯々の話であつたから君を推薦して置いた、どうか太子の相談相手になつてもらひたい」

「承知した」

「長者の行たる人をして疑はしめずといふが、今太子は門へ出て念を押した、これは即ち太子が某を疑つてゐる證據だ。それでは此の某が廢つたものだ、死んで口外しないことを見る外はない」

彼は其場に自刎した。

荆軻は直ちに太子に謁して、田光先生が自殺したことを、その言つたことを話した。太

死して信を
示すのみ

子は今更驚いて、再拜跪びいたまゝ暫は涙にくれた。

『先生に口止めらしいことをいつたのは、大事の謀の成就を祈るためであつた、今先生が死んでその誠實を示されたのは不本意千萬の事である』

坐定まつて更に荆軻に向ひ

『秦の強慾は限りがない、天下盡くをその手に掌握しなければ満足しないと見える。既に今は韓王を捕へその地を併せ、南は楚を伐ち化は趙に臨んでゐる。趙は秦を防ぎ止め得まい、さうすれば必ず臣へ入り込むであらう。秦が臣の地へ入つたら、禍は忽ち燕に及ぶ。この弱小國は舉國一致で當つても敵しないのは明かである。私が密かに愚考するに、天下の勇士を得て秦に使者を遣はし、誘ふに利を以てしたら、慾張りの秦王は必ず此方の思ふ坪に来るであらう。それで秦王を劫かして、今迄諸侯の地を併呑してゐたのを盡く返させたら、魯の曹沫が齊の桓公を脅かしたと同じく、一大痛快事であらうと思ふ。若し侵略地を返すを承知しなければ王をその座に刺殺すまでだ。さうすると多くの大將は各その兵を率ゐて各地で専横を始めるし、必らず内亂となり人々互に相疑ふに至るであらう。その間に乘じて諸侯の連盟を作つて攻むれば強秦を撃破すること確實

秦王を脅かす妙策

であらう。

これが私の計略であるが、如何せんこれを委ねる人が見當らない。それについて心當りは無いか考へて頂きたう』

太子丹の密計を聞いた荆軻は暫く考へてゐたが、やがて口を開いて、

『これは誠に大役で、私のやうな者には却々勤まりさうもありません』

と辭退した。太子は彼に頓首して固くこれを頼んだので、荆軻は終に引受けた。

そこで太子は直ちに荆軻を尊んで上卿に拜し、上舎に居らしめ、毎日自ら彼の門を訪ねて美食を供し、又乗用の車とか馬とか或は美女をも與へて優遇した。荆軻が意の如くに暮らさせて置いたのである。

それでも暫くは荆軻は様子を見てゐた。その内に秦將王翦が趙を破つて趙王を虜にし、盡くその地を收めて遂に北の方燕の南界に近づいて來た。太子丹はもう待つてゐられなくなつた。

『秦の兵が易水を渡るのは今日明日になつて來た、足下が事をなすの機を待つてゐられなくなつた』

容易に動かない

「仰せられますな、これから参ります。然し唐突に行つても信用されません。かの樊將軍は秦王が千斤の金と萬家の邑とを懸けて獲ようとしてゐます、ですから將軍の首と燕の地圖とを携へて行つて、秦王に献すると申しましたら、必ず喜んで王が私を引見するでせう、そしてたら大事を遂げられませう」

「今更樊將軍を殺すに忍びないから、何か外に考へはないでせうか」

太子は樊於期が首を取る事に同意しさうに無いので、荆軻は私ひそかに樊將軍に逢つた。

「秦が將軍に對する仕打しうちは深刻を極めてゐる。將軍の父母宗族皆誅戮せられてゐる、然るに尙も將軍の首には千斤の金と萬家の邑とを懸けて求めてゐる、どうする所存です」
樊於期は天を仰いで長歎し涙を流しながら、

「拙者もそれを思ふ毎に悲痛骨髓に徹するのだが、實はどうすれば宜いか更に分別も付かないでゐるのだ」

「今一策がある。その一言でこの燕の國の患は解け、同時に將軍の仇も報ぜられるといふものだが、どう思ひます」

「それはまア何ういふ策だ」

首の所望を
試る

「出来ることなら將軍の首を得て秦王に献じたい、王は必ず喜んで私を引見するでせう。そしてたら私は左に王の袖を把え、右でその胸を刺しませう。將軍の仇を報じ且つ燕が蹂躪しよくさるゝ憂も除かれます。如何いかです」

樊は肌を脱ぎ腕を扼して乗り出した。

「その事は日夜切齒してゐたところだ。今君の教を聞くことが出来た」

と直ちに自剄して死んだ。太子これを知りて馳せ付け屍を抱いて慟哭したが、事既に過ぎて如何とも詮方はなかつた。

そこで樊將軍の首を函に入れて封じ、趙人の趙夫人といふ名工に匕首を打たせ、毒を塗らせた。荆軻出發の用意は出来た。

燕に秦舞陽といふ勇士があつた。年十三にして人を殺したほどで、世人に恐れられてゐた。此の者を副として荆軻に従はしめることにした。彼が出發に際して太子も賓客もその事を知る者は皆白装束で彼を見送つた。易水の上に至つて別宴を張つた。前から親しくしてゐた高漸離が琴を弾き荆軻と歌を合せた。その調は徵あであつたゝめに一座涙を垂れて泣いた。彼は歌つた。

悲壯なる送
別會

荆 軻

二八

風蕭々として易水寒し

壯士一たび去つて復還らず

今度は調を改めて羽とした、その樂聲を聞くと慷慨の士は目を瞋らし、怒髮冠を衝くほどに昂奮した。

荆軻は車に乗つて秦の都へ行つた。彼は先づ秦王の寵臣に厚く賄賂を使つた。そして燕が非常に恐縮して樊於期が首と地圖とを携へて入貢した旨を巧に王に告げさせた。王は果して大に喜び燕の使を咸陽宮に引見することになつた。

荆軻は樊於期が首を入れた函を捧げ、秦舞陽は地圖の匣はを捧げて進んだ。高い階段を上りはじめると、遺の秦舞陽も色を失ひ震ひ出した。群臣はそれを見て不審を抱いた。此處で失敗しては大變だと、荆軻は頼みてその狀を笑ひながら、

秦舞陽震へ
上る

『北蕃の鄙人むかしので未だ尊い天子を拜した事がありませんから、恐懼致すのでございます』と繕つくろつた。王の前に至つて二つの函を差出すと王は荆軻に、

『地圖を取つて見せよ』

と命じた。彼は地圖を奉つた。王がこれを開いた。そして地圖のおしまひになつたと

こゝで、其處に匕首が現れた。

荆軻はすかさず王の袖を把り、右に匕首を取つて一刺しといふ勢を見せた。王は驚いて立つて身を引いた、袖はちぎれた、劍を抜かうとしたが周章てゝゐるので劍がぬけない。荆軻は王に逐ひ迫つた。王は宮殿の柱を廻つて逃げた。大勢の臣下は餘りの意外に驚き呆れて手も足も出ない。然かも秦の國法として殿上に侍する時は臣下は尺寸の武器をも携へることが出来ないで、尙のこと度を失つた。警護の兵士は遙かに宮殿の下にゐるのであるから突嗟の場合に役に立たない。何れも手で荆軻を搏つた。その時侍醫の夏無且が藥の袋を荆軻に投げつけた。王は柱を廻つて逃げながら、爲すところを知らな

いである。

『劍を負うておいでになります』

と注意する者があつた。王は自分が劍を負うてゐることに氣づいたから、それを抜いて荆軻が左の股を斬つた。荆軻はその匕首を王に投げたが當らないで柱に當つた。彼は事の成らざるを知り、柱に倚つて箕踞あぐらを組み、

『失敗したのは活かして置いて脅かすつもりだつたからだ、脅かして太子の爲めに報い

狼狽して我
が劍を忘る

荆 軻

二九

ようと思つたからだ』

と傲語した。彼は忽ち誅せられた。王はその後侍醫の夏無且に厚く賞を與へた。

さてこの大失敗から益秦の怒を傷ることになり、趙を破つた王翦の軍を更し燕に向はしめた、十月にして燕の薊城を抜いたので、王の喜は太子丹以下を率ゐて東の方遼東へ走つた。秦の將李信これを追撃すること頗る急であつた。代王嘉は書を送つて、

『秦が燕を追撃することの急なのは太子丹の故である、今太子を斬つて秦王へ献じたら必ずその怒を和らげ、燕は亡びないことができるだらう』

といつたが、李信に追はれた丹は遼東の衍水に匿れてゐたのを、王は人を使はしてこれを斬つて、以て秦に献じようとした。然し既にその時は太子の首だけでは濟まなかつた。秦の壓迫は益募り、五年の後には全く秦に亡ぼされ、王の喜は虜となつた。

その翌年に秦は天下を統一して王は皇帝と稱した、即ち始皇である。

荆軻と仲善しだつた琴の名人の高漸離は、名を變じて酒家に雇はれてゐた。或時その雇主の家に客が来て筑を奏した。かねて覚えのあることではあるし、聞耳を立てゝゐたが、彼は獨語のやうに、

太子の首で
すも間に合は

『良いところもあるが、拙いところもある』

といつた。客の供をしてる者が聞き咎めて主人にそれを告げた。そこで彼は呼ばれて筑を奏せしめられた。一座その技に感じて酒を與へた。彼は自分の荷物の中から手馴れた筑を取り出し、藏してゐた良い服を着けて再び座に現れた。人々驚いて上客として席を與へた。その筑を奏で、歌うを聞いて泣かない者はなかつた。この事忽ち聞えて土地の人は彼方此方から彼を招いて客とした。

その妙技が始皇の耳に傳へられた。即ち召し出されたが、彼を見識つた者がゐて、高漸離であることが知れた。然し荆軻の友ではあるがその妙技を惜まれて命は助けられた。唯その目だけは盲目にされた。

斯うして後、始皇は彼に筑を奏せしめて常に感心した。次第に始皇に近づくやうにもなつた。そこで彼は鉛を筑中に入れて振廻せば重いものとなるやうにしかけ、始皇に近づいた時それで一撃を與へようとした。然し俄盲目の悲しさにそれは當らなかつた。彼は直ちに誅せられた。

曾 荆軻と争つた魯勾踐は荆軻が失敗した話を聞き、彼が刺劍の術を練習しなかつた

盲人復讐を
企つ

ことを残念がつてゐた。

史記の游俠傳

史記の游俠傳

儒者は文を以て法を亂り、俠士は武を以て禁を犯す、と韓非子はいつてゐる。二者ともに罵倒されたわけである。

然し儒者は多く世々に傳へて稱讃せられてゐる。法術で以て宰相や卿大夫を取り、其の君主を補佐し、功績と名譽とともに史上に顯著なものは、茲に特に論述するを要しない。孔子の弟子の季次や原憲はともに裏店住うらたなぢまひの人であつたが、獨行君子の徳を懷き、常世に迎合しなかつたので、時人には笑はれ、一生を貧賤に終つた。然るに其の死後既に四百年、其の後を慕うてこれに志すものは絶えない。

游俠の士は其の行爲は往々にして常軌を逸することはあるが、然し其の言つた事には責任を感じ、其の動作は果斷であり、一旦引受けた事には飽くまで忠實で、一身の利害を顧みず、人の困厄には飛び込んで助け、死生損徳を念としない。然かも已れの技能に

誇らず、又人に與へた徳を矜らないところは、亦多としなければならぬ者である。且つ緩急は人に時々あるものである。

太史公の曰く、昔は虞舜でも井を掘り倉を塗るに困つた事があり、伊尹は鼎俎を負ひ、傳説は巖窟に隠れ、大公望は七十の老年で棘津に食を賣り、管仲は手械足械の憂目を見、百里奚は牛飼となり、孔子は匡に畏れ陳蔡の野に餓えねばならなかつた。これ等は皆學者の所謂有道の士である。然も尙いろくの災厄に遭つてゐる。況んや是等の人に及ばない中材の人で亂世に處し、その害に遇ひ虐げられたことは、數へあげられるものではない。

鄙人の言として、仁義などいふものは知らない、自分はその利を享くるものを徳とする、といふことがある。故に伯夷は周を醜としその粟を食ふを恥ぢ、つひに首陽山に餓死してしまつたが、その爲に周の文王武王は悪評を蒙りはしない。盜跖や莊矯は大賊で暴戻を以て聞えてゐるが、然しその徒にも又それ／＼義理を辨へて嚴しく守るところはある。

斯う觀じて來ると、衣類などを盜む小盜は殺され、國を盜む大盜は侯となり、その成

上りの侯の下に仁義が唱へられてゐると、莊周が冷語を放つたのも虚言とはいはれない。今學問に拘泥して變通を知らざるものが、目前の小義を楯に時流に背いてゐるよりも、實際論の卑近な例を分別して俗間に榮名を得る方が早い。然し又下層社會にも然諾を重じ恩義を忘れず一命を投げ出して悔いざる者がある。故に上流の人も時としてその下層の義理堅いところに一身を託することができるといふ。これ等は文の賢と武の豪との間の者といはねばならぬ。誠に郷土の俠をして彼の裏店の賢者たる季次や原憲などと權を比べ力を量つて功を當世に立てさせたら恐らくその功は同日の論ではあるまい。彼等の長所は實蹟を擧げその言ふところに偽がないところである。俠客の義も大きなものである。

古い時代の無名の俠は聞き傳へないが、近代では吳の季札、孟嘗君、春申君、平原君、信陵君の如きは、何にも王者の親屬であり所領ある卿相であつて、その位地と財産とで以て天下の賢者を招いてその名を諸侯の間にあげた。元より賢ならざる者とは言はないが、然し勢利によりて其名を得てもそれは甚だしく賞讃するには當らない。これを比へると風に順つて呼ぶやうなもので、聲疾きを加ふるにあらずして、遠く聞えるのは風がその勢を激するからである。

これに反して閭巷の俠に至つては、權勢があるでなく財産があるでなく、唯その行を修め名をみがき、本當に自分の聲價が天下に知らるゝので、これは即ち甚だ難い事である。然るに従來の學者著述家はこれ等の得難い人々を卑め輕んじて書籍に記載しない。その爲に秦以前の匹夫の俠は更に傳はらず世に湮滅してしまつてゐる。眞に遺憾とすべきことである。

予が聞くところによると、漢が興つて以來、朱家、田仲、王公、劇孟、郭解等があつた。彼等は一面に於て國法を犯す行爲にも出てゐるが、然しその義理固く、廉潔謙讓なところは稱揚せざるを得ない。彼等は實質的の名聲を得てゐるものである。朋黨一族團結して財を設け貧者を苦役し、あらゆる暴を以てして弱肉強食を敢てし、それで快哉を呼ぶ如き態度は、彼の市井の俠客は斷じてさういふ事を屑くせしとしない。世人往々彼等を解しないで、朱家郭解の徒を以て弱きを虐ぐる暴豪者流と同一視するのは慨歎すべきことである。

朱家

魯の朱家は、漢の高祖と同時代の人である。魯は孔子以來皆儒を以て教へるのであるが、朱家は獨り俠名を揚げてゐる。その家に養つてゐた豪士でも百を以て數へるほどで、豪士と稱せられない凡庸に至つては數ふるに堪へないところである。

彼はさういふ大親分でありながら、その能に誇り、徳をひけらかすことはなかつた。彼が嘗て一度でも恩義を施した者に對しては、先方が恩義を思ふのを察し、此方から成るべく避けて逢はないやうにしてゐた。人が窮してゐるのを救ふ場合には、必ず貧賤な人を先に助け、富貴に近よらなかつた。そのために家に餘財あるでなく、衣類なども殆ど飾氣のないもので、食物なども極めて質素で、料理を並べるやうな事がなく、平常の乗用には駿馬でなくて小牛であつた。それで他人の急を聞くと、自分のことは打捨て、これに走るのであつた。

將軍季布が窮してゐるころ、密かにこれを助けたが、季が立身するともう彼は決して

季に謁することをしなかつた。關(函谷關)より以東、誰も首を延べて彼と交を結ぶことを願はないものはなかつた。

田仲その他

楚の田仲も亦俠名を馳せたが、これは劍を使ふことの達人であつた。朱家を見ること父の如くに敬意を拂つて仕へた。彼は常に我が行は未だ朱家に及ばないと、自分を責めて己を研いてゐた。

田仲が死んだ後に、周の都の洛陽に劇孟といふのが出た。周の人は一體に商賣上手で、その方で聞えてゐるが、劇孟は方面違ひの任俠を以て當時の諸侯の間に知られてゐた。吳と楚とが反亂を起した時、條侯は大尉といふ官であつたが、急いで河南に行かうとして劇孟を得た。條侯喜んでいふには、
「吳楚の奴原(やつぱら)、大事を擧ぐるのに、この劇孟を味方(いかり)とすることを考へないくらゐだから、奴等に何もできないことは分つてゐる」

と豪語した。天下亂れんとするに際し、彼を味方とするのは、正に一敵國を靡けたと同じくらゐに有力なものであつたのである。

劇孟はその行爲は大に朱家と似てゐた。彼は一の博徒(はくと)であつた。然し彼の母が死んだ時遠方から喪を送ること凡そ千乗もあつた。劇孟が死んだ時は、家に十兩の金も残つてゐなかつた。

符離(安徽省の地名)の人王孟も亦俠を以て江淮の間(江蘇、浙の江地方)に稱せられてゐた。その頃、濟南(山東省の大都)の閻氏、陳(河南安微地方)の周庸なども同じく豪を以て世に聞えてゐた。景帝はこれを聞いて、使を派遣しその一味のものを盡く誅せしめた。その後代に白氏一類、梁の韓無辟、陽翟の薛況、陝の韓孺等いろいろの人が續出した。

郭 解

郭解は軹(河南省の地名)の人である。字は翁伯といつた。人相(じんさう)を見ることで知られてゐる許負の外孫である。解の父は任俠を以て孝文皇帝の時に誅せられた。

郭は小男で精悍、酒は飲まなかつた。年少にして既に殺伐の氣に満ち、我が心に面白からぬ者は、憤慨のあまり殺してしまつた事も甚だ多かつた。然し彼は決して私憤を晴らしてのみ快とする男ではなかつた。自分の身を投げ出して交誼の爲には仇を報いるのであつた。又何か身の置き所に困つてるやうな亡命者は自分で匿藏つてやるし、姦を敢てし、劫盜もやる。自分で錢を鑄造したり、塚を發掘して財寶を掠めたり、さういふ悪いことも數へきれないほどにやつた。

然し彼は運の強い男で、逃れられないまでに追詰められても危難を脱するし、捕へられても赦に遇ふて出たりしてゐた。

郭は年長じて、従來の悪事をさらりと捨て、謙遜になり且つ身を儉しくし、専ら徳を以て怨に報い、人に施すのは厚く、その感謝さるゝことは成るべく薄いのを喜んだ。さうして自ら喜んで俠をなすことは益々甚しくなつた。

人の命を救つてやつたからとて、決してそれを恩に被せて矜るやうな事はなかつた。然し心に潜んでゐる殺伐の氣象は、やゝもすると目を瞋して人を見るのであつた。それでも青年などが、彼を慕つてその力を借らうとするやうな場合には、その爲に仇を報い

てやつて、しかもその本人には知らせないで置くのであつた。

彼の姉の子某といふのが、叔父郭解の聲望を笠に着て威張つてゐた。或人と酒を飲んだ時その人が飲めないのに餘りに無理強ひをしたから、郭が甥だからとて難題すぎると、その人は憤慨して某を刺殺して逃げてしまつた。某の母たる人、即ち郭の姉は怒つて、

『郭解が附いてゐて、宅の子を殺した奴は捕まらないのかね』

と口惜しがつた。姉は郭解への面當に、我が子の屍體を大道に放り捨てたまゝ、敢て取つて葬らうともしなかつた。郭解は苦々しきことに思つて、探索させるとその犯人の居所は早速調べ上げた。加害者も今は逃れぬところと觀念して進んで、郭解のところへ出かけて、事情は斯々であつたと逐一申述べた。これ聞いた郭解は、甥が虎の威を借りて難題を吹きかけた事を悟り、

『君がああを殺したのは當然の事だ。いや曲は此方にある、構はず行つてくれ』

とその人を歸してしまつた。そしてから甥が悪かつたのだと、その屍體を拾はせて葬つてやつた。諸侯がこの話を傳へ聞いて、彼が義理明白にして私曲なきに敬服し、益々彼に傾倒するに至つた。

彼が通ると、一般の人は太抵道を避けて畏れてゐた。然るに或男が箕踞かいたまゝ、彼が通るのを眺めてゐた。彼は珍らしい男だと思つたから、人をしてその男の名を尋ねさせようとした。その食客は箕踞の男が傲然として親分の威光にも恐れぬのを怒り、殺してしまはうと考へた。それと見た郭は、

『尊敬されないやうになつたのは、此方の徳が足りないからだ、あの男に罪はない』と押しめた。そして密かにその筋の役人に頼み込んだ。

『あの男にはわしも敬服した、踐更（人に代りて兵役に）の（つくる者の交替期）の（の）時が來ても、あの男だけは免れるやうにしてやつてもらひたい』

何しろ時めく大親分に頼まれた事だから、兵事係も粗略には思はず、その男が兵役に附く順番が來てもその度毎に必らず免れる。役人の方でも何ともいはない。その男も度度の事で不審に思つて問合せて見ると、何時ぞや箕踞かいて郭解を見たゝめに、その口入で自分は兵役を免れてゐることが判つた。これにはその男も感じもし慚ぢもした。すなはち衣を脱ぎ刑を受くる覺悟を示して郭解が前に出で、誠意を以て罪を謝した。この話は又郭解の名聲を煽つて、青年等の尊敬の的となつた。

洛陽（しやうやう）の人が争を起して容易に和解が出來なかつた。土地の名望家たちが幾十人も仲裁に立つたが、それでも解けない。そこで郭のところへその話が持ち込まれた。彼は先づ一方の家へ夜陰に乗じて行つて見た。其處では名に負ふ郭が中に入つたのだから、ならぬ堪忍をして仲裁を任せようといふ事になつた。

『承れば土地のお歴々方が仲裁に立つておいでさうな、それでも話が纏まらないのであるのに、今夜は快くわしに任せてもらつて誠に忝けない。然し考へて見ると、わしは外土地（とち）の者で、此の洛陽のお歴々の鼻を明かすやうな事は出來ない』

といつて郭は人知れず夜の間に引上げる事にした。そして更に忠告して、
『今すぐやつて貰つては困る、わしが郷里へ歸つたあとで、やはり土地の方々を仲裁に立て、和解しなさい』

と飽くまで自分の功を隠すやうにした。

彼は決して倨傲の態度が無く、例へば縣廳などへ行くにも、車のまゝで乗り込むなどいふことは無つた。隣接の郡國へ行つて、何か人の爲めに物を頼むやうな場合でも、救ひ出せるものなら極力救ひ出してやるが、事理の許さぬ時は、出來るだけの事をしてや

つて良く理解させ、救はれなくても已むを得ないことを、充分會得させた時でなければ、酒食をしないのであつた。諸公もさういふ物の解つた郭解のやり方には感心して、憚りもし重んじもして、争つて彼の爲めに何かの役に立つてやらうとした。

さういふ次第だから、土地の青年子弟は言ふまでもなく、近縣の名望家たちも、夜半彼の宅を訪ふものが常に十餘車はあつた。そして彼が養つてる食客の中から、自分の家で養ふ人を選んでもらつて、それを頼んで家に置くことが心強く思はせるのであつた。

富豪たちのみを茂陵(武帝の陵の所在地)に移住させた時、彼は家貧くしてその列に加はる資格がなかつた。然し役人どもは彼を貧乏人扱ひにするのを恐れて、同じく移る中に入れようとした。その時衛將軍(大將軍衛青)は、

「郭解は家が貧しいからその中には入れぬ」

といつた。武帝これを聞いて、

「郭は一布衣(ほい)の身でありながら、天下の大將軍に口を利かせるに至つては、これは貧なりといふべきでなす」

といつたので、解が家も一緒に移つた。それについて彼に諸公から贈り物した額(たか)は千

餘萬錢に達した。これでは優に諸富豪と列して移るべき資産家となつた。

軹(し)の人楊季主の子が縣(たか)の椽(官)であつた。それが郭の移るのに關係して、郭の兄の子のために斬り殺された。それで揚氏と郭氏とは互に怨を抱くやうになつた。郭が關中に入ると、其處の名望家は彼を知ると知らざるとに論なく、彼の名聲を聞いて争うて彼に交際を求めるといふ有様だつた。然も彼は決して傲慢な態度に出ないで、從騎も伴れないで外出するのであつた。その内にかねて仲の悪くなつてゐた楊季主をも殺してしまつた。それを訴へ出ようとする者をも殺した。帝これを聞いて彼を逮捕させようとした。彼は逸早く逃亡してしまつた。その母と妻とを夏陽(陝西省の地名)に置き、自分は臨晉(陝西省の大荔縣)へ行つた。

臨晉の籍少公は彼を知らなかつたので、彼は偽名をして關外へ出ることを求めた。彼は其處を出て、轉じて太原(山西省の地名)へ入つた。彼は途中で自分を舍らした人の名を一々隠さないでゐた。そこで捕手は一々それを搜つて追つて來た。籍少公のところまで追うて來ると、籍少公は、郭解を知らないで放しやつた事が判つて、その爲に自殺してしまつた。だからそれから後は聞き出せなくなつた。

然し久しく経つて後に遂に郭解は捕はれた。彼の罪状を一々調べ上げた。その追手の役人の處で郭解を譽めたものがあつた。其處に輒の儒生がゐて、郭は國法を紊るもので、賢なりとは言はれないといつた。これを聞いた郭の食客が、その儒生を殺してその舌を斷つて腹癒せにした。この事は又郭の身にかゝつて責められた。然し實際これには郭が關係してゐない事だし、又儒生を殺した食客も行衛不明になつたので、これに關しては郭は無罪であると役人からも上奏した。

時の御史大夫公孫弘がそれを論じて、

『郭解は布衣の身で任侠を事とし、權道を用ゐ、少しの怨の爲に人を殺すやうなことをする。今度の儒生殺しの如きも、郭は知らないとしても、その罪は彼自身で殺したよりも酷い。正に大逆無道である』

といつて、遂に郭解の親も妻も共に刑せられて死んでしまつた。

其の後の遊俠

郭解の後にも俠といはるゝ者は頗る多かつたが、その態度は倨傲で數へ上ぐるに足るものがない。然し關中では長安の樊仲子、槐里の趙王孫、長陵の萬公子、西河の郭公仲、太原の鹵公孺、臨淮の兒長卿、東陽の田君孺などが俠をなした。それも遂巡して退讓の君子の風があつた。

若しそれ北道の姚氏、西道の諸杜、南道の仇景、東道の趙他羽字は公子、南陽の趙調などの徒の如きに至つては、これ全く古の盜跖が民間にゐるやうなものゝみであつて、固より言ふに足りない。斯ういふ者こそ昔の朱家が寧ろ羞とするところの者である。

太史公曰く、自分が郭解を見るに、その状態は偉大どころか中人にも及ばず、その言ふところも採るに足りない者である。然し天下で賢愚上下の差別無しに彼の名聲を慕ひ、苟も俠をいふものは、皆引いて以て名としてゐる。諺に、

『容貌は衰へるが名聲は盡きなく』

といつてゐる。郭解が誅せられたのは惜しむべき事であつた。

古今刀劍錄

古今刀劍錄

序

刀劍の由來は古い。古今の帝王で、之を鑄ないものはない。が元と小事なので之に關する記録は甚だ詳細でない。ために、逸品をして空しく傳へざるに至らしむる。是れ予の慨然をなす所以である。

夏禹の子帝啓位に在ること十年。で其八年目の庚戌の歲に一つの銅劍を鑄た。長さ三尺九寸、上に二十八宿(星の名)を刻し。表に「星辰」裏に「山川日月」の文がある。後秦望山の中腹に納めし置いた。

啓の子太康。位に在ること二十九年。辛卯の歲三月春。一つの銅劍を鑄た。長さ三尺

二寸。劍尖は方形である。孔甲。位に在ること三十一年。其九年目の甲辰の歲に、牛昔山の鐵を以て、一劍を鑄た。銘に古文の篆出で「夾」とある。長さ四尺一寸。

殷の太甲。位に在ること三十二年。其四年目の甲子の歲に、一劍を鑄た。長さ二尺。古文の篆出で「定光」の文がある。

武丁。位に在ること五十九年。其元年戊午の歲に、一劍を鑄た。長さ一尺。古文の篆出で、照膽の銘がある。

周の昭王瑕。位に在ること五十一年。其二年目の壬午の歲に、五劍を鑄て、五嶽に各一を納めた。銘に、古文の篆出で「鎖國尙方」とある。長さ五尺。

簡王夷位に在ること十四年其元年。癸酉の歲に、一劍を鑄た。長さ三尺。大篆で「駿」の銘がある。

周の昭王稷。位に在ること五十二年其元年。丙午の歲に、一劍を鑄た。長さ三尺。大篆で「誠」の銘がある。

秦の始皇。位に在ること三十七年。其三年目の丁巳の歲に、北祇の銅を以て、二劍を

鑄た。銘に「定秦」とあり。小篆で、李斯の雕刻である。長さ何れも三尺六寸。

前漢の劉季。位に在ること十二年。始皇の三十四年に、南山(終南山)で、一劍を得た。長さ三尺。銘に、大篆で「赤宵」とあつた。後に帝位に即いて、常に之を帯びてゐた。即ち斬蛇劍である。

文帝恒。位に在ること二十三年。初元十六年庚午の歲に、三劍を鑄た。長さ三尺六寸。銘に「神龜」とあり、多くの龜を刻した。崩するとき、公武宮に納めしめた。

武帝徹。位に在ること五十四年。元光五年乙巳の歲に、八劍を鑄た。長さ三尺六寸。小篆で「八服」の銘がある。五嶽即ち嵩山恒山霍山華山太山に、各一を埋めた。

宣帝詢。位に在ること二十五年。本始四年に、二劍を鑄た。長さ三尺。小篆で、一は「毛」他は「貴」と書した。帝は臚に毛が生えてゐたので、斯く名けたのである。

平帝衍。位に在ること五年。元始元年辛酉の歲に、土中より一劍を發見した。大篆で、帝の名が書かれてあつた、常に佩用した。

王莽。僞位に在ること十七年。建國五年庚午の歲に、五色の石を鍊つて、威斗(北斗に長さ二尺五寸奔の創造である)と初劍とを鑄た。銘に、小篆で「神勝萬皇伏」とある。長さ何れも三尺六

寸。

更始劉聖公。僞位に在ること二年。自から一劍を造つた。小篆で「更國」の銘がある。後漢光武秀。位に在ること三十三年。未だ帝位に即かないとき、南陽に於て、一劍を得た。小篆で「秀霸」の文があつた。帝に佩用した。

明帝莊。位に在ること十八年。永平元年戊午の歲に、一劍を鑄た。龍の形を刻してあつた。洛水に沈めたが、水が澄んでゐるときは、常に見えた。

章帝烜。位に在ること十三年。建初八年、一つの金劍を鑄て、伊水の中に投じた。水經(本の)に云ふ、「伊水には一つの怪物があつた、人間の膝の形をして、其頭に爪があつて、人が伊水に這入つたら、再び出て來ない」と。帝は此怪物に對して、禁厭まつないをしたのである。

安帝祐。位に在ること十九年。元初六年、一劍を鑄て峨眉山に納めた。山王を疑つて、之を鎮める積りなのである。

順帝保。位に在ること十九年。永建元年、一劍を鑄た。長さ三尺四寸。銘に小篆で「安漢」とある。後年號を改めた。

靈帝安。位に在ること二十二年。建寧三年、四劍を鑄た。小篆で「中興」の文がある。内一は故なくして紛失した。

魏の武帝曹操。建安二十年、幽谷に於て一劍を得た。銘に「孟德」といひ、又劍上に金文字があつた。帝常に佩用した。

齊王芳。正始六年、一劍を鑄た。常に佩用したが、故なくして紛失して空匣が残つてゐる。其後王位を禪つたが、其端は劍の紛失に始まつてゐる。間もなく司馬氏に廢せられた。蜀主劉備。章武元年辛丑、金手山の鐵を探つて、八劍を鑄た。何れも、長さ三尺六寸。内一は、帝自から之を帶ひ、他は太子禪、梁王理、魯王永、諸葛亮、關羽、張飛、趙雲に各一を與へた。

禰元をして刀五萬振を造らしめた皆連環。

鯉口に七十二の鍊を列ねてゐる柄には凡べて「兼有」の二字を刻した房子容云ふ「唐人尙書郎の李章武本の名を方古といつた。貞元の末年に東平の帥の李師古が判官となつて、邸を造る時一劍を掘り出した。その劍には章武の二字があつた。是は蜀の諸葛亮の劍で蜀並八劍の一であつた。

後主禪。延熙二年、一大劍を造つた。長さ一丈二尺。劍口山の鎮護として納めた。當時の人は時々山から劍の光輝の發するのを見た。後人之を求めても見當らない。

吳王孫權。黃武五年に、武昌の銅鐵を採つて、劍千振と刀一萬振を作つた。長さ何れも三尺九寸。刀は尖頭が方形で、小篆で「大吳」の文がある。又赤烏年間に、淮陰侯韓信の劍を得たものがあつたが、吳王は之を周瑜に賜ふた。

孫亮。建興二年に一劍を鑄た小篆で「流光」の文がある。

孫琳。建衡元年に一劍を鑄た。小篆で「皇帝吳王」の文がある。

晋の武帝司馬炎。咸寧元年、八千振の刀を造つた。銘に「司馬」とある。

懷帝熾。永嘉元年に、一劍を造つた。長さ五尺。小篆で「歩光」と銘した。

成帝衍。咸和元年に十三振の刀を造つた。銘に「興國」とある。

穆帝聃。永和五年房山に於て五振の劍を造つた。銘に隸書で、「五方單符」とある。

孝武帝昌明。大元元年に華山の頂に於て、一劍を埋めた。隸書で「神劍」の銘がある。

宋の武帝劉裕。永初元年に一刀を鑄た。銘は刀背に在つて小篆で「定國」としてある。長さ四尺。後に槩に入つた。

少帝義符。景平元年、一刀を造つた。銘に小篆で「五色」とある。

後廢帝昱。元徽二年、蔣山の頂に於て、一劍を造つた。銘に「永昌」とある。

順帝準。昇明元年、土中より一劍を得た。銘に「上血」とあつた。其刀は室内を照すので、帝は之を奇としてゐたが、翌二年七月、帝が楊玉と云ふものに、織女(星の名)を見付けさせた。ところが玉は、之れを發見し得なかつたので、殺されるのを恐れて、却て帝を弑した。帝は刀の銘のやうになつた。吉凶といふものは、何れも、其前兆があるものだ。

齊の高帝蕭道成。建元二年、一刀を造つた。長さ五尺。銘を「定業」といつて、帝自から之を篆刻した。

明帝鸞。建武二年、一刀を造つた。銘に朝議とあり、小篆である。長さ四尺。

梁の武帝蕭衍。天監二年、即位して、普通年間庚子の歲に、宏景に命じて、神劍十三振を造らせた。金銀銅錫鐵の五色の合金で、長短各其法に依つたものである。小篆で、「服之者永治四方」の文がある。

諸小國の刀劍

前趙の劉淵。一刀を造つた。長さ三尺九寸。隸書で、「滅賊」の文がある。

後趙の石勒。建平二年、一刀を造つた。長さ三尺六寸。銘に隸書で「建平」とある。

又石勒が、未だ帝位に即かないときに、畑を耕して一刀を發見した。銘に篆書で「石氏昌」とあつた。

石季龍。建武十四年に、一刀を造つた。長さ五尺。銘に隸書で「皇帝石氏」とある。

後蜀の李雄。晏平元年に、五百振の刀を造つた。隸書で「騰馬」の文がある。

前涼の張寔。百振の刀を造つた。故なく盡く亡失した。文に「霸」とあつた。

後魏の昭成帝拓跋健。建國元年、赤冶城に於て、刺刀十振を鑄た。金文字で「赤冶」と刻した。

道武帝珪。登國元年、嵩阿に於て、一劍を鑄た。銘に隸書で「鎮山」とある。

明の元帝嗣。泰常元年、一劍を造つた。長さ四尺。刀背に隸書で「太常」と銘した。

宣武帝恪。景明元年、白鹿山に於て、一刀を造つた。隸書で「白鹿」の文がある。

前秦の符堅。甘露四年に五千の工を用ひて一刀を造つた。隸書で「神術」と銘した。

前燕の慕容雋。元璽元年、二十八振の刀を造つた。銘に隸書で「二十八將」とある。

後燕の慕容垂。建興元年二刀を造つた。長さ七尺。隸書で一は雄一は雌と刻した。各別に置けば鳴つたといふ。

後秦の。建初元年に、一刀を造つた。隸書で「中山」と銘した。長さ三尺七寸。

西秦の乞伏國仁。建義三年、一刀を造つた。隸書で「建義」と銘した。

後涼の呂光。麟嘉元年に一刀を造つた。刀背に銘して「麟嘉」といつた。長さ三尺六寸。

南涼の秃髮烏孤。太初三年一刀を造つた。青色の細身で、長さ二尺五寸。鍛工が云ふ「之を作るときに、夢に一人の朱服を着けた者が現はれていふ、吾に太一神(天帝)である、汝の作業を見に来た此刀を獻するときには鳴ると」と。後に突厥王の所有となつた。

後燕の慕容元明。建平元年、四振の刀を作つた。隸書で「建平」の文がある。

西涼の。永建元年に、珠碧の刀一振を造つた。銘に隸書で「百勝」とある。

北涼の沮渠蒙遜。永安三年に、百振の刀を造つた。銘に隸書で「永安」とある。夏州の赫連勃勃。龍昇五年五振の刀を造つた。刀背と刃とに龍雀の環があつて、金字で龍の形を鏤めてある。長さ三尺九寸。銘に「古之利器」とある。

此刀は、風の草を靡かすやうに、天下を征服したが、宋王劉裕が長安を破つたとき、此刀を得た。後に梁に入つた。

吳將の刀

周瑜が南郡の太守と作つて、一刀を造つた。刀背に八分(書體)書で銘を刻した。

蔣欽が列郡の司馬に拜せられて、一刀を造つた。文に隸書で「司馬」とある。

周の幼平が曹公を撃ち、平虜將軍に拜せられて、一刀を造つた。刀背に銘して「幼平」といふ。

董元咸。少きとき、果斷勇決、自から鐵を打つて一刀を造つた。後に黃祖を蒙衝河に

討つたとき、元咸は其刀を以て、衝河の上流を斷つて二つの流れにした。大司馬に拜せられて「斷蒙刀」と名けた。

潘文は偏將軍に拜せられて、關羽を擒にしたために、固陵太守に拜せられた。一刀を造つて「固陵」と銘した。

朱理君。黃武中功を累ねて安國將軍に拜せられた。一佩刀を作つて、文に「安國」と刻した。

關羽は先主(劉備)に重用せられ、自から都山の鐵を採つて二刀を作つた。銘に「萬人」と云ふ。後戦ひ敗るゝに及んで、刀を惜み之を水中に投じた。

張飛初め新亭侯に拜せられ、自から鍛工に命じ赤朱山の鐵を鍊つて、一刀を作つた。銘に「新亭侯蜀大將也」といふ。後に范強の爲めに殺されたが、強は此刀を以て吳に入つた。

黃忠は漢の先主である。南郡を平定して一刀を得た。赤きこと血のやうであつた。漢中に於て夏侯の軍を撃ち、一日中刀を抜くこと百餘回であつた。

鍾會は蜀を討ち成都で土中より一刀を得た。文に「太一會死入帳下主王伯昇」とあつた。伯昇後に江を渡るとき其刀は飛んで水に入つた。

鄧艾。年十二。曾て太邱の碑を讀んで、碑の下より一刀を掘出した。黒きこと漆のやうで、長さ三尺。餘何處に置いて、刀の上に一種の凄しい氣が漂うてゐた。人は皆神物とした。

董卓。少きとき、野に耕して、一刀を掘り得た。文字はないが、四面がほのかに隆起して、山雲の狀を呈し、「玉如泥」の文を讀み得た。後卓が榮達してから、五官郎將葵に見せた。葵がいふ「これは項羽の刀である」と。

紹袁が黎陽にゐたとき、神から寶刀を授けられたと夢みた、覺めたら、果して刀が臥所にあつた。「思召」といふ銘であつた。

郭維。太原に於て、一刀を得た。文に「宣爲將」とある。後遂に將軍となつたが、蜀の大將と戦ひ、敗れて此刀を失つた。

王雙は曾て市中に於て一刀を購ひ得た。賣つた人は「此刀を得るものは偉くなる」と云うたなり見えなくなつた。雙は果して之を佩びて魏の大將となつた。

陶宏景の古今刀劍錄一卷は、夏后啓より梁の武帝に至るまでの、帝王の鑄造した刀劍の全部を載せて、且つ其自序に「古今の帝王で刀劍を鑄ないものはない」といつてゐる。然るに後に又諸小國の刀劍、並に三國の諸名將の刀を載せてゐる。が春秋の世の吳王闔閭や、越王勾踐の使役した劍工、干將、歐冶、龍淵、太阿、純鉤、湛盧の如き諸小國の名將に匹敵するものを棄て、載せないのはどういふものか。此等の名匠の事は、吳越春秋越絶等の書に詳しいから、此處に之れ以上論列せない。斯くの如く、此刀劍術は遺漏ある上に、後世の之を校正して刊行するものも亦更に審議せない。

蜀主劉備が、金牛山の鐵を採つて、八劍を鑄るの條下に、房子容の説を引用してゐるが、之れは唐人の説であるから、別行にするか又は小注を用ひて本文と混同しないやうにするがよい。

又稱元は蒲元でなければならぬ。諸葛武侯楛屬藝文類聚に蒲元の傳がある。内に「元は奇想に富んでゐた、諸葛亮の爲めに三千振の刀を鑄たが、漢江の水は鈍弱で健卒(刀を鈍く)の用に堪へないとして、人をして成都の錦江の水を汲み來らしめて、刀を鑄て神刀と名けた」とある。是によりても、稱元は蒲元の誤りであることは疑ひない。

又蜀將の刀の一行を脱してゐるが、此處には原本の儘翻刻して校正を加へない。よりに特に明記して後の學者の考慮に委せる。汝上王漢識す。

干將 莫耶

吳王闔閭はすでに伍子胥の建策を用ひて、吳都の築城を完成し、又子胥に戰時射御の術を究めさせたが、まだ此等のものを役に立てる機會を得なかつた。

吳王は更に干將に命じて二振の劍を鑄させた。

干將は吳の人であるが、越人歐冶と同じ師に就いて刀劍の術を修め、二人共能く名劍を作つたものである。

吳王は是より先き越王から歐冶の作つた三名劍を獻ぜられて之を寶としてゐるので、今後は自國の劍匠に鑄させようとしたのである。

干將が吳王の命によりて鑄たものは、一を干將、二を莫耶と名づけた、莫耶とは干將の妻の名である。

干將が此劍を作るためには、五山(五つの名山)の精鐵と、天下の良金とを揀ひ採つて、天の時を伺ひ、地の相を觀て、陰陽相應し百神臨觀し、天氣降つて金鐵の精と合して、始

めて玲瓏の劍を得ることを期したのであるが、干將の實際の腕前はまだ却々さうは行かなかつた。

そこで妻の莫耶が干將に向つていふには、

「あなたは劍匠の名人だといふので、吳王の台命を受けたのであるが、三月もかゝつて未だ劍が出来ないといふのは、どういふものですか」

「どうも其理由が判らないといふより外に、残念ながら答へが出来なかつた。

「無機のものをして神物となすといふことは、人を得て始めて出来るのである。今あなたに神劍を鑄ようとするには、先づ相手の人を得ることが肝心ではありませぬか」

「昔吾師匠は金鐵を鍛へて甘く鑢けないときは、夫婦共に爐の中に這入つて、火の加減を調べた。が今の世では喪服を着けた人まで、山に這入つて金を鍛へてゐる。今私の金を鍛へて甘く鑢けないのはこのためではないであらうか」

「師匠は己れの身を鑢いて劍を鑄たのだ、この事が判つた以上、今此處で名劍を鑄するに何の難いことがありませう」と

いひ終つて干將の妻は直ぐに髪の毛を断り、爪を剪り、身を清めて爐の中に飛び込み

三百人の童男童女を以て橐を鼓し炭火を調へさせたら、金鐵は忽ち銷けて立派な劍が出来上がった。

二つの劍は陽を干將と名づけ、陰を莫耶と稱へて、陽には龜文を刻し、陰には漫理を出した。

干將は陽の方を隠し、陰の方を吳王に獻じた。吳王は之を寶劍として非常に貴いものにしてゐた。

金 鈎

吳王は莫耶の寶劍を得て更に國中に布令を出し百金の懸賞を以て金鈎を作らせた。

多勢の鈎匠は皆其懸賞を得ようとして、其苦心の作を王に呈出した。

其内に一人の異つた鈎匠があつた。飽く迄王の重賞を得ようとして、最愛の二人の兒供を殺して、其血を以て金鐵に濺ぎ二つの鈎を鑄て王に獻上し、宮門に往いて賞を要求した。

そこで王がいつた。

「鈎を作つたものは非常に多勢であるのに、汝一人が強て賞を要求するからには、どこか他のものも鈎と異つたところがあるか」

「私の鈎は二人の児供を殺して、其血を以て金鐵に注いで作つたものです」

そこで王は澤山の鈎を出して見せて「此内どれが汝の作であるか」と聞いた。

實際鈎は非常に澤山で其中には形状の似てゐるのが多いので、どれが誰のものであるか、判別することは出来ないのもある。

そこで鈎匠は澤山の鈎に向つて二人の児供の名を呼んだ。

「吳鴻よ、鳳禧よ、父は此處に居るぞ、王様は汝等二人の靈魂がそこにゐることを知らないのだ」

其聲が途切れるや否や、二つの鈎が共に飛んでいつて、父の胸に轟と着いた。

王は非常に驚いて鈎匠に謝して、百金の賞を與へ。以後鈎は常に之を帯びて身を離さなかつた。

湛 盧 の 劍

吳王闔閭は其妹の膝玉が非命に死んだのを痛惜して厚く之を葬つた。

其墳墓の作り方が非帝に丁寧であつたことは勿論。葬儀には金の鼎や玉の杯、銀の樽やら珠の衣などを葬列に加へたばかりでなく、詭計を以て多數の無辜の人を殺して其葬列を送らせた。即ち多數の殉死者を出させたので、國人は皆王の仕方を悪んでゐた。

王の重寶である湛盧の劍は、王の無道を悪んで王の許をぬけ出て、水に浮んで楚の國に行つて了つた。

楚の昭王は或日眠りから覺めて、牀の上に一つの見覚えのない劍のあるのを見て、不審に堪へないので卜者を呼んで問うた。卜者は答へた。

「之れは湛盧の劍でございます」

「どうしてさういふことが言へるのか」

「私が豫て聞いてゐますのに吳王は越王より獻せられた寶劍三振を所持せられて、其名

前は魚腸と磐郢と湛盧と申します、そして魚腸の劍は王僚を殺すに用ひられ、磐郢は其娘の葬式を送るに供せられて、今は湛盧が楚王の許に來た譯であります』

『湛盧が楚に來たのはどういふ理由か』

『私が豫て聞いてゐますのに、越王の元常が名匠歐冶に五振の劍を造らせたとき、薛燭といふものに見せたところが、燭は魚腸の劍は逆理不順で佩用にはならぬ、臣が佩びれば君を弑し、子が用ひれば父を殺すと答へたが、吳王は果して魚腸の劍を以て王僚を殺しました、又磐郢も異類の業物で人の用に立つべきものでない、之れも果して葬儀の用に供せられました、湛盧は五金(金、銀、銅、錫、鐵)の生粹と、太陽の精氣と合體して出來上つたもので、之を出せば神を見、之を佩びれば威重滿幅で、以て人を制し敵を拒くことが出來ます。併し君たるものにして逆理の行爲があれば、其劍は逃げて、有道の人に就くのであります、今吳王は無道にして其君を弑し、楚國を討滅せんと野心を藏してゐるので、湛盧の劍は逃げて楚王の許に來たのであります』

楚王は『其價は幾何であるか』と問うた。

『此劍がまだ越にあつたとき、其價を云つたものの一つに三十の市邑と、千匹の駿馬と、

人口一萬を有する都會二つといふのがありましたが、其際薛燭は當時鐵を採つた赤董の山は、もはや以前のやうな靈なものではなく、水を汲んだ若耶の溪も非常に深くなつてしまつた上に、山や溪に慣れた多數の臣も亡くなり、劍匠歐冶も死んでしまつた今日では、滿都の金を集めても河一ぱいに珠玉を埋めても、湛盧の代償には足らない。況んや駿馬だの萬戸の都だの、お話しにはならぬと申したといふことです』

と答へたので、昭王は大いに悦んで、以後重寶とせられた。

吳王は湛盧の劍が楚に入つたのを知つて、非常に怒つて、孫武、伍子胥、白喜などを大將として楚を討たせ、六と潛といふ二つの都を攻め落した。

越王勾踐女
劍俠を招ぐ

一本の竹の
両端で撃ち
合ふ

白 猿

越王勾踐ある時功臣范蠡に手劍の術を訊ねた。范は答へて

「承はりますれば趙に善く劍を使ふ女がゐるといふことで、國中での評判でございますから、その女を召してお訊ねになつたが宜しうございませう」

といふから、越王は取敢へずその女を招かされた。

王の召に應じてその女が謁見に出向く途中で一老人に出逢つた。その老人は自ら名宣つて

「わしは袁公といふ者ぢやが、お前さんは大層善く劍を使はつしやるさうぢや、一つお腕前を拜見しようぢやないか」

「御存じとあれば何お隠し申しませう。あなたのお試しを受けませう」

女も悪怖れず答へた。

袁公は路傍の竹を枯棒の如く引き曲げた。末が地から折れた。その梢を女に持たせ、

白 猿

自分は根を握つて相對立した。そして公はその竹の本で女を刺さうとするから、女は同じくその竹で打ち拂つた。

公は女の手練を見たと思つたのか、ヒラリと樹の上へ飛び上つた。その姿を見ると白い猿であつた。

白衣の美人

唐の玄宗の開元年間の話。

吳郡に某といふ士があつて、明經の試験に應じようと思つて都へ上つた。

唐時代、登用試験に六科あり、明經は其の一なり。

地方から遙々の都へ上つて大路小路を辿り歩いてゐると、二人の少年と行きあつた。大きな麻の衣を着てゐるその少年は、某に向つて頗る丁寧に挨拶をして通り過ぎた。見識つた貌でもないので人違ひだらうくらゐに思つてゐると、二三日経つて復たその少年たちに出逢つた。

途上の二少年

「あなたは未だお宿も定りませんのですか。今日は私どもへお迎へしようかと思つてゐたのでした、よいところでお目にかゝりました、どうかお出でを願ひます」

といふ。某は臍に落ちないで決しかねたが、頻りにいふものだから、少年たちに誘はれて幾つかの町を過ぎ唯ある道傍の家へ入つた。内へ入つて見ると至極行届いた設備で、某を客室へ請じ入れ取敢へず御馳走を出して來た。二少年は某と對坐して主人役を勤むるが、外にも數人の少年があつて、至つて慎ましやかにしてゐる。そして度々門へ出て見れば誰か貴人の來るのを待つ様子であつた。午後になると果して、

「お出になつた、お出になつた」

といつて少年どもが後について一輛の車を門内へ曳き込んだ。見れば青貝入の立派な車であつた。客室の前に車を据ゑて、やがて車の簾を捲くと、一人の女が下り立つた。年の頃は十七八、頗る美人、髪を梳り垂れ白絹の衣を纏つてゐる。

主人の二少年は並びて女を拜したが、それには答禮もしない。某も驚き惟みながら拜をすると、その女は某に對して拜を爲した。

貴人の來るを待つ

女俠との相見

その女もやがて席に就いて酒宴となつた。諸少年は何れもその左右に列坐し、數々の料理が出て酒數巡に及んだ。

女は盃を捧げて某に向ひ、

「久しくあなたの妙技の程を伺つてゐます。今日はこの二少年君のお招きで圖らずお目にかゝつたのは誠に嬉しい事でございます。どうか一つ拜見させて頂きたいものですが」といふ。某は恐縮してしまつて、

「私は幼少から儒經を習つたばかりで、樂器を弄したり歌をうたつたりするやうな御座興を添へる技は全く不調法です」

「そんなものを伺はうといふのではございません、まア熱く考へて御覽なさいまし、あなたがお出来になるのは一體何なのです」

斯ういはれて某も考へん込だ、そして

「壁に足をつけて幾歩か歩けるぐらゐなものですよ」

「それですよ、やつて見せて下さい」

某は已むを得ず室の壁に足をつけて幾足か歩いて見せた。長いことは出来ないので直

技藝の所望
に面食ふ

壁を歩く
藝當

に下りた。

「大層難かしさうですね……さア〜皆さんも何かおやりなさい」

と女が少年たちにいふと、各起つて拜をしてから種々の事をやり出した。

壁を歩く者がある。椽を握つて傳はり歩く者もある。身の輕さは宛ら鳥か何ぞのやうである。某は驚きもし恥ぢもした。

少時して女は歸つて行つた。某も茫乎して此家を出たが、又二三日すると例の二少年に逢つた。

「馬に騎りたいから、お馬を貸して下さいませんか」

といふ。某は何の氣もなくその馬を貸してやつた。

ところがその夜宮苑に賊が忍び込んで大騒ぎとなり、賊は取逃したが馬だけ押へた。

盗んだ物を運ぶ所存だつたのだらうといふので、その馬の持主を調べ辿つて、到頭某が騎つてゐた馬だと判り、某は早速捕はれた。

宮城内へ引かれた彼は深い坑の中へ突落された。上を見ると坑の口が小さく見える。食事の時には、上から食器を繩の端に結んで吊り下してくれる。餓いから急いでそ

白衣の美人

奇藝の競演

宮苑の賊の
手懸りは某
の貸した馬

坑穴中に囚
はる

れを取つて食ふと、繩は早速引上げられて了ふ。夜更けて彼はこのまゝ死ぬ事かと悲歎にくれてゐると、何やら鳥のやうなものが飛込んで来た。傍に近づいたのを見るとそれは人であつた。

俠美人の救

「恐かつたでせう、もう私が来たなら安心よ」と彼を撫でながらいふのは女の聲だつた。それは先日奇怪な白衣の美人であつた。

「さア一緒に此處を脱け出ませう」

宙を飛んで
城門を脱す

と絹で彼の胸から肩へ繋と縛り、一端を自分の身に巻きつけたかと思ふと、高く々々飛び上つて難なく宮城を脱出した。城門を距る數十里のところをやつと地上に下りた。

「あなたは當分故郷へ歸つてゐたが良いでせう。官途に就くのも見合せたが良いでせうよ」

と女は別れ去つた。某は危く獄死するのを免れたので、仕官どころでなく郷里へ歸つてしまつた。

俠 僧

唐の徳宗の建中初年の事である。

道伴の僧と
馬を併べて
談す

章某といふ士人が汝州へ轉住しようとして、家族を纏めて出かけると、途中で一人の僧と道づれになつた。馬を並べて行く／＼談を交へると悉皆氣が合つてしまつた。

話はずんで道中の寂しさも知らず、道を急いでゐると暮方になつた。岐路があるところへ来て僧は

「これから二三里這入ると私の寺ぢやが、どうです寄つて行きませんか」

といふ。章も別れ難い感があつたので承諾して、妻子等を先に遣つた。僧は從者に命じて馳走の用意を申附けたりした。

ところが二三里どころか十餘里行つても寺らしいところが無い。變に思つて尋ねると、林のあるのを指して「あれです」といふから其處まで行くと、其處でもなく又先へ進む。日は既に暮れて眞暗となつた。章生はこれは奇怪だと用心しはじめた。

怪しい僧の
棲家

實彈をこめて僧に詰問

後 僧

彼は元來丸を弾く武技に達してゐた。彼は密かに靴の中で弾き弓へ丸を装つてから僧を詰りはじめた。

『私は旅の日取があつて急ぐものですが、上人の談をもつと承りたいばかりに、お招に應じて傍路へ入つたので、それも二三里といふことだつたからのことで、もう早や二十里も來ても着かないのは、一體これはどうした譯です』

言ひながら隠し持つた弾き弓で一發喰はした。その丸は果して僧の頭に的中した。普通なら一丸で人を仆すのに僧は知らぬ貌をしてゐる。章生は續けさまに五發も放つて皆中^あてた。それでも僧は別に驚いた様子も見せないで、

『いたづらしちアいけません』

と頭を擦つてゐるだけだつた。章生は呆れもし懼れもしたが、何うすることも出來ないで跟いて行くと、又暫くしてやつと一軒の家に辿りついた。其處には數十の人が炬火をともし列ねて迎に出てゐた。

僧は章生を廣間へ招き入れて、

『心配せんでも宜いよ、お若いの』

寺に到着

射られても知らぬ顔

妻子は別室に無事

と笑ひながら左右の者に

『奥さんのお宿は不都合なく出來てるだらうな、うん善し〜……お若いの、ちよつと自分で行つて慰めて來さつしやい、奥さんたちも心配してござらうからのう……それから悠^ゆくりお目にかゝらう』

章生は別室へ行つて見ると、其處には家族の者が、澤山の馳走を出されて怯^{おそ}えてゐるのだつた。互に無事な顔を見ては泣いた。

再び僧の前へ出た。僧は隔意なく章生が手を執つて、

『わしは盗人なのちや、決して眞正直な人間ぢアないだがお前さんの腕前には感心しちまつた。わしだからこそ助かつたが、他の者なら參つてしまふ……今日は決して悪い事はしないから安心さつしやるが宜い。先刻途中で撃たれた弾丸はホラこの通り』

と頭の後^{うしろ}の方を撫で回すとポロリ／＼と五つの丸がこぼれ落ちた。

それから筵席を設け、轆^{こし}を蒸したのに十餘本の刀子^{ナイフ}を突刺したのを眞中に、餅や薬味^{やくみ}などを盛つて饗^たした。僧は

『義弟が少しゐるから逢つてやつて貰ひませうかい』

脇後に丸を抽く

わしは盗人だ

後 僧

丸

手下共に引合はず

後 僧

言下に朱衣の大男が五六人も出て階下に並んだ。僧は怒叱りつけるやうに、
『お前達このお若いのお辭儀せい、お前等が先にこのお若いの出喰はさうものなら
粉微塵に消し飛ぶとこだつたぞ』

食事が畢ると僧は辭を改めて話し出した。

不孝の子殺害の依頼

『實はわしはもう久しくこんなやくざな業をして來たのぢやが、御覽の通りの老老には
なるしふつとりと廢めたいのぢや、ところが悴奴がわしの手にもおへないのが誠に心遣
ひな譯で、何うだらうわしの頼みぢやが一思に禍根を斷つて貰へまいか』
子の飛飛といふのを其處へ呼出して章生に挨拶させた。見ると年僅かに十六七だが、
その腕ッ節は宛ら乾肉の如く硬さうに見えた。

『このお客を奥へお供してお相手をせい』と飛飛に命じ、一方章生には劍と彈丸五つと
を與へて囁いた。

『どうかこれで祕術を盡して殺して下さい、この老老が安心出来るやうに』

章生と飛飛の立合

章生と飛飛とは一堂の中に入れられて鎖された。その堂の四隅には燈を煌々と灯して
ある飛飛は短い鞭を持つたゞけで正面に立はたがつてゐる。

飛飛が變幻出沒の妙

章生はこの時こそ我が武技の限りを示す處と思ふから、特に心に念じて彈き丸を放つ
と必ず中る筈の丸が易々と敲き落されて了ふ。そののみでなく飛飛はばつと梁の上に躍
り上つたかと思ふと、壁側の空を飛んでゐて、その身軽さ敏捷さ目にも留らぬ程で、追
の章生も有る限りの丸を放ち盡して仕留むることが出来なかつた。

徒に鞭を刻むのみ

丸が無くなつたから今度はこれだと章生は劍を揮つて逐ひ縋つた。飛飛は遠くも逃げ
ず、章生の身の回り一尺ぐらゐの近さにゐるが、ひらり／＼と身をかはず。飛飛が持つ
てゐる鞭は斬り落し／＼して次第に短くはしたが、しかし飛飛の身體には傷一つ負はせ
ることが出来なかつた。

大分時間が経つてから僧は扉を開いて

『わしの心配の種は絶えましたか』

と訊くから、章生は實は斯々でと有のままを打明けた。

僧は悵然として飛飛に向ひ

『この方に願つたらと思つてやつて貰つたがね、結局お前が手に負へぬ奴だといふこと
を證明して貰つたゞけだつたよ』

後 僧

一夜武技を
談ず

京西の老人

一一

といつた。そして章生と武技の談に一夜を明かしてしまつた。僧は曉に章生一行を本道まで送り出して、絹百疋を贈り泣く／＼別れてしまつた。

京西の老人

是は唐の章行規が若い頃の事を自分で人に語つた談である。

若い頃彼は都へ出ようと旅立つた。ある宿屋に立寄つて夕方其處を立出でようとする
と、店先に桶屋の爺さんがゐて、せつせと桶の籠かごを入れてゐた。

『お客さん夜道はいけませんぜ。泊剝おひはきが多おほがすぜ』

と桶屋の爺は注意したが、彼は

『爺さん心配しなさんな。私もね、少しは腕に覚えがあるからね、別に心配する事はな
しよ』

と平氣で出かけてしまつた。それから餘程歩いた頃、眞ま黒暗くらやみの草叢から誰やら現れ出
て彼に尾いて來た。

怪漢の尾行

桶屋の爺が
夜道を戒む

俄然雷霆霹
靂の凄慘

弓矢ばかり
を恃むなり

板にむら立
つ昨夜の矢

章はその者を叱つて見たが平氣で跟いて來る。怪けしからぬと思つて矢で射て確かに當
つても更に逃げない。その内に矢種が盡きた。斯かうなると彼も恐おそくなつて一所懸命に馬
に鞭うつて駈け出した。少し行くと風が起り雷雨が襲つて來た。已むを得ないから大樹
の下で雨宿りをする、電光は宛ら答こたつ杖つゑの如くその木の上に閃き飛び、物凄さ言ふば
かりもない。彼も絶體絶命の感がして天を仰いで命だけはと祈願した。

彼が頻りに樹下で祈つてゐると次第に風も熄み電光も遠さかつた。彼はその大樹を見
ると枝どころか幹までも滅茶々に叩き碎かれ彼の馬も居なくなつてゐた。彼も閉口し
て先刻の宿屋へ引返して見ると、例の桶屋の老人は平氣で桶の輪を入れてゐた。

これはたゞ人では無いわいと思つたから、挨拶をして、血氣に逸つたことを詫びた。

『お前さん弓箭を餘り恃みにしなさんなよ、劍術を知らなくちア駄目だアね』

と爺さんは笑つて章を裏庭へつれていつた。其處には彼の馬が繋がれてゐた。

『まア馬を受取つて貰ひませうかい。なアにね、ちよつくら驗たして見たまでさ』

爺さんは桶の板を出して見せた。その一枚の板の面には昨夜章が射つた矢が皆揃つて
立つてゐた。章は驚き感じてその妙術を傳へて貰ひたいと頻りに頼んだが、どうしても

許さなかつた。
それでも撃劍の事は幾分教へてくれた。それで彼も劍の法は多少會得することを得たのであつた。

蘭陵の鬚切の劍

唐の黎幹は京兆の尹(市長安の)であつた。

或年旱天が續いた、め曲江の池の龍神に雨乞の祈禱をしたことがある。黎もその式場へ臨むべく出かけて行つた。見物人は市長のお入來だと道を開いたが、一人の爺さんが道の真中に杖を突立てたまゝ避けようとしなかつた。黎は推參な奴と思つて杖で引叩いた。宛で靴を叩くやうな音がして、爺は別に痛い貌もせず、ノソノソと大手をふつて去つた。その狀が如何にも非凡に見えたから、町役人に命じて後を跟けさせた。爺は蘭陵里の南へ行つて小門の中へ入つた。
「酷い目に逢はせられたわい」

蘭陵里の詔
住居

京兆尹一老
人を答つ

黎親しく訪
問して罪を
謝す

凡眼人を誤
まる

町役人はその傍若無人の態を見届けて走せ歸り、黎に斯と告げた。黎は大に懼れ破れ衣を纏つて先の役人とその町へ出かけて行つた。既に日暮れて闇かつた。役人は先づ内へ入つて、市長様のお出だと呼んだ。黎は這入つて其處に平伏して
「先刻は御老人に魚相を致しまして、何ともお詫の申上げやうもございません」
とひたあやまりにあやまつた。老人も驚いて
「誰だいこんなところへ市長さんをおつれ申したのは……」
と言ひながら黎を階上へ請じ入れた。黎は此人なら道理には服するに違ひないと思つたから、穩かに
「實は手前は當市の長でござる、かういふ役は公衆の前で威嚴を墜すやうなことがあつては政治は行なはれません。それで先刻のやうな仕誼にもなりましたので、それと申すも御老人が一般愚民の中に隠れ混つてお在になるものですから、凡眼ではお見外れ申すのも已むを得ません、これで若し深くお咎めになるならば、それは御無理と申すもので、人を誤たしむるために態とさうしてお在になることにもなりません、それは義士の心ではござりませぬ」

歎談深更に及ぶ

と婉曲に自分の不明を釋明した。爺は

「いやわしが悪かつた」

と笑つてしまつて酒を出した。黎を案内した役人も其處へ呼んで。夜更けまで種々物語をしたが、爺の言ふところは頗る要領を得て理路井然たるものがあるので、黎も尊敬の念を禁じなかつた。

「この老人も腕に覚えの技があるから一つお目にかけませう」

と別室へ仕度をしに行つた。良少時^{やうしよし}して紫衣を着し朱囊をかけて出で、七口の長劍を執つて庭に下り立ち、劍を回し身を躍らし、宛ら電光石火の妙技を見せた。中にも二尺ばかりの短劍が度々黎が鬚に觸るゝので、黎はハラ／＼して早く止めてくれと願つてゐた。

その内爺さんはその七口の劍をカラリと地に投げると、宛ら北斗七星の列んだやうに地に横はつた。

膽を試すのみ

「市長さんの膽力を試したまでゝすよ」

と爺は平然としてゐた。黎は震へ上つて、

鏡を見てびっくり

「全く命拾ひをしたやうな気がします。是から御老人のお側にゐて教を受けたいと思ひますが如何でせう」

「あなたの骨相を見るに、どうも道士となるべき氣が見えない、ウカと御傳授は出来ません、何れ又その内お出でなさい」

と爺は挨拶をして奥へ入つた。

黎はそのまゝ歸つたが、顔色蒼褪^{あせ}めて病人のやうであつた。鏡を見ると自分の鬚は一寸も綺麗に刈り込まれてゐた。

餘りの手練に敬服して、翌日又もや蘭陵里へ出かけて見たが、もう其處には誰もゐなかつた。

盧 生

唐の憲宗の元和年間に、江淮に唐山人と號する者がゐた。廣く史傳に通じ且つ道教を好んで名山に籠つてゐた。

盧 生

縮錫の方術
爐火の神技

縮錫の秘傳
を問ふ

山人頑として許さず

盧 生

一八

彼は方術の縮錫しゆくせきを善くすると稱してゐたので、これに師事する者も多かつた。或時楚州の旅店で盧生といふ者と逢つて互に意氣投合した。盧も亦方術の爐火ろくわを善くするものであつた。

年配からいつて盧は唐を舅せうと呼んで相親しみ、相携へて南岳なんがく（衡山）に向向いた。

彼等は途中である寺に泊つた。いろいろと語り更した夜半に盧は唐に、對つて

「舅せうさんは縮錫の術が旨いんださうだから、そのあらましを聞かせて下さい」と頼んだ。唐は笑つて

「この術を得るまでには何十年といふ苦辛勉勵を経てゐるのぢや、さうお手輕に傳へられるものぢやないさ」

と逃げたが、盧は尙も執拗に教を迫るので、

「實は師傳を受けるの時の約束があるから、是ばかりは何といつても秘密を守らねばならぬのぢや」

唐も頑として肯かない。盧は佛ぶつとして

「今夜はどうあつても聞きます、良い加減な御挨拶では困りますよ」と迫る。

先づ命から貰はう

山人我を折る

賢仙人退治

「一體わしとお前とは元々もとあかの他人で、何の續き合もありアしない、不圖ふと廻り合せて親しくなつたも、士君子として慕ふからの事ではないか、それに下賤な者のやうな理不盡ねだな強請りやうをするとは何事ぢや」

唐たうが嗜たしなめるやうにいふと、盧は臂を張り目を瞑らして、ハタと唐を睨にらめつけ、

「かう見えても私は俠客ですぜ、何うしても教へるのが嫌だといふのなら仕方が無い、命から先づ貰ひませうかい」

懷みかづきから偃月えんげつのやうな匕首を取り出した。そして爐の傍にあつた火熨斗ひおきを、泥でも切るやうに易々と削つて見せた。その刃の鋭さと盧が險幕けんまくとに怖ぢて、唐も遂にその秘術を打明けた。さうすると盧は笑ひ出した。

「危なく舅さんをおやめるとこだつた。縮錫の術も六七分は分つたやうだ……」
といつて置いて、扱語を改め、

「本當のことをいへば、私の師は仙人です、私たち十人を諸方へ出して、世間で無暗に煉金術などを傳へ歩く奴等を搜し出し、片端から殺して廻るのです、添金縮錫の術などを容易く傳へる者も同じく殺すのです、私は久しく乗躡りやく（方術の二）の道を得てるもので

盧 生

一九

す、今あなたが容易に術を傳へないのを見て安心しました、それではこれで……」
と挨拶をすると、忽ちその姿は消えてしまった。

唐山人は以來、道教の方術を汲む者に逢ふ毎にこの話をして警戒させてゐた。

〔乗躡は忍術の類、添金縮錫、爐火は今の還銀還金術の類ならむ〕

弄 隱 娘

弄隱娘は唐の徳宗の貞元間に、魏博の大將軍だつた弄鋒の娘であつた。

乞巧尼將軍の娘を養女に申入る

この娘が十歳の時だつた。ある日一人の乞食尼が來て食物を乞うた。そして娘を見て大に見込んだらしく、

「このお嬢さんを私に下さい」と申出た。

將軍は大に怒りもし呆れもして叱り飛ばした。しかし尼はセ、ラ笑つた。

「鐵の櫃の中に藏つてお置きになつても、伴れて行かうと思へば伴れて行きますよ」

愛嬢は是る

その夜果して娘は行方不明になつた。見くびつてゐた父の將軍もこれには驚いて、八

五年目で連れ戻る

方へ人を出して捜させたが更に判らなかつた。夫婦は旦暮この娘の事を言ひ出しては泣くばかりであつた。

五年の月日が流れた。

先年の尼がヒョッコリと娘をつれて戻しに來た。

「教へるだけの事は教へたから、お嬢さんを受取つて下さい」

と言ひ捨て、尼は居なくなつた。一家は嬉しいやら悲しいやら譯の判らぬ涙にくれて、左右から取廻り、

「何を習つたの、言つて御覽」

と迫つたが、娘は良い加減に

「最初はお經ばかり讀ませられ、それから呪文を唱へることを教へられたとけよ」

と生返事をしてゐた。將軍はそれだけではあるまいと思ふから、頻りに根掘り葉掘り問ひ訊した。

「だつて本當の事お話したつて虚言だと思ひになるにきまつてますわ」

「いや何でも本當の事を聞かしておくれ」

五年間の修業は果して何?

愛嬌嚴囀中
の生活を物
語る

「ぢや本當の事をお話します。最初あの尼さんに伴れ出されて、幾里行つたか判らないけれども、夜が明けると大きな岩窟の中へ這入りました。その奥の方へ行きますと、なんか居なくて、澤山の猿が居たり葛が蔓つてゐたりしました。すると、やつぱり十歳くらゐの娘が二人ゐました。それは、利巧で綺麗で、何にも食べないくせに切り立てたやうな崖を平氣で駆け上つたり、宛で猿の木に登るやうでしたの。」

……尼さんは私に薬を一粒吞ませました。そして二尺ばかりの寶劍を一口私にくれさせた。それから二人の娘にいろ／＼の事を教へて貰ひますと、私の體も風のやうに軽くなりました。

……一年の後には、飛び回つてくる猿を刺して百に一つも仕損じませんでした。それから虎や豹を刺しても屹度その首を斬つて來ました。三年経つとあの早い鷹や隼を刺しても中らないことは無くなりました。最初は二尺ある劍だつたのですが、その頃はもう五寸しかないのになつてゐました。

……四年目に二人の娘に穴の留守居をさせて尼さんは私を賑かな都へ伴れて行きました。何處だか私には判りません。そして途中で逢ふ人を指して、あの人にはこれ／＼の

一粒の薬を
一口の寶劍

空を飛ぶ鷹
隼を刺す

雜鬧市中に
初めて人を
刺す

生首が水に
なる

凶暴な大官
を誅戮す

残忍

後頭部に
首を隠す

罪があると一々並べ立て、頼むから人に覺られぬやうに首を刺して來い、膽を据ゑてやれば飛鳥を刺すやうに容易い事だからと仰しやつて、羊角のやうな匕首を渡されし。又の廣さは三寸もあつたでせう。それを持つて白晝都大路の眞中で人を刺しました。誰も氣が付きません。その首を袋に入れて尼さんへ渡しますと、薬で以て忽ちその首を水にしてしまひました。

……五年目には、ある大官が理由無しに人を澤山殺したから、夜分に行つて首を取つて來いと命ぜられました。又匕首を持つて、その邸の戸の隙から易々と忍び入つて梁の上に暫く様子を窺つてから、その人の首を斬つて歸りました。さうしたら大層おこられました、何故こんな手間が取れたかと言はれますので、だつてあの人は子供をあやしてゐましたから暫く待つてゐましたと申しますと、そんな時はその可愛がつてる子の方から先に殺すものだど叱られました、私は謝まつて置きました。

……それから尼さんは、お前の頭の後ろに匕首を隠して置いて上げるからね、傷は出來はしないよ、入用な時は何時でもその匕首が取り出せるやうにして置いて上げるからね、もうお前も術は出來たから、自宅へお歸り、といつて送つて下さいました、そして

可愛よりも
怖ろしい

これから二十年経つたら一度逢はうと仰しやいました」
追まの將軍もこの話には憎にくえてしまった。それからこの隱娘は夜になると何處かへ出かけて明方に歸つて来る。父の將軍はそれを知つてゐるけれども、敢て叱ることも出来なかつたが、可愛いよりも恐ろしさ氣味悪さが募つて、わが子ながらも餘り愛しなくなつてしまつた。

或時娘は鏡磨きの少年と門で出逢つた。

鏡磨き少年
と結婚

「此人が私の夫になる人だ」と父にその旨を打明けた。この氣味の悪い娘の云ふことだから將軍も承諾する外はない。早速結婚した。ところが此男鏡は上手に磨くが、外には何の能もない。それでも將軍はこの若夫婦に潤澤に物を給して安々と暮させてゐた。さうすること數年で父の將軍は亡くなつた。

節度使から
招聘

後任の魏博節度使はこの娘の異人であることを聞いて、禮を厚くして迎へて側近の吏に任じた。それで數年経つた。

元和年間になつて、魏博の節度使と陳許の節度使と不和を醸したことがあつて、魏博の節度使は隱娘に頼んで陳許の節度使劉昌裔が首を取らせようと思ひ立つた。隱娘は許

劉節度使早
くも刺客を
豫知す

へ出かけて行つた。然るに劉昌裔は神算を善くする者で、さういふ刺客が来ることを見抜いてゐた。部下に命じて、

「早く城北に出て待つてゐよ、一人の男と一人の女と白の驢と黒の驢とに騎つて来るに相違ない。城門のところでは鵲が噪ぐのを見て男が弾き弓で撃つたらうが中るまい、そして妻が夫の弾を一つ取つて忽ち鵲を仕留るだらう。さういふ奴が來たら、丁寧に節度使が早くお目にかゝりたいといふのでお出迎に参りましたといへ」

驢を盡して
隱娘を迎ふ

と出してやつた。部下の將は果して隱娘夫婦に出逢つたから、その通りにいふと、

「劉さんこそ本當の神人だ、さうでなければこんな使なんか寄越よこす理がない」

と二人は感心して劉に謁いたはした。劉は大に勅いたはつてやつた。二人は
「私どもはあなたの首を取らうなぞ、大それた事を企てゝ來ました」と謝罪した。劉は穩かに

あなたの首
を取りに来
た

「人各その主の爲に竭すのは當然の事ぢや、何うか今度は此方へ留つて貰ひたい」

といつた。隱娘も先の主と較べて遙かに劉の偉いのを知つたから、

「どうか此方でお役に立ちたいと思ひます」

主人取替へ

白紙と黒紙
の驢馬

と承諾した。劉は、どの位の俸給を與へれば宜しいかを尋ねると、一日に錢二百文あれば澤山だといふから、その通りに取計らつた。然るに夫婦が騎つて來た二頭の驢馬が急に見えなくなつた。劉は人々をして尋ね探させたが見えない。後になつて布囊の中に白紙と黒紙とで驢馬の形を切つたものが入れてあるのを發見した。

一箇月餘り經つて隠娘がいふには

「私は魏博から來たまゝ消息を絶つてゐますから、きつと又誰かを此方へ遣りませう。今夜私は髪を剪り取つて紅絹を結び、それを魏博の節度使の枕邊に置いて、もう還つて來ませんといふ證據にしませう」

と出かけて未明に歸つて來て、

「たよりをして置きました。今夜は屹度精精兒といふのを寄越して私を殺しあなたの首を取らせようと思つた。ですけども旨く計つて那奴を殺しますから御安心下さい」

といふ。劉は豁達大度で更に氣を揉む様子もなかつた。夜になつたから特に燈火を明々と灯しつらねさせた。夜が更けると紅白二つの幡が現れて飄々と絡み合ひ撃ち合ふやうであつたが、良久くして一人の人間が空から落ちて首と體とが別々に仆れた。すると

再び刺客を
派す

敵手は仕止
めた

隠娘も直ぐ姿を現はして

「精精兒を仕留めました」と屍骸を堂下へ曳き出し、藥をかけると忽ち水となつてしまつて頭の毛も残らなかつた。

「今夜は是ですみました。明晩は屹度空空兒を寄越させよう。これは誠に神術を得たもので、何をするか人に看破られることもなく、鬼神も彼が行方を突き留め得ない位です。天に隠れ地に潛む偉い妙手で、私などの到底及ぶところではございません。是は偏にあなたの御運を頼む外はありません。然し于闐國の玉を頸にお巻きになつて、その上を夜具で包んでお置きなさい。私は蝸になつてあなたのお腹の中に隠れて様子を見ませう。どうもその外に方法がございません」

と隠娘も持餘したらしかつた。劉は隠娘がいふ通りに用意して寝た。三更の頃トロ／＼と睡りかけたかと思ふと、襟元に鏗然として厲しい音がした。劉が目醒すとその口中から隠娘が躍り出て、

「おめでたうございます。もう御安心です。あの空空兒といふ人は、鷹が一搏ちで獲物を捕り損ねたらそのまゝ外れてしまふのと同じで、一撃して失敗したからもう心に恥ぢ

不思議な防
禦術

隠娘口中か
ら躍り出づ

頸の玉に刃の痕

て去つてしまひました。一更かつか経たない間に早や千里を隔てゝゐませう』
劉は頸に巻いた玉を取つて見ると、果して匕首で深々と斬りつけた痕があつた。此事あつて隠娘は益々厚遇された。

塵寰を厭ふ

元和八年劉昌裔は許州から京師へ上つた。その時隠娘は一緒に都へ出ることを厭つて、『これから山水を討たねて至人を訪れたいと思ひますから、お暇を下さい、私は一人参りますから夫を残して置きます、どうか夫には世過ぎが出来るやうに御給與が願ひたい。』と申出た。留めたからとて留る者ではないので劉もそれを許し、夫へも約の如く良く給與した。その後行方が判らなくなつてゐたが、劉が軍中に薨した時は隠娘も驢に鞭つて一度都へ現れ、劉が柩の前で慟哭したといふことである。

劉の柩前に慟哭故主の嗣を邂逅

文宗の開成年間に、昌裔の子の劉縱が陵州の刺史になつて赴任の途中、蜀の棧道で絶て久しい隠娘に出逢つて、互に大に喜んだ。娘は例の白驢に跨つてゐた。そして、

任地の禍を豫言す

「若様は任地へ行かないが良うございますよ、大變悪いことがあります。まアこの藥を召上れ、私の藥の力は一年しか持ちませんから、來年は早速官を抛つて都へお歸りなさい、さうしたら禍は避けられませうから」

と懇ろに諭したが、縦はさまでこの忠言を信じもしないで、織物などを與へようとしたが、娘は一つも受けずた惜々と別れ去つた。

縦が翌年辭職もしなかつたが、果して任地で卒した。その後誰も隠娘を見た者が無い。

荆 十 三 娘

唐の進士の趙中立は温州に住んで豪俠を事としてゐた。

趙進士と三娘

或時蘇州へ行つて旅舎で一人の女に逢つた。それは荆十三娘といふ商家の寡婦で、亡夫の三年の法要を支山禪院に營むのであつた。この荆娘が趙を見初めてしまつて、揚州の我が家へ趙を伴れ歸つた。處が頓着しない趙は意氣、義俠の爲めならば平氣で荆娘の財をバツバと費つてしまつた。

その友人の李正郎といふのが一人の愛妓を持つてゐた。ところがその妓の兩親が李の手から娘を奪つて諸葛般にやつてしまつた。その頃諸葛般は呂用之と共に太尉高駢に取入つて暴威を振つてゐたから、どんな仇をされるか判らないと、李は涙を飲んで忍んで

李正郎愛妓を奪はる

娘の義憤

田彫郎と少僕

三〇

妓の生首

ゐた。この事を荆娘に話した。ところが荆も自分の事のやうに腹を立て、しまつて、『ようござんす、それ位の事なら譯なしですよ、私が取り返して上げます。ぢアね、江を渡つて潤州の北固山へ行つて待つてらつしやい、六月六日のお正午に私があそこへ行きますからね』

と易々と引受けた。李はその通りにして待つてゐた。約束の時間に荆娘は果して妓を囊に入れて擔いで來た。ついでに妓の両親の首も取つて來て、李の前に投げ出した。荆娘は趙中立と手に手を取つて浙江の方へ行つてしまつたが、その後の事は判らない。

田彫郎と少僕

文宗皇帝白
玉の枕紛失

唐の文宗皇帝が嘗て白玉の枕を寶としてゐた。それは德宗の代に于闐國から獻つた品で、彫琢頗る奇巧、希代の寶であつた。

犯人は何者

常に寢殿の帳の中に置いたのだが、ふつとその枕が紛失した。さういふ奥の奥へはお氣に入りの宮女でなければ出入りする者も無いのだから不思議であるのみならず、他に

も種々の寶器が並んでゐるのに、さういふ物は何も無くならず、唯枕だけが無い。帝も驚き恠しみて全都へ令して賊を捜させた。

一方禁衛兵の將校を集めて、

『外から盜賊の入る譯が無い、賊は必らず宮城内にゐるであらう、それが捜し出されないやうでは、今後如何なる事を企つる者が出ようも知れない。枕一つが惜しいのではない。卿等が斯く嚴重に衛つてゐても賊が捕へられないとあつては、一體禁衛隊存在の意義が無くなつてしまふではないか』

といつたので一同は恐縮してしまつて、十日の間に必ず逮捕する旨を奏し、大懸賞で搜索を始めたが扱判らない。その爲めに罪無くして引致されるものが次第に殖えるばかり、裏町や小路の末に至るまで、苟も疑はしきは拘引するが更に眞の犯人は擧らない。その頃禁衛隊中の龍武軍に王敬宏といふ將官があつた。十八九の青年を僕として使つてゐたが、頗る氣が利いた奴で何をやらしても更にぬからぬ男だつた。

敬宏が同僚と、同じ禁衛隊の威遠軍の軍舎へ行つて會飲した事があつた。その席に侍した樂妓の中に胡琴の上手が居たから、一座大に酔が回つた頃何か一曲と所望した。然

禁衛隊の狼
狽

大懸賞で搜
索

樂妓胡琴の
願

田彫郎と少僕

三一

し妓は、妓には良い楽器が無いから、自分の使ひ馴れたのでなくちアといふ。時既に宮城の門限で、もう取りにやる事も出来ない。己むを得ず妓等もそのまゝ席を辭しようとした。その時敬宏が使つてゐる青年が、

「琵琶がお入用だつたら直ぐ取つて來ますよ」

といふから、

「既に時を報する鼓も鳴つたではないか、あれが鳴つてから御門が開いてゐないのは平常お前も知つてゐるだらう、無茶をいつてはいけないよ」

と敬宏は青年の言葉を取り上げないで、尙も酒盃を巡らしてゐた。そこへ青年は美しい袋に入れた琵琶を持つてやつて來た。一同はヤンヤと喜び合つた。

この威遠軍の營舎と敬宏の龍武軍とは往復三十里も隔つてゐた。殊に夜間ではあり、道連があるでなし、それを倏忽に青年が往來したので、敬宏は吃驚した。そして直ぐ例の枕の犯人の事を意ひ浮べた。或は此の青年が怪しいぞと彼は内心疑ひはじめた。

酒宴も罷み夜も明けたから敬宏は自分の舎宅へ歸つた。そして彼の青年を喚出した。

「今まで何年もお前を使つて來たのだが、あんなに捷い足とは知らなかつた。世間で傳

青年の奇行

嫌疑者は青年

青年の告白

眞犯人を差出さう

犯人は田彫

秘密、秘密

士といふのはお前などの事ではないのかね」

と訊ねた。青年は、

「さういふ譯ではありません、たゞ足が早いだけでございます、時に私の父母は蜀に居りますのに、私一人が都へ出てゐます。もう父母の膝下へ歸りたいと思ひます。ところで今までの御恩報じをしたいと思ひますが、實は此頃嚴重なお調べの宮中の枕の犯人は、私は早くから存じてゐます、三日の間に罪に伏せしめてお目にかかせう。」

「そんな事は汗濁には言へないよ、然し成るべく早く冤罪に苦しむ人を助けたい、一體その賊といふのは何處に居るのだ、其筋へ知らせて逮捕させる譯には行かぬか」

「枕を盗んだのは田彫郎ですよ、あの男は町の店に居るかと思へば軍隊の中に居て、全く居所が定りません。それに大力であつて飛び越すことも上手です。ですからあの足を叩き折らない限り、千兵萬騎で取圍んでも平氣で脱け出します。今夜望仙門に待伏せしたら確かに捕へられます。將軍も御一緒に見にお出でなさい。尤も之はまだ〳〵秘密ですが」といふ。

その頃久しく雨が無く、酷い塵埃が舞ひ上つてゐた。夕方城内へ歸る車馬織るが如く

田彫郎自白

で、濛々たる埃の中では、半歩を隔てゝ人の顔が判らない程だつた。田彫郎はその雲の如き埃の中を軍門に入らうとした。其時例の青年は毬杖を取つて田が脚を強か拂ひ撃つた。ポツキと音して田は左の脚を叩き折られた。青年の顔を見上げて、『枕を偷んでからこつち、世間に怖るゝものはなかつたが、お前だけは氣が置けたよ、もう斯うなつては何を喋舌らうぞい』

仆れてゐる田を昇いで兵營へ歸り、訊問すると忽ち罪に伏した。

帝は賊が捕へられたのを喜び、それが禁衛軍の手で捕へられたと聞いて、その犯人を見たいと宮中へ呼び入れ、親しくこれを調べた。田は悪怯れず、平常宮殿内を自由に歩き回つてゐたことを白狀した。帝も驚いて、是は一通りの竊盜ではない、所謂任侠の流であらうと思つた。

今まで繋がれてゐた嫌疑者幾百人は早速釋放された。敬宏が使つてゐた彼の青年は、田が捕へられるとそのまゝ、主人に暇を告げて豫期の如く蜀の父母の許へと旅立つた。賞を與へんためにその行方を尋ねたが判らないので、主人の敬宏が賞せられたゞけであつた。

帝の前へ引き出す

父母を慕うて蜀へ

崑崙奴

顯官の病氣を見舞い

美妓の手から桃の馳走

唐の代宗の大暦年間に崔生といふ人があつた。その父は顯官だつたので某元勳と昵懇の間からであつたから、崔生は父の命で元勳の病氣見舞に行つた事があつた。

崔生は其の時近衛士官であつた。年は若し、容貌玉の如く、しかも天性物堅く、動作は淑やかにもの言ひは上品であつた。

見舞を受けた元勳は、近侍の妓に命じ簾を捲かせて崔生を室内へ招き入れさせた。生は拜して父からの口上を述べた。その様子を見て元勳は愛すべき若者だと思ひ、座を與へて談話をした。その時元勳は絶世の美妓三人を侍らせて、黄金の鉢に桃實を盛り、皮を剥ぎ甘酪を注がせてゐるところだつたので、その中の紅の上衣を着た妓に命じて、崔生にもその一皿を進めさせた。

此處の妓といふのは、後に朝鮮にあつた官妓、妓生の様なもの

崔は未だ若いのに偉い人の前で眩いばかりの美人に進められたので、キマリが悪くて

崔生赤くな
つてはにか
む

三本指を
殺した
妓の暗

翠舞さして
眼に在る
朱衣の美
妓

手が出せなかつた。元勳はその様子を見て、

「お前なんかゞジロ／＼見るから、若さんは羞かむんだ、それでは匙でおあげ」

といふから、紅衣の妓が匙に盛つて崔生に進めた。己むを得ず口を開いてこれを受けながら崔生は赧くなつてしまつた。聲を立て媚めかしく笑ふのであつた。

崔生が暇を告げて立つと、主人公は、

「暇があつたら、又この爺を思ひ出して来て下さいよ」といつて紅衣の妓に見送りをさせた。崔は匙で桃を食はせてくれた妖艶な美人が送つてくれるので、恥かしいながらもその顔を見たいと思つて振り返つた。さうすると妓は指を三本出して見せた。それから掌を三度反して見せた。最後に胸にかけた小き鏡を指して、小聲にたつた一言、

「覚えてゐてね」

といつて別れた。崔は歸つて来て父に復命はしたが、それ以來茫つとなつた。口數も少くなり元氣も無くなり、何やら呆然と見つめてゐたり、食事も更に進まなかつた。

いかなれば蓬が島には遊びけん

お、明珠の處女が眸の星よ

朱のとびらを出でやらぬ月

照らさざらめやこの愁雲を

くろんぼ忠
僕の思遣り

仰しやつて
御覽じろ

力なげの聲で斯う吟じたりしてゐたが、一體どうしたのかは家人の誰にも判らなかつた。然るに崔が家に崑崙奴の奴隷で磨勤といふものがあつた。

「若様は何をクヨ／＼してござらつしやるだ、この爺やに打明けてこれ／＼だと何故仰しやつちやア下さらねえだ」

「お前なんかに判る事ではないんだよ」

「さうでねえだ、まア仰しやつて御覽じろ、どんな事だつてどうにかしてあげますだ、一體何を考へてござるだね」と奇態な言ひぶりなので、

「そんなにまで言つてくれるなら」

と崔生が本當の事を打明けた。磨勤はカラ／＼と笑つて、

「そのくらの事、何でクヨ／＼するがものはねえだ、早く仰しやれば宜えのにさ」

「だつてね、判らない事があるんだよ」と妓が指を見せたり掌を反したりした事を話した。

奴隸暗號と解く

「それが判らねえ事あるものぢやねえ、指を三本見せたのは、あのお屋敷には別嬪さんのお局つねねが十ありますだ、その第三の局にわしは居ますだといふ譯だアね。それから掌を三度反したのは三五の十五日、鏡を指して見せたのは、月が明るい夜忍んでござれといふ事で、些ちつとも難かしいことありましねえだ」

逢瀬を渡る智慧

崔生はその機智に驚いた、然し嬉しくて堪らなかつた。扱どうして邸内へ入つて妓に逢はうか、彼には大難問だつた。爺やの磨勒はそれをも事も無げに笑つてのけた。

先づ番犬の始末

明晩は十五夜だから先方で心待に待つてゐる日だ。青絹を染めて忍び込みの服も作らなければならぬ。それには先づあの元勳の邸の猛犬を仕てかゝる必要がある。何しろあの犬は歌妓たちの局の番犬で、人が行つたら必ず噛み殺さうといふ虎のやうな恐ろしい奴だ、あれを斃すことの出来るのは廣い世間に此爺一人だ。今に殺して来るから安心しておいでといふやうな事をいつて磨勒は用意をした。

錐一本の武器

その夜は前祝とあつて磨勒は肉を裂いて酒を飲んだ。そして夜が更けてから錐一本を携へて出かけて行つた。暫くで立戻つて、
「犬はやつつけましたよ、もう邪魔なしだ」

美妓の春愁

と崔生と共に青衣を着け、彼の邸へ出向いた。爺は十重の扉を崔生を脊に負つてヒラリと跳り踰え、妓等のお局へいつて第三の門へ來た。美しい戸が細目に開いてゐて、媚めかしい燈火がチラ／＼見える。中には妓が憂はしげに坐して、折々術無さうに溜息をついてゐる。髪髪の毛が少しぼつれて顔色顔色に瘦れが見える。如何にも思ひ入つた體である。尙も様子を伺つてると、愁を含んだ美しい聲で詩を吟じ出した。

深谷の鶯、恨めばぞ啼く

珠の飾りもよしなや今は

雲の通ひ路、おとづれ絶えて

淋しや笛に何なぐさまん

崔生室に入る
まアよくこ

腰元ども、皆睡つたと見えて、四邊はヒソとして物音もない。崔生は簾をかゝげて中へ入つた。妓は驚いたのか少時黙つて見成みまもつてゐたが、やがて榻たふから飛び下りるやうにして崔が手を執つた。
「まアよくこそ……屹度あなたは解つて下さるとは思ひましたけれどもね、それでも此

處は中々お出になられる處ではないのに、どうして入つしやいました、まア嬉しい」

「實はね、宅に奴隷がゐましてね、それが私を脊負つて飛躍えてくれました」

「へえ、その人は何處にゐます」

「御簾の外にゐますよ」

「あら、ではその人も此方へ」

妓は磨勒に酒を出してやつた。それから妓は自分の身の上ばなしを始めた。

「私の宅は朔方さくかたにありましたの、此家の御前ごぜんがあらに就任して在あつしやいます頃、つまり御威光で私は御奉公に召し出されました。厭だとは思ひながら自分で死ぬことも出来ず、意氣地なく生き存らへてゐますの。毎日毎夜お化粧は華やかさうにしてゐましたも、胸の裡は解けた事とてございませぬ、食べものや身の回りや、どんなに綺羅を飾り善美を盡しましたも、それは少しも嬉しく思ひませぬ、まるで手枷てがし足枷あしがしを箠められた罪人のやうでございませぬの。

……如何でございませう、若様のお召使になつてる爺やさんがそんな偉い術を心得てゐる人でございましたら、私をこの牢から伴れ出して頂けないものでございませうか。

妓の身の上
語り

枷鎖に等し
き美衣

監落ちの相
談

崔生躊躇す

くろんぼ曰
いく何でもな

首尾よく脱
出

邸内の大騒

私はこの羞かしい境遇から脱けられさへしますれば、死にましても残り多いとは思ひませぬの。若しかして是から若様がお召使ひ下さるのなら、私どんなに嬉しいか判りませぬの、若様の思召の程は存じませぬけれども……

崔生は磨勒に手傳つて貰つて、うか／＼と忍び込みはしたものの、又この妓に對して堪へ難き愛着の念には驅られてゐても、斯う切り出されると當惑した。

當代第一の元勳の邸から美人を盗み出すといふ事は、いろ／＼の點から考へて容易に斷行しがたい問題であつたに相違ない。然しこれ亦磨勒まろく爺ぢいやが譯無く片付けてしまつた。「若様、何も屈托する事アねえだ。この娘さんの胸がかう確と定つたからにア何でもありアしねえ」

妓は大に喜び勇んだ。磨勒は妓の手回りの荷物を三度にも運び出した。そして夜が明けけない内にと、男女二人を脊負つて、又ヒラリ／＼と十幾つかの高塀を跳り躡えて外へ出た。門番も夜廻りも誰も見咎める者とはなかつた。それでともかくも女は崔生が手許に匿かくくまつた。

夜があけると彼の屋敷では大騒ぎになつた。況して無類の猛犬まで無残にも殺されて

ゐる。

「この邸の塀も垣も潜り入るやうなところは無い筈、門々の戸締りは嚴重だし、どうしても飛踰えて賊が這入つたものらしい。それにしても足跡一つ附いてゐないのは、屹度小泥棒の所行では無い、大俠の仕事に相違ない。これは汗濁に噂も立てられないぞ。後の祟が困るから」と主人は一同をいましめた。

二年が間は彼の美人も崔が家に隠れ通したが、ツイ花時に浮れ出し、車で曲江の苑林に遊んだのを、運悪く元の主人の元勳邸の誰かに見付けられて、所在を知られてしまつた。それが主人の耳にも入つた。變な話だと思ふから主人は崔生を呼び寄せて問糺した。生は恐縮してしまつて、事細かに發端から打明けて、磨勒が負ひ出した次第を物語つた。「いや、何れにしてもあの女の罪過ぢやが、然し君のところ引續き召使つてるとあれば、今更ら咎め立てする事もない。だがその爺やは是からもどんな事仕出來すか判つたもので無い、天下の人の迷惑の種は除かねばなるまい」

武装した者五十人を遣はして、崔が家を取圍ましめ、磨勒を擒にしようとした。ところが爺さんは少しも恐れず、匕首一つを持つて躍り出した。その飛び回る捷さは、飛燕

大俠の仕業

花に浮かれて見付けられる

罪は女、問題は奴隸

磨勒逮捕

か鷹隼かと思ふばかり、多勢が雨の如く矢を射かけるが一つも中らない。さうかうしてゐる内に彼が姿は見失つてしまつた。

崔が家人共も今までさうした爺やとは知らなかつたので、一同呆るゝばかりだつた。元勳は事を荒立てたことを悔い、それからは多勢に劍戟を執らせて邸宅を衛つたが、別に仇をするでもなかつたから一年の後にはその用心もやめた。

その後十年餘り経つてから、磨勒が昔のまゝの姿で、洛陽の街に藥を賣つてゐるのを見た者があつた。

崑崙奴はくろんぼとしておいた。馬來人種だといふ説もあるが、唐時には支那と西部及南部亞細亞との交通が盛んであつた。多分印度人が中央亞細亞を経て支那へ來るので崑崙の名を附せられたのであらう。

賣人の妻

唐の王立といふ人は餘干縣(もこ餘汗さかく)の役人であつたが、作成した文書に失錯が

賣人の妻

十年後の磨勒

縣官の零落

あつた、め弾劾されて免官となつて長安に歸つた。それからといふもの資財は食ひ減らすし、召使どもは四散するし、頗る悲境に陥つた。已むを得ず毎日トボ／＼と寺院へ出かけては、お供物を貰つて食つてゐるといふ状態であつた。

情意投合

或夕、例の如くお寺から歸る途中、一人の美人を見た、その女は王が前になつたり後になつたりして、跟いて来るものゝやうであつた。ツイ何方からともなく口が解けて、何かと話して見ると忽ち情意投合した。王はその女をつれて我が佗住居に歸つて、一夜の間に睦しい夫婦となつてしまつた。

朝になつて女は王が餘りに貧窮なのを知つた。

「こんな苦しい暮し方ではお話になりません、私は裕かではないけれども少しは持つてゐますから、貴方さへ御承知なら何とかして上げようぢやありませんか、それとも私が附いてゐてはおいやですか」

王、女を評
かる

「私は第一お前の人柄が氣に入つたし、その上仕送りまでして貰つては勿體無い話だが、私は何時何處で行倒れにならうも知れない境遇だから、さう／＼お情に縋るわけにも行くまい、一體お前は何をして暮してなさる」

女の身の上

あなたを引
取りませう

「私は元々商人の女房でしたが、十年前に亭主に死別れました。ですけれども商買は引續きやつてゐます。朝から店の方へ出かけ夕方宅へ歸りますが、一日に三百文儲けるとやつて行けるのです。貴方は是から未だ官途にも就かなければならないのに、それへ出る入費も無いやうに見受けられます。若し私のやうなものでも鄙しめないで一緒に私の宅に住んで下されば、この冬の選叙期まで待つてゐらつしては如何です」

信用と優遇

王は早速賛成して女の家へ行つた。誠に小ジンマリと行届いた住居で、奢らず吝かならず頗る落着が良い。女は錠や鍵の類まで悉皆王に預けて少しも疑はないのみならず、相更らず毎朝店の方へ稼ぎに行くのに、屹度一日中の食物を料理して王に宛がつて出る。そして夕方店から歸つて来る時は、米や肉や錢や、帛地きんぢなどを持つて来て王に差出す。それが毎日缺かさずさうするので、王も追おに氣の毒になつて、せめて食事の世話だけでもさせる爲に召使を置かうと勤めるのだが、女は何彼と言ひ逃れて雇はうともしない。何しろ行届いた女なので、王は強いて言ふことも出来ない。

一子を擧ぐ

一年経つて子が産れた。店から乳を飲ませに歸つて来る外、少しも變らず稼いでゐた。斯うして凡そ二年はすぎた。

或日の事、店から歸るのが例になく晩れて夜になつた。さうして落着かない態度で、暫く言ひ出しかねた様子だつたが、

實は仇のあ
る身

「實はね、私は冤仇かたきを持つてゐました。それはく、骨身に沁みて恨んでゐましたが、今日といふ今日、一念を晴らしました。けれどももう茲にもおられませんかから私は姿を隠さなければなりません。どうか是からお身體からだを大事に一奮發して下さい。こゝに錢五百緡こはを置きます、それから證文などは皆あの戸棚に藏しまつてあります、此家の中にあるものは皆貴方のものです。夫から赤坊は伴れて行かれませんが、貴方の胤だから貴方面倒を見てやつて下さい」

赤ん坊は王
の手に

女の手提袋
には生首

涙を拂つて暇を告げた。王は引留める事も出来ない。女が提げてゐる袋には人の首が入つてゐた。

「驚かなくとも宜いんですよ、貴方に御迷惑のかゝる事ではないんだから」

女は笑ひ乍ら袋を提げて、垣を飛踰えて出た。宛ら鳩のやうに身軽だつた。王は驚いて門へ見送りに出たが、既に見えなかつた。已むを得ず入つて庭前をウロウロしてると、女は又立戻つて來た。門へ走り出て、

「どうしたく」

も一度坊や
に乳を

「も一度赤坊に乳を飲ませて行きませう、お別れに……」

と子の部屋へ行つてあやしてゐたかと思ふと、又急に出て去つてしまつた。

王が燈を取つて帳の中を見ると赤坊は既に首と胴とが斬り離されてゐた。

王は驚き恐れて一夜眠られなかつた。それから召使を雇ひ、自分は近郊へ移つてその後の様子を伺つたが、何時まで経つても何の音沙汰もなかつた。後に王は官途に就き家を賣つて赴任した。それから後の事は判らない。

怪し、坊や
の首がない

虬 鬚 叟

呂用之が揚州にゐた頃、渤海王を佐けて政事を擅まゝにし、妄りに人を害したりして怨府となつてゐた。

呂用之の暴
虐

僖宗きそうの中和四年の秋、劉損といふ商人が一家を擧げて大船に乗り江夏から揚州へやつて來た。呂は逸早くこれに目をつけて劉が動靜を窺はせてゐたが、劉の妻裴氏はいしが頗る美

人であるので、先づそれを奪ふ計畫を立て、夫の劉を某疑獄の嫌疑者として引致投獄して了つた。さうして裴氏を召して妾とした。然し財産家の劉は百兩の金を差出して獄を出ることが出来た。呂の暴戻を憎む事甚しいが、何しろ相手が權勢を恣にしてゐるのだから手對ひが出来ず、纔に三首の詩によつて悶々の情を洩すだけであつた。

寶釵二つに分れては縁なからん

魚は淵に沈み鶴は天に在り

得意の紫鸞、鏡の前に舞はず

跡を断てる青鳥箋を啣み來ず

盆の水は已に覆りて復た收め難く

玉軫長へに抛つて絃緊められず

若し靡蕪山下に向つて過ぎなば

遙に紅淚を以て窮泉に灑がん

鸞は遠樹に飛んで何處にか棲む

鳳は新巢を得て已に心に稱ふ

紅粉尙ほ存す香霧々々

白雲初めて散じ信沈々

誠に知る點汚 泥に投するの玉

猶ほ自ら經營す賣笑の金

此より山頭、人石に似

丈夫の形狀涙痕深し

嘗て遊びし處は漏く尋ね看る

生別なれども死別に同じ

買笑樓前、花は已に散り

畫眉山下、月猶ほ残れり

雲は巫峽に歸りて音容断え

路は星橋を隔て、越え行き難し

詩成りて涙滴らざるを怪しむ勿れ

盡く東海を傾けても亦乾かん

虬鬚叟現は

或日劉は船の窓から晩れ行く水を眺めてゐると、龍の如く鬚多き一老人を見た。その翁は歩くこと頗る元氣で、意氣軒昂といった風があり、眼光鋭く、顔色は輝り耀いて凛として白い。船の中へ飛び込んで来て劉に挨拶し、

『何かひどく酔ぎ込んでるやうぢやが、一體どんな譯があるのぢや』

と言つてくれた、劉は頼もしい老人と思ふから、詳しく事情を訴へた。

『さうか、では先づその妻君と百兩とを取戻さなくちアいかんな、だがさうすれば此處には居られなくなるから、船を出す準備をして置くが宜いぞ』

劉は、その口吻から察して、屹度この翁は俠士だらうと思つた。

『あなたはさうやつて絶えず人民の不幸を救つておやりになるでせうが、世間不平の根本を除いては頂けませんか、あゝいふ好物が安泰でゐては人民は何時までも苦しみますから……』

『ウン、あの呂用之といふ奴はお前の大事な妻君を掠め取るだけでなく、外にも澤山の人を殺したり財を奪つたりしてゐるから、天誅を加へるのは更に難くはない。實際彼奴の罪科は數へられない程で神人共に怒つてゐる。だが未だ冥府の神の斷罪が済まないか

天誅を加へ

子孫七代迄の嚴罰

大聲呂を罵る

ら、それが済んだ上で首を刎ねる事にならう、それも呂自身が死ぬのみでなく、多分祖先七代まで溯り罰を蒙らねばなるまい。まづ今日はお前の妻君を取戻るのが急務なんだ、神意を出し抜いで殺す譯にも行かんからなア』

老人は呂用之の家へ入ると、柱の上の斗組まきぐみに身を潛め、恐ろしい聲で呂を叱つた。

『呂、汝は君親に背き、妖術を行ひ、良民を虐げ淫亂を事としてゐるのみならず、生きながら神仙たらんことまで希つてゐる。實に不埒千萬な奴ぢや、今に冥官が汝が罪を録して上帝自ら刑罰を加へようとしてゐられるところぢや。その罪に伏する前に先日奪ひ取つた劉氏の妻とその財寶とを早速元の持主へ返すのぢや、これでも色に耽り財を惜んで戻さなければ、天罰を待つまでもなく、唯一撃に汝が首は落して見せるぞ』

家中に響き渡るやうな聲で叱りつけると、早やその姿は見えなかつた。

呂は震へ上つてしまつて、香を焚いて天に謝し、その夜早速役人に命じて妻と金とを劉損が船へ送り届けさせた。

それを受取るや否や、劉は天明も待たず、纜ともなを解いてこの地を去つた。彼の龍鬚の翁も亦迹も留めなくなつた。

呂ふるえ上がる

呂用之が名は荆十三娘が傳にも出てゐる。

易 水 行

何景明

寒風夕吹易水波。漸離擊筑荆卿歌。白衣灑淚當祖路。日落登車去不顧。秦王殿上開地圖。舞陽色沮那敢呼。手持匕首摘銅柱。事已不成空屬倨。吁嗟乎燕丹寡謀當滅身。田光自刎何足云。惜哉枉殺樊將軍。

紅 線

唐の潯州の節度使薛嵩が家に、腰元の紅線といふのがゐた。

彼女は阮咸(絃樂器)を善く弾く女であつたが、それよりも經史に通じて學者であつた。

主人の節度使も彼女を只の腰元として取扱はず、官公の文書類を掌らしめ、特に内記室と號してゐた程だつた。

或時軍中に大宴會があつた。興を添へる爲の奏樂の中で、一つ羯鼓の音のみを聞き咎めた紅線は、主人の薛嵩に、

『あの羯鼓の音だけは酷く悲哀の音色でございます。あの樂手に何か事情がありませうと思ひますが』

と訴へた。嵩も元來音律には明るかつたので、

『さうだ、お前が言ふ言ひだね』

薛はその羯鼓を撃つてゐる男を喚び寄せて、何か事情は無いかと訊ねて見た。その男は、

才藝すぐれた女秘書

鼓の音に吉凶を識る

「さう仰しやつて頂けばお隠しも致しませんが、實は昨夜愚妻を亡くしました、然し今日の御宴會に差支へてはと思ひまして、休暇も願ひませんでした」といつたので、嵩は驚いて早速その者の歸宅を許してやつた。

その頃は肅宗の至德(號年)の後、即ち安祿山の亂がやつと片付いたばかりで、河南河北は未だ安寧でなかつたから、潯陽(ふやう)を以て駐屯地とし、薛嵩は此處を守つて山東を抑へてゐた。大亂後朝廷では各節度使の互に疎隔することを慮つたのか、相互姻戚となつて相結ばしむる策を取つた。即ち朝廷の命で嵩の娘は魏博の節度使田承嗣(でんしやうし)の子息の妻となり、嵩の子息は滑臺の節度使令狐章の娘を娶つてゐた。

三箇の要鎮が互に斯ういふ關係になつたので、使者の往來は自然頻繁であつた。が然し形勢は決して平穩でなかつた。

魏博の田承嗣は病身であつた。常に潯州のやうな涼しいところにゐたら、自分の命も數年を延ばすことが出来るだらうと考へてゐたが、遂に薛嵩を逐ひ潯州を併呑しようといふ策を立てた。そこで武勇常人に十倍するものを軍中に募つて三千人を得た。これに外宅男(ぐわいたくだん)の稱を與へ、俸給手當を厚くし、その中から三百人づゝを當直と定めて官邸に置

安祿山の亂後

結婚政策

潯州併呑策

紅線薛の關を問ふ

偉いことを言ふ

魏城に乗り込む

き、機を見て潯州へ乗り込む手筈にした。この事を探り知つた潯州の薛は大に心配し狼狽して途方にくれた。

或夜薛は案じ悶えながら庭前を歩いてゐた。側には紅線一人が附いてゐた。

「旦那様はこの頃御食事もお進みにならないし、何やら御心配事があるやうにお見受けしますが、お隣(魏博を指す)の事ではございませんか」

「重大事件でお前なんか口を出す事ではないよ」

「私は成程賤しい身分ではございますが、しかし旦那様の御心配の種を除くくらの事は出来ますつもりでございますが……」

「偉いことを云つてくれた、實はお前にさうした覺悟があらうとは知らなかつたので、わしは全く愚昧なわけさ。實はお前が察しの通り魏博の田承嗣が、精兵を卒ゐて此處へ押寄せようとしてゐるのぢや、わしも父祖の跡を繼いで國家の重任に當つてゐるものだが、今にしてこの支配地を人に奪はれたら、先祖代々の勳功も消滅して了ふわけだ、それでわしも大に心を痛めてゐる」

「その事なら御心配遊ばしますな、なに、旦那が御苦勞なさいます程でもございません

萬事は歸つてから

私が先づともかくも魏城に参つて見まして、その様子を探つて見ませう。唯今は未だ宵の間ですから、これから参りましたら夜明前には歸つて御報告致しませう。良い馬を一つと、何か田氏に當てた機嫌尋ねの挨拶を一通お認め下さい。その外は私が歸つてからの事に致しませう』

『お前はさういふが、旨く行かなければ却つて禍を早めることになると思ふがね』

黄金雀の釵

『御安心遊ばせ、私が参りまして失策することがありますものですか』

紫緋の上衣

紅線は自分の部屋に入つて仕度にかゝつた。髪を梳り黄金雀の釵を飾り、紫緋の上衣を着け、飾り沓を履き、龍の意匠を施した匕首を胸に懸け、額に太一神の名號を記して頂き、すなはち駿馬に鞭打つて出た。

薛は室内へ入つて戸を閉ぢ、燭に背いて正坐した。平常は極めて少量の酒しか飲まないのに、この夜に限つて飲めどもく酔はなかつた。その内に曉近くなつて角を吹く聲が聞え、木の葉が落ちる音がした。はつと思つて起ち上ると、そこへ紅線が歸つて來た。

『やあ、御苦勞々々々、何うだつた都合は？』

上首尾です

『はい、首尾よく』

『人を斬つたりしはしなかつたか』
『いゝえそれまではやりません、枕頭から金の香盒を證據に持つて参りましただけでございます。』

大軒で熟睡

……昨夜三更に魏城へ着きました。數々の門を歴て節度使の寢所へ忍び入りましたから、先づ外宅兒どもが宿直して居る室を覗きますと、皆大軒で寝ておりました。庭の方には番卒どもが互に何やら喚びかはして居る聲が聞えました。私は見澄して寢所へ入つて見ました。田の大旦那は太鼓を轉がしたやうになつて熟睡してゐられました。

七星劍の飾

……犀角の美しい枕に、髪を黄絹で包み、枕頭にも七星劍を飾り、その劍の前には金の箱があつて、その蓋を開いてあるから中を見ますと、生年月と北斗神の名とが記してありました。その重しには名香美玉を置いてありました。

寢室のだらしなさ

……斯うして暢々と安眠して一命の瞬時に迫つて居るのも知らずにゐられるのを見ましては却々手を下せるものではありません。蠟燭の煙は微に四邊を罩め香は燃盡して仄かに匂ひ、近侍の女たちはあたりに亂れ横つて、武器も亂れ混つてゐます。或者は頭を屏風に突きつけて高軒をかいてゐますし、或者は手帕で煽ぎく寝てゐます。誠に亂次

香盒を證據

ない寝相でした。私はその人々の簪を脱いたり耳飾を取外したり、或はその裾を捲つて置いたりしましたが、驚き醒める者は一人もございませんでした。

……それから私は香盒だけを證據に取りまして城門を出ました。途中銅雀臺の時つを見ましたり、漳水のほとりに傾く月を林間にあるを見ましたり、往きには心忿つて氣もつきませんでした。還りは喜びながら風物を眺めて参りました。これも偏に旦那様の御恩徳に酬います次第で、往復七百里、申さば敵地の五六城を通つたわけでございますが、大抵御心配はあるまいと存じます、努々苦勞には存じません」

そこで薛は公然と使者を魏に送つて、書面を田承嗣に與へた。その文面には、

『昨夜客あり、魏中より來りて云く、元帥の牀頭より一金合を獲たりと、敢て留め置かず謹んで却し納む』

と認めた。使者は星の如く飛んで夜半に魏に到着した。魏では苟も將軍の枕頭から物を盜取られたのだから、腹も立てば心配もありザワめいてゐた。使者は鞭で門を叩き時ならぬ時だが將軍に謁したいと申入れた。

田承嗣は出て使者に逢つた。そこで薛の手紙と金盒とを差出した。これを受けた田は

使者星の如く飛ぶ

金盒を得て田承嗣す

謝罪狀

紅線暇を乞ふ

前生は男子

驚き倒るゝばかりで、先づ使者を請じ入れて、表立つた使でなく内輪同志のやうに懇ろに働はり、且つ數々の賜賚を與へた。それから又特使を仕立て帛三萬匹馬二百匹、その外種々の珍異を贈物として潞州へ遣はし、薛に傳へさせていふには、

『拙者の首級は全く貴下の恩惠によつて維がつてゐます。暗殺を免れたのは貴下の賜です。私の方には誤解もありましたが、それらは一掃して御心配をかけないやうに致します。今後すべて貴下の指導を仰ぎ、姻戚の義を厚くし、互に親睦を專と致しませう。所謂外宅兒は元來盜を禦ぐ用意でありましたが、これも誤解を招かないやうに、早速武裝を解かしめて歸農させませう。』

これで双方心解けて、互に音信を絶たなくなつた。

或日突然に、紅線が暇を貰ひたいと申し出た。

『お前はわしの屋敷内で生れた者ではないか、暇を取つて何處へ行くつもりなのだ。わしはお前を頼りに思つてゐるから、暇などいふことは考へたくもないのぢやが』

『私は前の世では男子だつたのでございます。江湖に遊學しまして、些さか醫書を読み病人を救つてゐました。その時分に或る孕女が腹に腫物が出来ましたので、その毒を下

薬の盛り違ひから女に墜された

すために荒花酒を服用せしめました。さう致しますと、お肚の子二人と母親と皆死にました。つまり一擧に三人を殺した事になりました。その罰を蒙つて女に墜され、賤しい召使にされました。

十九年の主

仁政を勧む

……生れつき卑しく出来てゐますのに、旦那様のお屋敷に生れまして早や十九年が間柔かい着物ばかり着て、旨しい食物ばかり食べ、御寵愛を蒙つて誠に冥加至極の事でございます。その上に御領地は正しい政事で治まりますし、めでたい限りでございます。こゝで天意に背き我意に募るやうなことでもあつたら、取返しのかぬ事になります。先頃魏へ参りまして聊か御恩に報いしましたが、あの時以来お互にお睦々、双方とも平穩に治まつて萬民安堵致してゐますのは、不束な女の私としては手柄の内でございます。……この俗世界を離脱し、心を物外に置き、心氣を澄して長く存らへるのは今思ひ立つべき事だと存じます』

初志を練さず

『尤な話だが、然し千金を以て仙術を修むる所を設けてあげようではないか』
『でございますが、何しろ來世になつて始めて判る事でございますから、この世で豫め

謀ることは出来ません』

惜別の宴

薛嵩も到底紅線を抑留する事は出来ないと思つたから、盛大な送別の宴を、官邸の大廣間で催ほした。薛は紅線に酒を勧め、客の冷朝陽に送別の詞を綴らせた。

採菱の歌は怨む木蘭の舟

客を送りて魂消ゆ百尺の樓

洛妃が霧に乗りて去るに似て

碧天かぎりなく水空しく流る

歌終りて薛は悲みに堪へない様子であつた。これを見ては紅線も拜し且つ泣いた。尋常にしては別れ難きを察して、紅線は酔つて座に堪へぬ真似をして席を立つたまゝ、行方不明となつた。

虬髯客

隋の煬帝が都を出で、江都に幸した時、西京には司空の楊素を留めて守らせた。

虬髯客

帝を凌ぐ楊
素の振舞

一布衣の李
靖楊素を囚
ます

紅拂を捧げ
た一美妓

楊は天下の權望我が一身に集ると思つて、人も無げなる振舞が多く、その日常は殆ど帝王を借する觀があつた。例へば公卿もこれを迎へず召し入れて逢ひ、調を乞ふ者に對して曾て牀を下らず、侍婢を左右に羅列するなど、人臣の分際を顧みなかつた。その驕り貴ぶる心は次第に増長し、然も眞に國家を負うて危急存亡に想を回らす氣はなかつた。後に唐の太宗を輔けて衛國公に封ぜられた李靖が、當時未だ一布衣の身を以て楊に謁して獻策したことがあつた。その時も楊は例の如く牀上に樂々と踞まつて面會した。『天下是れより益々亂れ、英雄到る處に競ひ起たうとする今日、公は帝室の重臣として人心收攬を念とされなければなりません、踞して賓客を見るやうな尊大なことでは、英傑は公の下に集りません』

と李靖は臆する事なく直言した。楊は理の當然に怒ることも出來ず、慌たしく起ち、容を正して陳謝した。そこで李靖も心解けて共に時勢を論じ策を獻じ、楊も大に悦んだ。靖が雄辨を揮つてゐる時、紅の拂子を手にした一美妓が、傍に在りて頻りに彼を見成つてゐた。靖が退出すると、その妓は軒近く出て下僚を呼び、『今歸つて行くお方は何番目に生れた人か、お住居は何處か、よくお尋ねしておいで』

李靖逆旅の
珍客

紅拂の妓で
す

未曾有の
士に會は
ぬ

あの人も下
り坂です

と命じた。靖は問はるゝまゝにそれに答へて出た。妓は復命を聞いて口の中で幾度も繰返してそれを言つてゐた。

その夜更に李靖が宿に訪ねて來た者があつた。扉を叩く音も四邊を憚るやうに密々としてゐた。起き出で、見ると、紫衣にして帽を頂ける人が杖に囊を附けて立つてゐる。

『誰方ですか』

『私は楊家の紅い拂子の妓でございます』

靖は驚いて、ともかくも内へ入れた。客は上に着てゐた衣を脱ぎ帽を捨てると、十八九の非常な美人であつた。そして靖に對して恭しく拜をした。靖も周章で答拜した。

『私は楊司空に久しく召使はれてゐますから、隨分天下の名士といはるゝ人々も見ましたが、今までつひぞ貴方のやうな方をお見受けしたことがございません。諺にも日蔭の葛は喬木に托して生ずとやら申します。私は貴方のお側近く仕へたいと思つて、脱け出して参りました』

『でも楊司空は今天下に並ぶ者もない權力家ではありませんか』

『もうあの人もだめでございます。下り坂でございます。大勢おました歌妓たちも、愛

想を盡して、追々に逃げ出します。それでも自分の威望が既に墜ちかけたのを知つて、さういふ時でも追手をかけたりは致しません、その邊は私も良く見抜いてゐますから、些も御心配下さることはございません』

『あんたの姓は？』

『張でございます』

『何番目？』

『長女でございますの』

註 呼び名に關係するから、初對面の時其兄弟中の何番目か訊く必要があるのである。

靖は熟々其女を見ると、肌色といひ、姿容といひ、言葉遣ひといひ、氣象といひ、誠に天人と稱すべきであつた。意外にも斯う云ふ美人が舞ひ込んだので、靖は嬉しくもあり又心配でもあつた。どうも京に留つてゐては氣が揉めるから、彼女を伴れて奔ることにした。二人は馬を馳せて太原に歸らうとする途中、靈石といふところの旅舎に泊つた。臥床を展べてから爐中で肉を煮てゐた。それが煮える間に張氏はその地に垂れる程の黒髪を解いて、床の前で梳つてゐた。靖はその間に馬の手入れをして刷子をかけてゐた。

美人を得て
李靖惑ふ

靈石の宿に
赤髯の怪く
の客

赤髯の客

其處へ龍のやうな赤髯の人が、驢馬に乗つて來て、靖等が借りてゐる所へツカ／＼と入ると、荷物の革袋を爐の前に放り出し、平氣で枕を取出して横になりながら、張氏が髪を梳いてるのをマジ／＼と眺めてゐた。靖は怪しからん奴が闖入したと大に腹を立てたが、暫く我慢してまだ馬に刷子をかけてゐた。張氏はそれと悟つて手眞似で、此は怒つてはいけないと靖へ合圖をして置いて、先づ手取早く髪を束ね襟を正して、扱その臥ころんでゐる客に問うた。

『貴方の姓は？』

『張だ』

『おや、私も張ですよ、妹で御座いませう』と恭しく拜して置いて、

註 同姓の人は兄弟姉妹の禮を執る、無論女が年下と分つてゐるから、かう言つ

たのである、兄弟順で三男ならば三兄といふ。紅線は長女だから、後に一妹とよばれる。

『御兄弟は？』

『わしは三番目だが、お前さんは？』

『わたしは女では惣領ですの』

名乗つて見
たら同姓

「さうか、今夜は仕合せと妹が出来たわい」
「もしくあなた、私の三兄にお逢ひなさい」と戸外の靖を呼んだから、彼も入り来つて客を拜した。三人車座になつた。

「何だか御馳走が出来るやうぢやが、何の肉かい」

「羊の肉ですの、もう煮えたでせうよ」

「わしは大層お肚が空いてゐる」

三人の親しい會食

靖は戶外へ出てパンを買つて來た。客は腰の匕首を抜いて、今煮た羊肉を切り裂き、三人して食事をした。剩つた肉は驢に食はせた。さて客は靖に問ひかけた。

「お前さんの旅姿を見るに、先づは貧士らしい、それにしては何うして斯ういふ美人を獲て歸るのぢや」

「私は貧乏はするが志はある。他の人がそんな事尋ねたからとて決して打明けけるんでは無いが、兄じや人のお尋ねとあれば隠すこともあるまゝ」

靖は張氏を伴れて都を立避く經緯を話した。

異人と見て打明けける

「それでは是から何方へ行くのぢや」

「太原へ落着くつもりです」

「宜しい。皆天命ぢや。時に酒は無いかな」

「この宿の隣は酒屋です」と靖は早速酒を買つて來て、互に又汲み送はした。

「さうく、わしは此處に少しばかりだが好い酒の肴を持つてゐる、どうだ、お前も少しやつて見るかな」

「頂きますとも」

革袋を開くと人間の首が一つと心臓とが現れた。その首の方は袋の底へ放り込み、心臓を匕首で切刻んで共に喰つた。

「この人はね、天下の心に負いたので、十年も覘つてゐたが、今度やつとやつけたのだ、是で憾は釋けたのぢや。」

……お前の骨相を観ると眞の丈夫だ、時にお前が行かうといふ太原に、偉い人がゐるといふ話は聞かないか」

「以前にさういふ人を一人知つてゐます、私は是こそ眞人だと思ひます、その外にも人物はありますが、要するに將帥に過ぎません、帝王の器と思ふのは一人です」

佳有あり生
首一つと心
臓が一つ

帝王の器は
唯だ一人あ
り

「その人の姓は？」

「私と同じで李です」

「幾歳だ」

「未だやつと二十歳です」

「何をしてる人だ」

「州將の令息です」

「どうもその話らしい。わしも是非逢ひたいものぢやが、お前が逢はしてくれるか」

「私の友人に劉文靜といふのがあります、それが大層昵懇にしてゐますから、その人に頼めば逢はれます、だが然し兄じや人はその人に逢つてどうします？」

「いや、雲氣を相る者のいふにはね、太原に不思議の氣が立つてるから行つて来いといふのぢや、お前は何日頃太原に着く見込なのぢや」

「さうですね」と靖は日を數へて見た。

「わしは明日太原へ着くつもりぢや、それではお前があらへ着いたら、夜明に汾陽橋で逢はうぜ」

太原に雲氣
動く

劣驢飛ぶや
うに走る

言ひ捨て、ヒラリと驢に乗ると、そのよぼくの驢馬が飛ぶやうに駆けて、忽ち姿を見失つた。靖と張氏とは共に驚喜して、

「烈士は決して人を欺かないものだ。あの人には畏れないで従はなければいけない」

彼等も道を急いで太原へ入り、約の如く彼の赤髯の張と出逢つて大に喜び、相伴つて劉文靜を訪ねた。故意と詐つて、

「非常に善く人相を見る人が、李家の若様を相たいといふから伴れて来た、若様を此處へ迎へてくれ給へ」

劉は赤髯を一見して既に偉い人だと思つてゐたのに、人相を善く相ると聞いて、早速使をやつて李淵の子世民（即ち後の唐の太宗）を迎へさせた。使が歸つて幾くもなく世民はノツソリとやつて来た。

上衣も着ず赤も履かず、皮衣を着てゐる。それで神氣揚々として全く凡人の相でない。赤髯の張は黙つて末座にゐて世民を見てゐたが、殆ど茫然自失したやうであつた。辛と靖を招いて

「これが眞の天子ぢや」と囁いた。一同は劉が家を辭した。虬髯（赤髯の張をいふ）は、

唐の太宗の
相を見る

赤髯と共に
劉文靜を訪
ふ

馬行東の酒樓で再會の約

「先づ八九分通りはわしにも判つたが、然し道の兄たる人に一度逢はなければならぬ。お前たちは二人で又都へ行つて、某日に馬行東の酒樓へわしを尋ねて来い。其處にはわしの此驢と、も一つ瘦せた驢が繋いである。それがわしと道兄と二人でその樓に來て證據だから、早速樓上へ上つて來たが宜い」

斯ういひ置いて去つてしまつた。靖と妻の張氏とはこの約束を違へず訪ねて行くと、果して驢馬が二匹繋いである。樓上へ上つて見ると虬髯と今一人道士と對座して酒を飲んでゐた。靖等が約の如くやつて來たのを喜んで、自分たちの卓と一緒に坐らせ又酒を煽つた。

十萬錢の錢櫃を妹を匿せ

「此樓下に錢櫃を置いた、中には十萬錢を入れてある。何處ぞ人知れぬところへ妹と錢櫃とを駐めて置いたが宜い、そしてお前とは又あの汾陽橋で逢はうぜ」

と靖に言ひ置いてその日は別れた。

世民來り滿座風生ず

約束の日に靖は又太原の汾陽橋へ行つた。果して虬髯と道士とが其處に彼を俟つてゐて、相俱に劉文靜を訪ねた。その時劉は碁を打つてゐた。乃ち手紙をやつて世民を迎へた。道士が文靜と碁を圍み、虬髯と靖とは傍に觀てゐた。其處へ世民が來た。その風采

は人を驚かす程で、悠々と坐に就いた姿は、實に神氣清朗、滿坐風生するものであつた。道士は初めて世民に逢つたので、一見すると全く力を失つたやうに碁石を捨て、

「この一局は全く負けだ、此處で下手なことをしては浮ばれない事になる、これだけでやめにしよう」

天下は貴公のものではない

と辭して外へ出た。道士は虬髯に對つて、

「この天下は貴公のものではなかつたわい。どうもあの方が本物だ、だが貴公もそれを恨とせず大に勉めるさ」と慰めた。

一行は又京へ向つた。虬髯は靖を顧みて

「お前が京へ着くのは某日頃だらう、着いたら翌日に妹の張氏と一緒に、斯々の小路の宅へ訪ねて来いよ」

と云ひ残して先へ行つてしまつた。

靖も馬を急がせて都へ歸つた。約の如く張氏を伴れて教へのまゝに、とある板扉の門を叩いた。人が出て來て、

「主人の命で永いこと李さんとお嬢さんをお待ちしてゐました」

始めて見る
赤髯の邸宅
の宏壯美麗

と案内した。幾つも門を潜るに従つて次第に宏壯美麗になつた。婢が四十人庭前に羅列して彼等を迎へ、奴二十人して導いて奥殿へ入つた。その殿中の設備の美しさ、珍奇を極めたもので、衣裳や装身具、冠、鏡など人間界の物とも思はれない。櫛笄や化粧道具まで皆揃へてある。

「お二人ともお召替を」といはるゝまゝに装ふと、その衣裳が又頗る珍異のものばかりである。身仕度が出来た頃、

虬髯亦た王者の威容あり

「主人が参ります」といふ聲がして、其處へ立出でたのは虬髯であつた。その紗帽に袈の着こなしは是れ亦た堂々として龍虎の状があつた。靖等の來たのを喜び、自分の妻をも引合せた。是も天人のやうな人だつた。

李夫妻に贈る二十臺の錦繡と目錄

二夫婦對座して數々の料理で食事を了ると、歌妓が澤山で樂を奏した。飲食も伎樂も正に天上界にあるの想がした。それから食後の酒となつた。ところへ家人等が臺を二十も昇き出して竝べ立てた。その蔽へる錦繡の覆を取ると、臺の上には帳簿目錄と鍵の類ばかり積んであつた。

「是だけの財寶金銀、わしの所有の悉皆を擧げて今二人へ贈るのぢや。實はわしも此世

眞の英主太原の李氏に仕へよ

界で大事業をやるつもりで準備した。二三年もしたら一功業は建てられるだらうが、然し此の天下に主たるべき人は既に外に現れたのぢや、わしが出る幕で無い。太原の李氏は眞の英主で、三五年の内に天下は定まるだらう。靖は心を竭し力を盡したら必ず榮達人臣を極めるであらうし、妹も夫と共に顯榮を極める事にならう。遺はこの妹でなければ靖を見抜く事が出来ないし、又靖だけの人材でなければ妹を見出す事も出来なかつた。二人相逢つて夫婦となるのも、聖賢世に出で國運興るのも、虎嘯いて風生じ、龍吟じて雲萃ると同じく決して偶然の事ではないのぢや。茲にわしの贈物を受けて眞の人君たる人を輔佐し功業を立てなければいけないぞ。

今後十年東南方事あり

……今後十年、東南數千里の外に何か異事があらう、それを傳へ聞いたら此兄が志を得た秋ぢやと思つて、二人は酒を東南に漚いで祝つてくれ」

虬髯はそれから僮僕一同に命じて二人の前に拜をさせて、

「この二人がこれからの主人ぢやぞ、良く仕へるんだぞ、よいか」
言ひ訖るとその妻と奴一人とを従へたゞけで馬に騎つて門を出た。數歩にして早やその姿は消えた。靖夫婦は忽ち豪家となつて太宗の建國に非常な輔けとなる事が出来た。

出門數歩にして姿を失ふ

扶餘國の劫

李夫妻東南に向つて盃を擧ぐ

毬戯と闘雞

唐の太宗の貞觀十年には李靖は果して左僕射で宰相の事を司つてゐた。その時南蠻から入貢した者が奏していふには、

「此頃千艘の軍艦に十萬の兵を乗せて扶餘國へ責め入つた者がありまして、國王を殺し自立して國內を治めて居りまする」

これを聞いた靖は、これこそ虬髯に相違ないと、自邸に歸りて妻の張氏にも話し、衣を改め酒を供へて東南に向ひ祝ひ拜した。

李靖が屢々功を奏した兵法は、半ばは虬髯が傳へたものだとも稱せられる。

馮 燕

馮燕は魏の人だが父祖の名は知られな。少年から意氣を尙び任俠を事とし、常に毬戯や闘雞で勝敗を楽しんでゐた。

或時金錢上の争から喧嘩が起つたのを聞きつけ、燕はその場へ駆けつけ、邪しき方を搏り殺した。その爲に市内に居られず田舎へ匿れてゐたが、尙も官から搜索されるので、遂に魏を後にして滑へ逃げた。

賈相國に見出さる

將軍の妻と私通

扉の外に落した頭巾

頭巾と刀の間違い

滑へ來た燕は軍中の少年に交りて同じく雞毬に耽つてゐた。その頃相國の賈公耽が同地に在任して、燕が才能を愛し軍中に留まり屬せしめた。

或日燕は途上で一婦人が戸に倚り袖を翳して彼を見てゐるのに氣が付いた。それが頗る美人であつたから、彼は早速人を介して意中を傳へさせると、婦人は忽ち應じて彼と通じた。その婦人は實は滑の軍將張嬰といふ者の妻であつた。

嬰は妻の不義を知つて大にこれを折檻したので、妻の身内の者は却て深く嬰を怨んでゐた。或時嬰は同僚と宴會を催ほしてゐた。燕はこれを知り不在に乗じてその妻の寢所へ忍び込んだ。そして寢室の戸を閉めて置いた。嬰が外から歸つて來た。妻は處置に困つたが衣の裾に燕を隠し、戸を開いて夫を内へ入れた。燕は小さくなつて裾の中から小蔭へ隠れ、扉の後に逃げ込んだ。ところが燕は狼狽して頭巾を枕の側に落してゐた。嬰は酔つて居てそれに氣付かず直ぐ眠つてしまつた。

燕は聲を立てられないから、唯指してその頭巾を妻に取らせようとした。その指した方には刀もあつた。妻は頭巾を取らず刀を取つて燕に渡した。燕は不義をしてゐながら

馮 燕

もこの妻の圖太さに呆れてしまった。燕は却つてその妻の首を斬り、頭巾を拾つて逃げた。

親戚の誤解

翌朝嬰は目を醒すと、側に寝てゐた筈の妻が斬殺されてゐるので仰天した。官に訴へようとしてゐるところへ、近隣から駈けつけた人々が嬰を下手人と認めて搦め取つてしまった。其處へ死んだ妻の身寄の人々も集つて来て、平常嫉妬のために妻を打擲したり、不義の名を誣ふたりして、今遂に殺して了つたのだ。他人が殺したのなら、同じ臥床にある嬰が全く無事な譯が無い、何といつても下手人は此男だといふので、散々に答うつたが、何とも反證の無いことで辨解のしやうがない。その内に地方廳から裁判官やら捕吏やら數十人出張して、彼を引致して行つた。

燕躍り出づ

見物が千人餘りも集つて彼の顔を見てゐるところへ、突然大聲あげて飛び込んだ者がある。

『お役人待つて下さい、無實の罪で人を殺してはいけません。彼が妻を竊んだ上に殺して了つたのはこの私です、その人を釋して私を縛つて下さい』

是即ち燕であつた。役人どもは處置に迷つて、一切を賈公に訴へた。公は豫て燕が才

相國燕の意氣に感ず

能を愛してゐた人、一旦彼は不義に陥つたが、嬰が妻の不敵な所業を悪んでこれを斬り、更に我身を抛つて他の冤を雪がんとする意氣に感じ、都へ使者を遣はして

『燕が人を殺した罪は明かであるが、然し事情斯々であるから、我が官職を奉還して燕が死罪を贖ひたい』

と奏せしめた。帝はこれも亦義であるとして、詔して滑城の死罪該當者の命を免ぜさせた。

急 使

最大急行の上京

古廟の佛壇の下に休息

四川の武官某は公用書類送達のため、一日最少限三百里といふ急行上京をすることになつた。十二月も半ば過ぎて、日が短いに困つた、ある日の晩がた、古廟の畔を通りかゝつた。少時休んで月でも出てから歩かうと馬かり下りた。廟に入つて行くと徑は枯草落葉に埋もれて人影も見えない。佛殿も荒れ果てゐる。殿後は老木の森であつた、そこに馬を繋いで件の武官は佛殿に上り、佩刀を解いて佛龕の中に置き、佛壇の下に寝具

を展げてやつとゆつくりした。

間もなく馬蹄の音が聞えて、次第に近くなつて廟の前で停まつた。隙間からのぞいて見るともう月が出てゐる、来たのは一人が乗馬で、長い髯が胸まで垂れた五十年輩の堂堂たる風采で、後に従いてゐる若者は徒歩だ、其れも立派な相貌である。老漢は馬から下り廟廷に入つて、柱に馬を繋ぎ、佛殿の前の階段に褥を鋪かせて端坐した。若者は側に直立したまゝ、落ちつかぬそぶりであつた。やがて老漢は若者を叱りつけて、

「俺は若い折から天下を横行して、人の物は我が物と、くらして来たが、併し取るには取る道がある、非道な真似をした例はない。妄りに淫殺を肆にすれば天の譴がある。俺が今日まで三十餘年の間、幸ひ法網を逃れて居るのは此の心掛けを忘れなかつたからぢや。然るに汝が入門して来て、俺の此の掟が亂されようとは思ひがけなかつた。此間の仕事の折、もし俺が獨り殿後に居なかつたなら、お前等二十餘人のうち、一人でも生きることが出来たと思ふか」

「ハイ、左様で……全く、先生のお蔭で命拾ひをしたと、一同感謝致して居りますので、ハイ」

老漢と若者の恐ろしい問答

と恐縮すると、老漢は冷笑つて、

「後で聞けば、其の家には年少い寡婦が居て、操を立てゝ子供を育てゝゐたといふではないか。それを汝は母親を凌辱して子供まで殺害したぢやらうがな。そんな毒惡殘忍な所業は、人が聞いてすら憤怒に堪へぬ、まして天が決して見逃されう筈がないわい。一時僥倖に天網を遁れても、終に罪科を免れることはできぬ。實に吾黨に累を及ぼす奴ぢや。考へても見い、これでも俺が汝を恕せると思ふのか」

若者は大地に平伏して、

「まことに相済みません、どうか御勘辨なさつて……御存分に御處罰を願ひます……」と答へる若者の面に唾を吐きかけて、

「まだも生命を助からうと思ひ居るのか。聖人の道は恕の一字の外はない。恕とは思ひやるといふことぢやぞ、汝の家の妻子がもしあのやうな凌辱と慘虐とを被つたとしたら、怎麼ぢや、もはや多言は無用ぢやツ」

といひながら、佩刀を引抜いて若者に手渡し、さてあらためて、

「速に双に伏して寡婦に陳謝し、併て死んだ子供の靈魂を慰めるがよい」

急

使

盜賊道徳と若者の自殺

と申渡した。

若者は刀を押戴いて、我れと我が手に剄ねて死んで了うた。老漢は起ち上り、屍を見やつてやゝ暫く嘆息の後、刀の血糊を拭うて鞘に納め、再び馬に跨つて去つて了うた。佛殿の内から、おそろしながら覗いてゐた彼の武官は、やつとおのれに返つて老漢の言つた事を考へて、いかにも盗にも道は有るものだと思服した。やがて夜半も過ぎた頃、月明に鞭を擧げて、再び上京の旅をつづけた。

海賊船

廣州の李某と呼ぶ男が、寧波から上海への便船に乗つた。乗合の客は五十人餘であつた。中に一人少年が居つたが、容貌が綺麗で且つ上品であつた。李と隣合せに座を取つたので、お互に談話を交はし、李から姓名を尋ねたのであるが、其にははつきり答へなかつた。

さて航海を續けてゐるうち、或時少年は李の耳に近く、

乗合舟の奇客

船員の内魂
が只者でな

「君は、この船員共がどんなやつだか知つてゐますか。」

とさゝやいた。李は全く知らないと思へると、

「君は旅慣れない方だから、道中の難儀を御存じない。僕はだん／＼注意してゐたのですが、極めて不良な奴原で、舵工も篙師も、悉く面に殺氣を露してゐるのが、僕の眼には能くわかります。前程を考へ見るに一つの島があります。そこが一番危険な場所です。その島に船を停めずに往けば、もう心配はいりませんが……これだけの事をよく含んで居て下さい」

といはれて李は喫驚して、「もしそこに碇泊したならどうなるか」と尋ねると、少年は笑ひながら

「黙つてお出なさい。僕が居る以上、奴等どうすることも出来はしません」

李は半信半疑ながら、姑く成行を窺つてゐた。やがて船は島に到着した。日はまだ四時頃であつたが、船頭共は果して碇を下ろし、船を停めた。乗合の客人等は、

「まだ日暮には間がある、船を出せ、何で停船するか」

と口々にいうたが、船頭共は返答すらしめない。客人等がわや／＼と喧騒し始めるのを

僕が居れば
心配なし
果然時なら
ぬ停船

件の少年は目で制止した。

此處は孤島であつて、他に停泊してゐる舟とて、一艘も見えない。船頭共は食事の仕度をして、自分等ばかり飽喫して、乗客へは管はない、催促をする者があつても聞かぬふりをしてゐた。

日が暮れた。客は皆ひもじくてたまらなくなつた、俄然船頭共は鋭い刀を抜きつれて、乗客の前に聲を荒ららげ、

「此地は大切な場所で、海賊が出没するところだ。お前等が所持の金目のもの残らずさ、らけ出して、俺たちに預けて置くがよい。でないと後悔しても追付かぬぞ」

乗客には大きな商人が多かつた、多額の金銭を所持してゐるので、顔を見合はせて驚いた。

「私等は斯うして一つの船に乗合はせた以上、患難を共にするは覺悟のまへです。銘々、聊かの所持金はあります。萬一の場合に出會したら船頭衆の働きを頼まなければなりません、幸ひ賊難を免れた節には、十分の謝禮は致します。併し今の中から金銭を預かつて貰ふにも及びますまう」

海賊正體を現はす

船客の當惑

船頭共は目を瞑らして、

「汝等は今死ぬのぢや、それにまだつべこべと饒舌り居るのか。金銭に生命を取られうと思ふのか」

と罵つて、更に仲間同志で

「速く片づけて了へ」と呼ばはつて、刀を抜連れて亂入して來た。乗客一同顔を見合はせたまゝ、策の施しやうもなかつた。

李は少年の傍に寄添つて、心配の胸を押へて居た。すると少年はやをら起つて、船頭共を睨めつけて、

「これくばかはやめい。汝等、歩家の兄弟を知らぬのか」

と一喝すると、船頭共は卒然容を改めて、

「はいく。恐れ入りました。」

少年は尙も言葉をついで、

「多勢亂入して、一體何の眞似を爲る氣ぢや」

と叱りつけさま、突然腕を揮うて、最も獷悍な船頭共五六人を、海へ突き落した。其

少年客の
一喝
海賊縮み
上る

見損なつた

の勢に船頭共は縮みあがつて、刀を投棄て、皆跪いて命乞ひをした。少年は一語をも發しないので、船頭共は益々恐れ、前額を舟板にすりつけて、

『全く知らぬことゝて御無禮を致し何とも申わけがござりませぬ。私共が別に船一艘買つて参り皆様を上海までお送り申しますから、どうぞ御勘辨のほどをお願い申します』と詫入つた。すると少年は、

『さうあやまる以上、暫くゆるしておかう、併し別に船を買ふには及ばぬ、此の船でさしつかへない。もし再び悪念を萌した節は、決して容赦は致さぬぞ』

乗客の待遇
改善

船頭共は畏つて退出した。そして急いで酒肴の用意をして、乗合一同を款待した。その後航海中神妙に氣を注げて乗客の世話も行届いた。

無事に上海に到着した。乗客一同は深く少年を徳とし、申合はせて謝禮をしようとするのであつたが、少年は笑つてこれを辭退した。李は是非お禮に行かうと思つて、内々に其の住所を聞いたけれども少年は

遂に住所氏
名を乗らす

『僕は住所不定です。君のお住所を伺つておけば暇な時に伺ひます。』と言ふので、李は詳細を告げて相分れた。

「其の後三日目に、少年は果たして李を訪問して別れを告げた。李は少年の行先を尋ねたけれども言はない、竟に少年の何人たるかは測られなかつた。

劍と革囊 (燕赤霞)

金華の荒寺

浙江の霽采臣といふ、慷慨清廉の士で、『自分の行には決して表裏がない』と大に高標

無住寺に棲
む偉丈夫

して居る男があつた。金華へ行つた時、北廓のある寺に落付いた。殿堂はなか／＼壯麗だが、境内は草茫茫と荒れ果て、人の出入る氣配もなく、東西の僧房の大戸は引立て、ある、南の一隅だけが、人が出入ると見え新らしい錠が掛かつて居た。本堂の東側、竹藪の茂つた下の池には蓮の花が咲いて、愛すべき幽香を放つて居た。靜寂が何より嬉しい。暫く下宿を頼まうと、住職の歸りを待つて、あたりを散歩して居ると、日暮方、誰か來て南の扉を開る音がした。霽は往つて挨拶し、下宿の申込をすると、

『さうですか、此處は空寺で坊さんは居ません。私も宿つて居るのだが、あばら家でもよいなら、一所においでなさい』

月下の閑談

『どうぞ宜しく』
と藁を敷いて蓆代りにし、板をならべて机にし、滞在の支度をした。その晩は月が非常によかつたので、二人は廊下に對ひ合つて物語りに更かした。

「御姓名は」

「姓は燕、字は赤霞と申します」

霽は、此人は受験のために來てるかと思つたが、其れにしては浙江の語音で無いから、御國はと訊いて見たら、『私は秦(陝西)の生れです』と答へた。舉動もなか／＼純撲で氣持の好い人間だつた。少時快談して各自の寢所へ引取つたが、霽は初めての宿ではあり、寢心地が落ち着かず、まだ目を開いて居ると、その建物の北の隅に人聲が聞える。そこに住む人があるらしい。起きて北側の窓下から覗いて見ると、低い牆の外に小さい家があつて、四十許の女と、も一人の赭黒い衣類を着たひどいよぼ／＼の老婆と月明の下でひそ／＼話して居る。

「お婆さん、あの小侍はどうしてまだ來ませんか」

「もう参りますよ」

老女の囁き

恍惚さ浮き
出た妖艶な
美少女

「お婆さんに怨み言ひはしませんかね」

「言ひません。けれども困つてる様だよ」

「あまり心安くならせたいけませんよ」

話のうちに十七八の娘が來た。目の醒めるやうな美人だ。婆さんは顔を見て、
「噂をすれば影だ、今話して居たのよ、そつとやつて來るんだもの、悪口言はなくてよかつたね——マア綺麗な姐さんになつたこと、まるで繪に畫いたやうだ。ほんに私が若い男だつたら、魂を取られて了つたでせうよ。」

「お婆さんでも譽めてくれなければ誰が好く言ひませう」

それから何を話したか判らぬが、霽は隣同志の無駄話だらう位に思つて、床へ潜り込んだ。話聲は少時して聴えなくなつたが、何となく氣がさして寢そびれて了ひ、睡らうとする目覚める。と、誰か寢所へ來たやうだ、起き上つてよく見ると、さつき見た娘小侍だつた。霽がびつくりして尤めると娘はなまめかしく笑を含んで

「月が冴えて寐られないので参りました……」

霽はきつと坐りなほして、

突如として
少女の來訪

勇士艶情を
知く

「ばかな。一足踏み損ねたら一生の破滅ですぞ」
「夜です、知れるもんですか」

霽がまた叱り飛ばしたら、小侍はもち／＼してまだ何か言はうとするので、
「往かないかッ、聴ないなら隣室の人を呼び起すぞ」

之に懼れて女は極り悪るさうに外へ出たが、又来て金を一包み霽の褥しとねの上にそつと載
せたので、霽は引摺んで外へ擲なげ付けた。

「穢しはしい、不淨な金なんど……」

娘は黙つてその金を拾ひながら

「ほんとに金佛石地藏だ」

吐出すやうな捨てせりふを敲き付けて出て行つた。

翌日、蘭溪生といふ男が下部一人連れて、この寺の東の建物へ宿つた。ところが、そ
の晩突然死亡した。屍體には足心つちこみのところこゝろに小さい錐で刺したやうな孔があつて、微に
血が流れて居たが、何ういふのか誰にもわけが判らなかつた。翌晩は又残つてゐた下部
の男も頓死したが、それも同じ死状であつた。

下宿客の頓
死

燕赤霞妖怪
を説く

小侍の怨訴

夕方燕赤霞えんせきかの歸るのを待つて、霽が此の話を詢いて見ると、燕は「化物だらう」とい
つた。霽は化物など、ばか／＼しい話だと思つて氣にも留めなかつた。夜になると、ま
た例の小侍が入つて來た。かう言つた。

「私は澤山の殿方にも曾ひましたが、あなたのやうにしつかりした偉い方は始めてです
聖人、賢人、實に立派なお方です。何を隠しませう、私は聶せつと申すものですが、十八の
歳に死にまして、この寺へ瘞うづめられました。ところが妖怪共えんぐわいに脅迫され、いや／＼なが
ら賤しい役目を勤めさせられて居ります。かうした顔を人に晒すのも決して喜んでして
居るわけではありません。もうこの寺には殺す人が盡て了りましたから、今度はあなた
に夜叉やしやを差向けるでせう」

霽生は駭おどいた。

「何うしたらいゝだらう」

「さうですね。向ふの燕えんさんの部屋へ一所にお寐みなさい。さうすれば大丈夫でせう」

「どうして燕君へは掛からないんだ」

「それはあの方は異人だから近寄れないんです」

鬼物が人間
を取殺す手
段

「人を取り殺すのは、一體どういふ方法か」

「それは私の色仕掛に乗る人は、寄り添うた時隠かに錐で足を刺せばぼんやりなつてしまひます、そこですつかり血を搾つて、妖怪共の飲料に供るのです。その手段で行かぬのは金を出すのですが、あれは本當の金ではありません。羅刹鬼の骨なんです。あれを側に置くと、心肝を截取つてしまふのです。この二つの手段は時と場合、相手の人柄を見てやるのです」

甞は感謝して、尙ほ警戒すべき時を訊ねたら、明晩だと答へ、別れに臨んで小情はさめ／＼と泣いて甞に訴へた。

幽冥の苦海
を救くつて
くれ

「私はこんな地獄の毒海に落ちて、岸へ上らうとしても、何うしても上れません。あなたは實に義侠の方とお見受しますが、私のこの苦海の苦を救つては下さいますか、私の白骨を拾つて行つて、墓へ葬つて戴けるなら、何よりも嬉しく思ひます」

甞は毅然として

「よろしい。骨は何處に在るのか」

「白楊の梢に烏の巢のあるのが其れなんです」

さう言ひ了つて悄々と門を出て往つた。

明る日、燕が外出せぬうちに、早く往つて案内をいひ直に酒肴を馳走して十分機嫌を取り、さて一ツ部屋に寐てもらふやうに頼んだが、燕は「静寂が好きだから」と同宿を断はつた。けれども甞は管はず、自分の寝具を持込んだので、燕は已むを得ず同宿することにした。さうして斯う言つた。

「私はあなたを紳士と見て大に敬意を拂つて居る次第だが、ここに少し譯があつて、打明けにくいことがあるのです。どうかこの僕をあけて見るやうなことを爲されぬ様に願ひます。さうでないとお互の爲にならぬことがあるから」

と念を押し、件の僕を窓近くに置いて、枕に就いた。少頃すると雷のやうな騒が始まつた。甞は初更近くまでうとうと／＼睡れずになると、窓の外に誰やら來たらしい、頭を擧げて見ると、怖ろしい鏡のやうに光る目で窓から覗き込んで居る者がある。ぞつとして燕を喚起さうとすると、篋の中からさつと白い物が飛び出し、窓の上の石の窓縁へ打ツ付かつたと思ふと、すつと篋へ入つて了つた、まるで電光の如く。

すると燕がむつくり起上つた。甞は寝たふりをして細目で見て居ると、篋の物を取

妖魔の争闘

不可犯の秘
儀

し、月明りで検べて居る。ぎら／＼白く光る——長さ二寸ばかり、幅五分ばかりのものだつた。また幾重にも丁寧ていねいに包んで篋けいへ納め、

「ふざけた妖魔め、篋を壊しをつた」

とまた寝て了つた。可怪おかししい。霧は起出した。

「どうしたんです」

「御交際を願つて居るからは、何を隠しませう。私は劍客です。あの石の窓縁まどぎしがなかつたら妖魔の奴やつ即死するところだつたんだが、でも深痕いたでを負つて居ますよ。」

「その篋の中味は一體何です」

「劍です、さつき嗅いだら醒かつた」

霧が「見せてくれ」といふと取り出した。實に明煌々たる一口の短劍だ。霧は感心して了つた。

翌朝出て見ると、窓外に血の跡があつて寺の北門まで續いてゐた。そこには累々と數多の荒れ墓がある。白楊があつて、上の方に烏の巢がある「成る程これだ」と思つた。始末をして遣らねばならぬと思つたので急に歸り仕度をする、燕は特に別れの酒宴ま

窓外に淋漓
たる血痕

偉丈夫是れ
劍俠

で催して、慇懃な好意を寄せ、破れた草袋を取り出して、
「これは劍の袋です。これさへあれば妖魔が寄り付きません」
と饒別にくれた。霧は序に祕術の傳授を受けたいといふと、
「あなたは如何にも信義剛直の人だから、教へて上げてもよいが、まだ富貴中の人であつて、道中の人ではありません」といつた。

霧は妹の墓だといつて小情の骨を掘り出し、荷物の中へ入れ、舟で郷里へ歸り、家の近くに立派な墓を建て、埋葬し、土を掩うた上、懇に弔つて歸らうとすると、後から誰か呼ぶ。振り返つて見ると小情だつた。大そう嬉しがつて、

「ほんとにあなたの御親切、十度死んでも御恩報じは出来ません。どうぞ連れてつてあなたの母さんや皆さんに紹介して、お側に置いて下さい。どうぞね」

といふ。透き徹るやうに美しく、しなやかな姿、細い爪先、夜目でも美しかつたが、晝の光でまともに見た美しさはまた格別だ。同道して歸宅し、次の間に待たせ、霧だけ入つて母にその話をする、母もびつくりした。折柄霧の妻が病中だつたので、母が

小情の白骨
を負うて歸
國す

幽鬼人間に
現はる

相伴つて歸
宅す

「驚くといけないから黙つておいで」

といつて居る處へ、すらりと女が入つて来て丁寧な辭儀をした、

「お母さん、これが小情です」

霽の紹介で一目見て母もびつくりした。

「親も兄弟もない一人ほつちでございます。若様には大變なお世話になりましたから、お側に置いていただいて、御恩返しがいきたいと思います」と存じます」

箕箒に侍
んで恩に報い

といふ。言葉使ひから舉動のあまりに美しく愛くるしいので、母は言葉も出なかつた。「いろ／＼悴をお世話下さつて有難う御座いますが、此れは獨子の跡取ですから鬼妻を持たせるわけには行きませんでな」

「お母さんの御心配は御尤です、妹として兄さんと思つて、お屋敷うちに朝夕御用をさしてただけませんか」いぢらしい言葉、母も承諾をすると「嫂さんにお目に掛つて」といつたが、母は「病中だから」と斷つた。

いぢらしい
言葉

女はすぐに臺所に入つて母に代つて炊事をする。あちこちの房室に出入をするのが居慣れた者の様であつた。日が暮れたので母は歸つて休むやうに言つた。小情は退いて、

霽の部屋の前を通つて入らうとしたが、また引返して戸外にもぢ／＼してゐる。霽が呼込むと「劍氣が怖い」といつた。霽は氣が付いて、例の革囊を取り別室へ懸けたので内へ入り少時燭の下、霽の前へじつと坐つて居る、

「どうしたの本でも讀むか」

「はい、わたし楞嚴經をすこし誦めるのですが、もう大抵忘れて了ひました。そのうち一冊求めて、夜にでも兄さんに教へていただきませう」

「よからう」

また話が絶えた。十時過ぎにならうと思ふ頃、黙つて立つて行く。

「どうしたの？」

「知らない國のお墓で一人ほつち、何といふ淋しさでせう」

墓穴へ歸る
心の淋しさ

「サア、この部屋は寢臺は一つきりだし、兄弟だつて一所には困るしな」

小情はしほ／＼と起つた、泣きさうに、力ない足許も懶げに、靜かに門を出て階段の處まで行くと、姿はすつと見えなくなつた。

霽は可愛さうになつた。呼び留めて別の寢臺に寢せてやらうとは思つたが、母に叱言

母に仕へる
忠實さ

夜が明けると、女はもう甲斐々々しく盥に水を取つて母の含嗽に出し、座敷の内外の掃き掃除から、些細事まで、母の氣に入るやうまめ／＼しく立働らいて、夕方になるとまた寢の部屋に来て經を読み、もう寢の寝む頃を計つて、遣る瀬なさ相に悄然と歸つて往く。

幽霊さは思
はれぬ

寢の妻が長い病で、母の骨折は容易でなかつたが、小倩が來てから、すつかり世話が抜け、老體も榮々したので、密に徳とし、だん／＼馴れて自分の娘の様に親しんで來た。もう毎晩一人で還してやるのが可哀さうになり、とう／＼泊めてやるやうになつた。小倩が此處へ來てから、半年ばかりも決して飲食をしなかつたが、漸く薄い粥などを啜るやうになつた。

寢の妻病死

幾ばくもなく寢の妻は死んだので、母の心の内では小倩を後添のちぞひにとは思ひながら、それでもまた萬一悪いことがありはせぬかと氣になつた。小倩にはそれが判つて居た。

「最早一年もお世話になり、私の心もお判りになりましたでせう、人に祟らうといふ氣

人格の光に
依り幽冥を
清めん

などは少しもありません、若様について参りましたのも、たゞ若様の磊落な御精神、明かなお心ばへをお慕ひ申すので、私も三四年もお側に居て封誥ほうごを戴く様になりたいものだと思つて居ました」

官が貴くなれば、其父母及び妻も封爵等の禮遇を受く、生者には封誥といひ、

死者に對しては封贈といふ。

此うした述懐を聞き、母も健氣なものだとは思ふが、鬼妻に子が得られ様もないので、それを考へて居ると小倩は語をついで、

「子供は天の授けものです。若様には立派な福分がおありです、配偶さへあれば、お子様は三人生れます。妻が此の世の者でないからとて、定まつた數の子は生れます」

といつた。母はこの言葉を信じ、寢に相談すると、寢は非常に喜んだ。佳き日を選び、結婚披露の宴を開いて、親類の誰彼を招ぎ、その席で花嫁が始めての挨拶がある。小倩が立派に化粧をして座敷へ出ると、一同はその美しさに驚いて了つた。神仙ではないかと思ふばかりだつた。それ／＼の贈物を差出して「おめでたう」を述べる。新婦は得意の蘭や梅の繪を揮毫して、一々返禮に贈つた。貰つた親類は大喜び家寶にして藏つて置

華燭の盛典

幽冥より人間に近づく

くといふ騒ぎであつた。

ある日小倩は部屋の窓際に首うなだれて、ぼんやりと考へ込んで居たが突然、甯に、

『日外の革囊は何處へやりました』

『あれか、お前が怖がるから、包んで餘所へしまつてある』

『さうですか、私は大分しばらく人間生活をして居りますから、もう怖くありません。枕許へ掛けて置いて下さい』

『どうして？』

『この二三日、何だか胸騒がして爲やうがありませんの。ことに依るとあの金華の寺の妖怪共が、私が娑婆へ遁げて來たのを恨んでると思ひます。今日明日にも尋ねて來はしないかと心配で堪りませんわ』

劍仙が人を容れる囊

それではと、甯が別室から提げて來ると、じつと見入つて、

『此の袋は劍仙が人を盛る器ですがネ、こんなにぼろ／＼になるまでにはこれまで何程人を殺したか知れますまい。私がかう視て居てもぞつとします』

といつた。枕許へ掛けて置いた。次の日は戸の上へ掛けてくれといふ。その通りした。

深夜の怪音

夜叉劍の俠威に伏す

夜、二人が燭の下に對ひ合ひ『睡らずに居てくれ』と妻のいふまゝに起きて居ると、がたんと鳥のぶつかつた様な音がして何か墮ちたものがある。小倩は驚いて幕の中へ隠れて了ふ。甯が覗いて視ると夜叉のやうなもので、眼光は電より凄く、口は血を甜めたやう。くわつと怒つて爪を張り、入口までやつて來たと思ふと、後ずさりして逡巡うて居たが、ちり／＼革囊へ近寄つて、爪を引つけて取らうとすると、囊から格然と一大音響を發してこれも鬼のやうなものが半身突き出て、夜叉を一攫みにして囊へ引込んで了つた。囊は元のやうに小さく縮つて了つて再び夜氣沈々たるものであつた。甯はたゞ息を殺して居ると、小倩が喜んで出て來た。

『マア怪我はしませんね』

二人で囊の中を見ると、四五升程の清らかな水が湛へてあるのみだつた。

數年後、甯は進士に及第し、小倩に二人、側室の腹にも一人生れ、それ／＼皆立派に立身した。

有外山王

明の成祖の初、各地に盜賊が多かつた。成祖はこれを憂へて、密使を四方に放つて偵察させ、或は地方の官吏に命じて鎮撫させ、それ／＼臨機の處置を取らせた。

山東の某巡撫が入覲した折、成祖から一幅の畫を下賜せられた。歸任の後ち其の畫幅を展べて視たところ、海上に重疊たる峰巒があつて、其の間に宮殿樓閣が見える。題詠もなければ落款もない。巡撫は朝夕その畫の意味を思索てゐたが、一日忽然悟つて麾下の最も精悍機敏な某遊撃(遊撃は武官名)を招寄せ、畫幅の摸本を渡し、「この島に盜賊の巨魁が居るゆる生きながら伴れて來い、成功すれば汝に重賞を與へる、出來なかつたら歸るな」と嚴命した。某は妻子に別れを告げて登萊方面(登萊は遼東半島と相對し海峽に數多の島嶼あり)を志して行つた。そして單身扁舟に棹して海上に乗出した。偶々颶風に遭遇して、何處とも知らぬ濱邊に流れ着いた。某は舟を捨て、岸べから山へと辿つていつた。すると向ひの山の森蔭に樓閣を見つけた。その形勢が畫幅の圖と略肖(略肖は)よつてゐる。某は氣を勵まして近寄つて見

恩賜の名畫
は盜賊逮捕
の謎

登萊方面に
出動

城門外で生
擒さる

引き川され
た女王の前

氣味悪い
待振り

たところ、王城とも想はれる宮殿であつた。某が周圍の形勢を眺めてゐる折しも、物蔭から壯夫等が現はれて、やにはに某を擲取り、幾重かの門を潜つて、とある檐下の柱に縛つて置いて、その旨を奥殿へ註進に及んだ。某は生命はないものと覺悟して、泰然として成行きにまかせて居た。するとまた壯夫に引立てられて、奥殿へと連れられていつた。そこには甲冑に躬を固めた武夫五六十人左右に居流れ、中央の上座に一人の美婦が坐つてゐた。年輩は二十あまり、珠冠繡袍あだかも后妃の威嚴を備へてゐた。やがて某に對して「何故あつて此の秘境に忍込んだのか」と叱りつけた。某は平伏して、「自分は客商の身で、難船のため思ひ掛けなく上陸致しました相濟ませぬ」と答へた。婦人はまたその生國を訊ねた。某は晋(山西省を指す)の産れだと答へた。

すると婦人は顔色を直して、我も晋の産であるといつて、左右に命じて繩を解かせ、食膳を與へなどして、「少らく逗留してゐるがよい、主人が戻られたなら送還してあげよう」と懇にいうた。某は謝辭を述べて左右に案内されて客房に通された。そして毎日款待されるのであつた。某は果して吉か凶か判断に迷つてゐた。

ある夜十時過頃、使ひの婢に案内されて婦人の室へ伺候した。すると婦人は某に對つ

意外な島主の身許

又意外婦人の身の上

大王の歸城

て、

「そなたは此處は何處で、主人は何者であるか知つてゐなさるか」

と尋ねた。某は全く存せぬ旨を答へた。すると婦人は、

「主人は海賊の巨魁で、此の山の名を有外山と呼び、主人は有外山王と名乗つてゐる。武力は衆に勝ぐれてゐる上に、一日に二千里の道を歩み、遠方の事を能く察知するのである。それゆゑ主人が戻つて来て、種々訊ねた節には、決して包み隠してはためにならぬ」と言聞かせた。某は婦人に悪意のないことを知つて、すつかり事實を打明けたのであつた。すると婦人は嘆息して、

「妾の家は大同城内に在つて、父は鉅萬の富豪であるが、妾は十六歳の折、今の主人に攫はれて此處に來たのである。爾が郷里へ歸つたならば、兩親によく申傳へて呉れるやうに」

と頼んだ。某は、萬一生還した節には、必ず婦人の命令に背かぬ旨を答へた。

ある日の晩方、西南の大風が吹起つた。大王の御還ぢやと、上を下へと混雜の様子であつた。新月の明りに透かして見ると、恐ろしげな容貌の大男が、甲冑姿で空中から

下りて宮殿に入つた。やがて奏樂が聞え、酒宴が始まつた様子であつた。

すると程なく使ひの者が客房に來て、某は其の者の案内で大王の前へ連れて行かれた。

某は體を少しかゝめて禮を施したのみで決して、跪くことを爲なかつた。大王は某に對つて、

「お前は何の官ぢや」

と訊ねた。某は

「遊撃の官を頂戴して居ります」

と答へた。すると大王は疊かけて、

「此處へは何爲に來居つたのぢや」

と問ひかけた。某は此處ぞと思ひながら、

「小官の長官である某巡撫公が、大王の御威光を慕ふの餘り、ぜひ一度尊顔を拜したいとあつて、それ故小官が使者に推參致した次第である」

と答へた。それから二三の問答を重ねた後ち、大王は篤と勘考して挨拶する旨を告げて、某を客房へ引取らせた。

追つて沙汰をいたす

王との問答

それから數ヶ月経つた頃、ある日某は大王の前へ召出された。衣冠に身を整へた大王は、親づから某の手を執つて大殿に案内した。殿上には數十の席が用意され、所謂三十二夫人を始め、部下の參謀武夫等が、綺羅星の如く居並んでゐた。大王は某を一々紹介した後ち、某を客席に着かせた。

丁重な送別會

やがて大王は巨觥を取上げて某に對ひ、

「今日は君の爲めに祖餞の宴を張つたのぢや。遠慮なく飲んで呉れるやうに」

というて、某と獻酬を重ねた後ち、大王は髯を振りながら一同に對つて、

「乃公が此の山中に割據して以來、もはや十餘年になる。本來は爾曹と共に大事を企てる望を懐いて居たのであるが、今や明の朝廷の部署が粗定つて、乃公の心底をも洞察居つた。乃公はもはや何の慾望もない。今度、某巡撫公の使者が此處に来て乃公を請待し居るのも、必ず朝廷の指圖に出たことに相違ない。乃公は此の使者と同行する。そして再び此の山中に還つては來まらぬ」

と語つた。これを聞いた夫人始め一同の者は、皆面を掩うて泣いた。そして大王に再び思ひ止まるやう懇願したのであるが、大王は、

王の別辭、
明に投降せし
再び歸山せし

家族の處置

「乃公はもう決心したのぢやから許せ。多言は無用ぢや。しかしたゞ一つ約束して置くことがある。此處を離れて某巡撫の許へ行つた上で、禮儀を以て待遇すれば好しさもなれば一月内外に必ず戻つて来て、再び計畫を立直さう。或はまた何人かの手にかゝつて大死するやも計り難い。もし一月内外に戻つて來ぬ節は、夫人等は各々勝手に身の振方をつけるがよい。所持の玉帛の類は家來ども一同で分配して、海に行くなり山に入るなりして、新たに生計の道を立てるがよい。ゆめ／＼未練を残し、躊躇して、自から禍を招いてはならぬ」

と言聞かせた。一同たゞ顔を見合せるのみで、一語を發するものもなく、やがて酒宴の席は解散された。

某と同伴で
舟出

翌日、大王は某を連れて舟に乗つた。一同の者に見送りを堅くさしとめて置いたのであつたが、大同の夫人一人忍んで見送りに來てゐた。大王は某を顧みて、

埠頭の夫人

「この婦人こそ君と同郷のものぢや。迷惑ながら故郷の兩親へ君から宜しく傳へて貰ひたい。この婦人の身邊の金銀珠玉だけでも、一生食ふに困らぬだけのものはあるに依つて、身の振方を宜しく頼むと傳へて貰ひたい」

と頼んだ。そして舟に乗出して島を離れた。大王は島の峯巒を振りかへつて、少時嘆息して、

興亡天の命なり

『燕藩（明の成祖も）がまだ天下を取らぬ頃のこと、朝廷の命に反抗するのを見兼ねて、一族の兵を提げて問罪の師を興さうと思つたことも屢々ある。そのうちに舊の主君は出奔してしひ、神器は燕藩の手に歸した。一家の物が一家に歸したのぢや。天命は人力の及ぶ所でない』

舟がはや山東の陸に近づいた頃、大王は某に對つて、

歸順の三條件

『日ならず陸岸に達したならば、君は先づ巡撫某公の許へ馳けつけて、三件の事を承諾させて来て貰ひたい。幸ひに承諾すれば好矣。もし不承知とあらば再び島へ引取るまでのことぢや。その三件の事とは、第一に、乃公が上陸したならば某公は文武官を引率し、郊外五十里の地まで出迎へること。第二は、巡撫廳に赴く途中、乃公は輿に坐乗し、某公は騎馬で先導すること。第三には、食膳に山海の珍味を供へ、演劇を命じて好酒を侷めること。たゞ此の三件を承諾すれば同行するが、不承知とならば同行せぬまでぢや』と言聞かせた。

某は委細畏つて、陸へ着くや否や直ぐさま馳けつけて、先づこの由を告げ、尋いで概略の復命を爲た。

巡撫は島主が來たと聞いて大に喜び、三件の事を快諾して呼び迎へた。そして約束通り毎日鄭重に款待した。

六人の子息を召す

一ヶ月ほど經つた頃、ある日島主は某公に對つて、公の令息はいづれも俊秀の由、何卒一見を願ひたいと申入れた。そこで某公は六人の男兒を召寄せて、島主の前に禮をさせた。島主は、ずらりと六人の男兒を見廻はして、骨相によつて一々其の將來を判断した。就中第四子の骨相が最も非凡で、必ず父君よりも出世する旨判断して、さて自分の佩劍を指しながら

流星の寶劍

『此の劍は吳の大帝の塚から出たもので、當時の六劍の中の一刃であつて、名を流星と云うたのは即ち此の劍である。これを爾に進ぜう』

というて其の劍を引抜きさま、自から對て死んで了うた。首は見事に斬れて地に落ちながら、胴體はすつくり起立つたまゝで、雙手で劍を捧げて、第四子に授けてから終に仆れた。

江 進 士

南京の江といふ新及第の進士が、北京に上る途中、或る驛舎に泊つた。獨酌をやつてゐると、頻りに雪が降つて來た、酷しい寒さで酒も凍るばかりであるのに、葛布を着て、素足で平氣にのそり／＼急ぎもせず街路の雪を踏んで來る男が見えた。

不思議な人だと思つて、つひ戸口を出て、其人に敬禮をしたけれども、答禮も爲ない、「貴公お寒くはありませぬか」と尋ねて見た、其れにも答へなかつた。

雪中單衣で
平氣

「どうです酒は。飲みませぬか」と言つたら、大きく點頭いてやつと歩を停めた。江は之にしほを得て、此人を宿に案内した。そして酒を進めると、飲むは／＼止めどなく呷る、食物も幾何でも喫べる、一向酔つた氣色も見えず喫べ飽きさうにもない。

禮儀に従つて、丁寧れいぎに姓名せいめいも尋ねて見たが、到頭一語も發しない。それで酒を罷めて、其の晩そこに其人も泊ることになつた。啞かとも思はれる、人品は卑しくない、いづれたゞの人間ではあるまい。

酒で親しむ

翌朝、江進士は出發して、北の方へ獨旅をつゞけた。三日目に突然彼の葛衣くまぎの人が現はれた、さうして始めて口を利いて訊ねた。

「君、あの大きな笠を冠つた、短い棒と提灯を携つた男が道側に立つて居るのを見なかつたか」

「見ました、坊主ぼくしでせう。彼が何ですか」

「彼奴がぢや。今夜、夜中に君の首を取りに來る奴ぢや」

意外な事を言はれたので、江進士は驚いた。旅行中往々強盜に襲はれる話は、有ることなので、怎麼したら好いか途方にくれ「どうかお助け下さい」と此の不思議な人に哀願するの外はなかつた。さうすると事もなげに、

「なに、俺が附いて居れば大丈夫ぢや、來たら彼奴、俺が斧の鑢きりぢや」

といふので、江は心強く、其晩一處に泊つた。さて彼かの人は江に安心して寝るやうに言つて、自分も横よこに爲つて居た様であつたが、夜半過ぎドタリと土間に擲なげだしたのは僧ぼんの首であつた、何時いつ怎麼したのやら江には判らなかつた。

「坊主ぼくし奴、不埒ふちだから殺つてしまつたのぢや。だが一體君があまり大金を携つてゐるも